

荒 木 前 遺 跡

新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書

1 9 9 1

亀田町教育委員会

序

この調査報告書は、亀田町城所1丁目地内で亀田町農業協同組合が行う宅地造成に伴い、工事の範囲となった箇所遺跡を記録保存するために、亀田町教育委員会が実施した荒木前遺跡発掘調査の記録であります。

亀田町は信濃川、阿賀野川、小阿賀野川に囲まれた平野の中央に位置し、かつては毎年のように水害に襲われた低湿地帯であった。東南にかけて亀田砂丘と呼ばれる砂丘があり、砂丘列を中心に遺跡が多数分布している。荒木前遺跡は亀田砂丘列上に位置し、遺跡は早くから周知されていたが、その名は遺跡というよりも、むしろ上杉家の一将荒木五郎衛左門為久のゆかりの地として知られていた。

発掘調査は、平成元年4月から8月にかけて実施され、平安時代、中世の多種多様な井戸や遺構、遺物が検出され、これらの貴重な資料が地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

この調査期間中に、現地説明会ははじめ、多くの人々が発掘現場に訪れ、埋蔵文化財についての理解が深まりました。また、『荒木前遺跡だより』を発行するとともに、『広報かめだ』にも掲載し、町の歴史が身近なものになり、学校教育・社会教育での活用を図ることが出来ました。

発掘調査に当たり御指導を賜った新潟県教育庁文化行政課、現地指揮と執筆にあられた調査担当者の渡辺ますみ氏初め調査員各位、発掘作業に従事された方々並びに亀田町農業協同組合には多大な御協力と御支援を賜りました。

ここに関係各位に対し、深く感謝の意を表すものであります。

平成3年3月

亀田町教育委員会

教育長 栗原一成

例 言

1. 本書は、宅地造成事業に伴う新潟県中蒲原郡亀田町城所1丁目甲613-1他に所在する荒木前遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は亀田町農業協同組合と亀田町教育委員会との契約に基づき、亀田町教育委員会が調査主体となって、平成元年4月17日から8月4日に実施した。

3. 発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体者 亀田町教育委員会(教育長 栗原一成)

調査指導 新潟県教育庁文化行政課(鈴木俊成)

調査担当者 渡辺ますみ(明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業)

調査員 廣野耕造(新潟大学大学院生)

小林高範(新潟大学大学院生)

作業参加者 東 義次、阿部一郎、阿部又衛、石附清也、池田良子、小川悦子、落合五夫、亀山昭吾、倉嶋佐誉子、佐藤恵子、斎藤幸子、斎藤澄子、新保弘美、諏佐美代子、武田昭和、田辺豊平、田村祥司、豊田セツ子、広島房子、丸山きみえ、箕山ミチ子、村木久子、保田代志男、山田七平、湯浅耕作、吉岡健太郎

整理作業員 池田良子、倉嶋佐誉子、斎藤幸子、丸山きみえ

事務局 藤田敏一(社会教育課課長)

斎藤國夫(社会教育課教育体育係長)

中林俊樹(社会教育課主事)

4. 遺物整理作業は平成2年1月5日から3月31日まで行われた。

5. 発掘調査費は亀田町教育委員会が調査担当者・調査員に係る費用を負担し、その他は亀田町農業協同組合が負担した。整理費用及び出版費用は亀田町教育委員会が負担した。

6. 出土遺物は一括して亀田町教育委員会が保管している。遺物の注記は略号として「AR」を付し、出土地点(グリッド名または遺構No)、層位(確認できた場合)を記した。

7. 石製品の石材鑑定は新潟県立教育センター地学研究室の村松俊雄氏にお願いした。

8. 本書の執筆はIを中林、他は調査担当が行った。編集作業は調査担当が担当した。

9. 遺物整理作業は、調査担当の指導の下、実測・拓本・トレースは、廣野、小林、池田、倉嶋、斎藤、丸山が行った。

写真撮影は調査現場で調査担当・調査員が行い、遺物の撮影は調査担当が担当した。

10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示、御指導、御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。(敬称略)

川村浩司、小池邦明、坂井秀弥、鈴木俊成、関 雅之、関塚英嗣、高橋 保、高橋保雄、田中耕作、田辺早苗、立木宏明、鶴巻康志、寺崎裕助、戸根富美江、戸根与八郎、中島栄一、藤塚 明、藤巻正信、本間桂吉、横山勝榮、渡邊朋和

県文化行政課、亀田町文化財保護審議会、亀田郷土地改良区、亀田町農業協同組合、佐藤測量事務所、丸克建設㈱

目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と地理的環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	5
1. 昭和63年度確認調査	5
2. 調査の方法と経過	6
3. 層 序	8
第Ⅳ章 遺 構	9
1. 概 観	9
2. 遺 構 各 説	9
a. 土 坑 ・ 井 戸	9
b. 掘 立 柱 建 物	22
c. 溝状遺構・畝状遺構	26
第Ⅴ章 遺 物	27
1. 土 器 ・ 陶 磁 器 類	27
a. 縄 文 土 器	27
b. 土 師 器	27
c. 須 恵 器	27
d. 舶 載 陶 磁 器	32
e. 瀬 戸 ・ 美 濃 焼	32
f. 瓦 質 土 器	32
g. 珠洲焼・珠洲系陶器	32
h. 越 前 焼	37
i. 転 用 砥 石	37
2. 土 製 品	46
3. 石 製 品	46
a. 砥 石	46
b. 石 臼	46
4. 錢 貨	46
5. 木 製 品	48
6. 泥 面 子	48
第Ⅵ章 ま と め	49
引用・参考文献	50

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の土地利用と確認調査トレンチ設定図(1/2000).....	1
第2図	新潟県の地形区分図.....	2
第3図	荒木前遺跡の位置と周辺の遺跡分布図.....	3
第4図	グリッド設定図(1/1000).....	6
第5図	土層断面図(1/20).....	8
第6図	遺構実測図(1/40).....	10
第7図	遺構実測図(1/40).....	11
第8図	遺構実測図(1/40).....	12
第9図	遺構実測図(1/40).....	13
第10図	遺構実測図(1/40).....	14
第11図	遺構実測図(1/40).....	15
第12図	遺構実測図(1/40).....	16
第13図	遺構実測図(1/40).....	17
第14図	遺構実測図(1/40).....	18
第15図	遺構実測図(1/40).....	19
第16図	遺構実測図(1/40).....	20
第17図	遺構実測図(1/50).....	24
第18図	遺構実測図(1/50).....	25
第19図	遺構実測図(1/50).....	折込み
第20図	遺構実測図(1/50).....	折込み
第21図	遺物実測図(1/3)縄文土器.....	26
第22図	遺物実測図(1/3)土師器.....	28
第23図	遺物実測図(1/3)土師器(18~27)土製品(28,29).....	29
第24図	遺物実測図(1/3)須恵器.....	30
第25図	遺物実測図(1/3)須恵器.....	31
第26図	遺物実測図(1/3)珠洲焼.....	33
第27図	遺物実測図(1/3)珠洲焼.....	34
第28図	遺物実測図(1/3)珠洲焼(104~106)越前焼(107~117).....	35
第29図	遺物実測図(1/3)越前焼(118)舶載染付(119,120)舶載青磁(121~128)舶載白磁(129,133, 134)瀬戸美濃焼(130~132,135~137,139,142,143)瓦質土器(140,141)不明(138).....	36

第30図	遺物実測図(1/3)転用砥石 須恵器(144~147) 珠洲焼(148~150).....	37
第31図	遺物実測図(1/2)砥石	44
第32図	遺物実測図砥石(1/2)(10~12)石臼(1/4)(13~15).....	45
第33図	銭貨拓影(1/1).....	46
第34図	遺物実測図 木製品(1/8).....	47
第35図	遺物実測図 木製品(1/8).....	48
第36図	遺物実測図(1/1)泥面子	48

図 版 目 次

図版 1	亀田町周辺空中写真(下が南)
図版 2	調査前の状況 1.北西より 2.東より
図版 3	1. SK28遺物出土状況 2. SE226
図版 4	1. SE43断面 2. SE44断面(上部) 3.同断面(下部) 4.同完掘状況 5. SE55断面 6. SE55完掘状況 7. SE44完掘状況
図版 5	SE45 1.断面 2.水溜(楕円形曲物) 3.同部分拡大 4.完掘
図版 6	1. SE50断面 2. SE49断面 3.同水溜(曲物)
図版 7	1. 2. SE83井戸側コーナー 3.同全体 4. SK48(左) SE47(右)断面
図版 8	1. SE47 2.同井戸側、水溜 3.同井戸側 4. SE52断面
図版 9	1. SE86断面 2.同完掘状況 3. SE63断面 4.同完掘状況 5. SE91断面
図版10	1. SK84(左)、SE85(右)完掘状況 2. SE85井戸側(?)部 3. SE227 4.同断面 5.同井戸側(桶) 6. SE93(左)、SE102(右)完掘状況
図版11	1. SK103断面 2.同完掘状況
図版12	1. SD9周辺(南より) 2. SD9と SB301周辺
図版13	1. I~L-5~8 附近遺構検出状況 2. J~L-9 ~15附近遺構検出状況
図版14	土師器(1/3) 土師器(1/3)
図版15	土師器・土製品(1/3) 須恵器(1/3)
図版16	須恵器(1/3) 須恵器(1/3)
図版17	須恵器外面(1/3) 同内面(1/3)
図版18	珠洲焼 珠洲系陶器外面(1/3) 同内面(1/3)

- 図版19 珠洲焼外面(1/3) 同内面(1/3)
- 図版20 珠洲焼外面(1/3) 同内面(1/3)
- 図版21 越前焼外面(1/3) 同内面(1/3)
- 図版22 越前焼、舶載磁器、瀬戸美濃焼外面(1/3) 同内面(1/3)
- 図版23 瀬戸美濃焼、瓦質土器他外面(1/3) 同内面(1/3)
- 図版24 転用砥石外面(1/3) 転用砥石内面(1/3)
- 図版25 砥石(1/3) 石臼
- 図版26 木製品(2～5 SE47横棧、右、SE47縦板)
木製品(9 SE83隅柱、右、SE83縦板)
- 図版27 木製品(6～8 SE227、右、部分拡大)
木製品(井戸水溜の曲物) 木製品(1、SE47出土 曲物の底板)
- 図版28 銭貨(1/1) 縄文土器(1/3) 泥面子

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表	4
表2 確認調査の遺物・遺構	5
表3 土坑・井戸観察表	21
表4 土器・陶磁器観察表	38

付 図

亀田町荒木前遺跡 遺構全体図

第I章 調査に至る経過

昭和63年5月に亀田町教育委員会（以下町教委という。）は、亀田町農業協同組合（以下亀田農協という。）が城所1丁目地内に宅地造成工事を計画し着手しようとしていることを知る。該当地に荒木前遺跡が存在するため、町教委はその対応について新潟県教育庁文化行政課（以下県文化行政課）から指導を受けた。内容は、亀田農協による埋蔵文化財発掘の届出と町教委による確認調査についてであり、どちらも必要ということでこの後亀田農協と協議する。

亀田農協は、昭和63年5月24日付、管発88号で文化庁長官宛に文化財保護法第57条の2第1項の規定にもとづく埋蔵文化財発掘の届出をした。

町教委は、昭和63年5月30日から5日間にわたり、遺跡の確認調査を県文化行政課の指導のもとに実施し、宅地造成予定地（2,000㎡）の全域が平安時代と中世を重複した遺跡であるという結果を得た。これをふまえ、町教委はただちに遺跡の取り扱いについて県文化行政課、亀田農協と協議したが、開発を回避することが不可能とのことで、宅地造成予定地の発掘調査による遺跡の記録保存が確定した。発掘調査体制、調査期間、調査体制については県文化行政課の指導を受けながら亀田農協と協議をかさね、渡辺ますみ氏からは調査担当者の承諾をいただくことができた。

昭和63年12月、平成元年3月、関係者による具体的な事項についての打合せ会が開かれた。

平成元年3月8日付、亀教社発56号で文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を行い、4月17日から8月10日頃までの予定で調査を実施することになった。



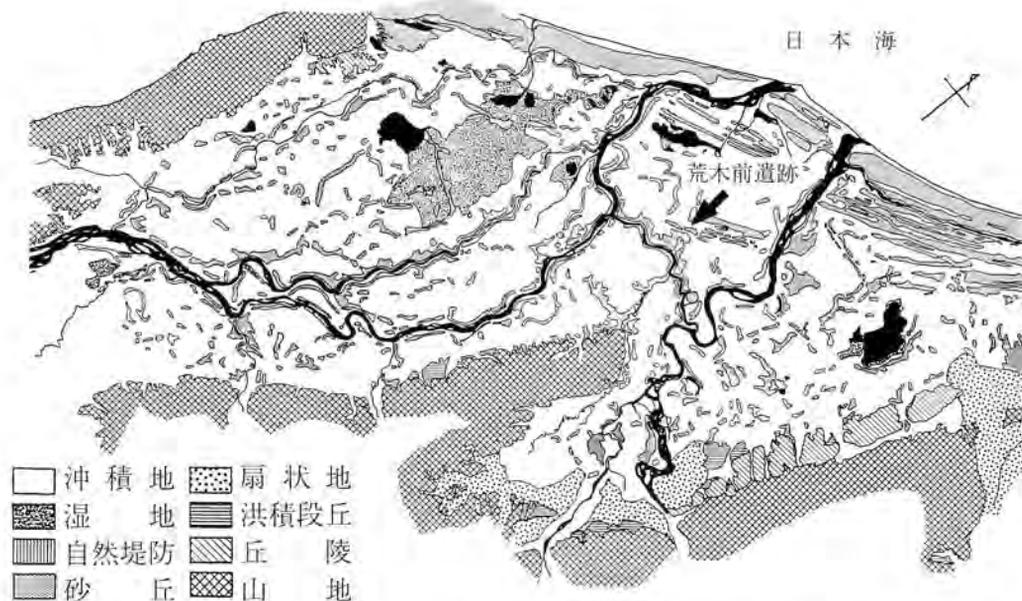
第1図 遺跡周辺の土地利用と確認調査トレンチ設定図（1/2000）スクリントーンは調査範囲

第Ⅱ章 遺跡の位置と地理的環境

遺跡の所在する亀田町は、信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた地域の南寄りに位置している。このあたり一帯は亀田砂丘と自然堤防などの微高地、そして大小の沼・潟と低湿地から成っている。微高地には集落が発達し、低湿地には水田が広がる、という沖積地特有の風景がみられる。

海岸線と平行して発達している砂丘列のうち亀田地域をのせた亀田砂丘は、2つの大きな砂丘列(前列砂丘、後列砂丘)とその間にあるやや規模の小さい2つの砂丘列から成っている。前列砂丘といわれる内陸側の砂丘列は笹山(新潟市)―駒込(横越村)―砂崩(以下亀田町)―袋津―城山―日水―茅野山を通るものであり、また後列砂丘といわれる海岸側の砂丘列は西山―茗荷谷―北山(以上新潟市)―稲葉(以下亀田町)―高山―船戸山を通るものである。これらは新潟平野で最も古い砂丘であり、前列砂丘上にある城山遺跡は前期末の土器が出土している。

亀田町で登録されている遺跡は現在36遺跡である。時代は前述した縄文時代前期から始まって弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世まで幅広くみられ、そのほとんどが砂丘上に存在している。古くは潟や沼が広がり、そこに点在する微高地に集落がいとなまれていたと思われ、小河川の発達と合わせて水運(舟)交通が活発であっただろう。



第2図 新潟県の地形区分図 (『新潟県史 通史編1 原始・古代』1986より抜粋)



第3図 荒木前遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	城山 A	縄文、弥生、奈良、平安	19	砂岡	奈良、平安
2	砂崩	縄文、奈良、平安	20	塚ノ山	奈良、平安
3	迎山	縄文、奈良、平安、中世	21	岡田	奈良、平安
4	日水南	縄文、奈良、平安、中世	22	牛道	平安
5	西前郷	縄文、奈良、平安	23	川西	平安、鎌倉
6	斉助山	縄文、弥生、奈良、平安	24	市助裏	平安、鎌倉
7	向山	縄文	25	鷓ノ子	平安
8	手代山排水路	弥生、古墳	26	泥瀉	平安
9	武左衛門裏	古墳	27	浦ノ山	平安
10	下西	古墳	28	八幡前	平安
11	日水		29	早通前	平安、鎌倉
12	貝塚	奈良、平安	30	手代山	鎌倉
13	三條岡	奈良、平安	31	荒木前	縄文、奈良、平安、中世
14	上ノ山	奈良、平安	32	三王山	室町
15	中の山	奈良、平安、中世	33	養海山	
16	狐山	奈良、平安	34	前郷	縄文、平安、江戸
17	上沼	奈良、平安	35	城山 B	南北朝、室町、江戸
18	茨島	奈良、平安	36	曙	平安

表1 周辺遺跡一覧表

荒木前遺跡もまた前列砂丘－後列砂丘間に存在する砂丘列上にあると思われるが、検出された砂丘地形からするとその端付近にあたるようである。位置的には新津へ通じる旧街道と利用が盛んな栗ノ木川にはさまれた交通便に恵まれたところである。周辺は主に住宅地と果樹園に利用され少し離れた亀田排水路に面するあたりから水田が広がっている。標高は水田地域がやや低くなっているものの、おおむね2 m前後である。

遺跡の東側には隣接して熊野神社があり、0.7mの差をもって高くなっている。熊野神社は上杉氏家臣の荒木五郎左衛門為久の宗廟であったといわれているものである。荒木五郎左衛門為久については『温古之葉』（明治20年代刊行）の中に「手代山の古城跡」の記述があり、そこにその名をみることができる。

「同郡（中蒲原郡）金津莊城所手代山に古城跡あり、孤立せし小山の頂上凡二千坪平坦にて井坪空壕の痕幽に見ゆ、元享年中（1321～1323）国の守護職北條家に於いて蒲原沖日水手代山に柵を構ふと古書に見ゆるは此処なるべし、近辺に日水の地名もあり永禄年中（1558～1569）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。……略」とある。

現在のところその城がどこにあったかわかっていないが、荒木前遺跡の内容をみると興味深いものがある。また近くには「中の山」「三王山」という遺跡があり、どちらも中世の痕跡があることから、これらとの関係も注目されるであろう。

第三章 調査の概要

1. 昭和63年度確認調査（第1図、表2）

確認調査は宅地造成予定地内に周知の荒木前遺跡が存在するため、昭和63年5月30日～6月3日の5日間、遺跡の内容・範囲確認を目的とし実施された。対象は、宅地範囲北側の町道との境界線に平行させた試掘溝3本、それに直交する方向の試掘溝1本、一辺1～3mの試掘坑6ヶ所で、面積は約294㎡である（第1図）。

調査は任意に設定した地点を遺構確認面まで掘り下げ、平面的な分布状況を確認したあとさらに数カ所について深掘りし、層序および生活面の把握に努めるという方法で行なった。表土から遺構確認面近くまではバックホーにより薄く何回にも分けて掘削し、遺物を採集した。遺物は基本的に長軸に沿って2mごとの区画で層別に取り上げた。次に人力による面精査を行ない、遺構の分布状況を1/100の略図で記録した。層序については良好な地点を選んで柱状図を作成した。

この調査の結果、遺構は調査区の東縁辺部を除いてほぼ全域に分布し、北や西の調査区域外へ広がっている可能性がうかがえた（表2）。また包含層は3つの層（上からⅡ層－黒褐色土、Ⅲ層－暗褐色土、Ⅳ層－黄褐色土）が確認され、それぞれを覆土の主体とする遺構に対して、中世、平安時代、平安時代という時期を推定した。基本層序については地山の砂丘まで6層が捉えられ、後の本調査でもほぼ同様の結果を得ている。

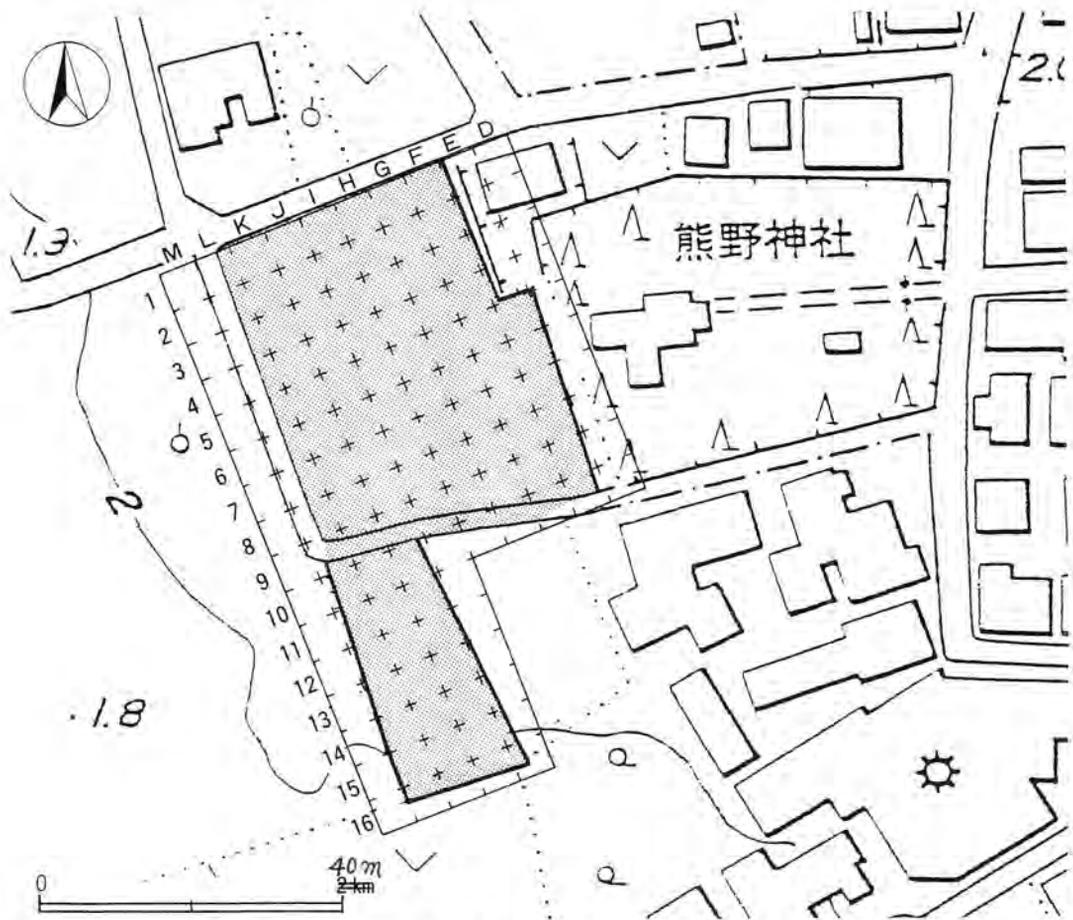
試掘地点No	出 工 遺 物	確 認 遺 構
1 T	近世陶器、中世陶器、須恵器、土師器	溝、ピット
2 T	近世陶器、中世陶器、須恵器、土師器、石臼	溝、ピット、井戸
3 T	近世陶器、須恵器、土師器、砥石	溝、ピット、井戸
4 T	青磁、須恵器、土師器	溝、ピット、井戸
5 T	須恵器、土師器	ピット
6 T	土師器	ピット
7 T	近世陶器、中世陶器、須恵器、土師器	溝、井戸
8 T	須恵器	ピット
9 T	土師器	

表2 確認調査の遺物・遺構

2. 調査の方法と経過

グリッドの設定 グリッドは調査区の北東角に任意で設定した点（F-1グリッド杭）を通り、北側にある町道との境界線と直交する線を主軸として5mグリッドを組んだ。主軸は国土地理院の座標系に対し12°東偏している。グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字として、両者の組み合わせによって「F-1」のように表示した。主要グリッド杭や見通し杭の打設、ベンチマーク設定は業者に委託した。

調査方法 確認調査をもとにした作業の手順は、①耕作土およびII層の除去→②III層上面の精査・遺構検出→③III層の除去→④IV層上面の精査・遺構の検出→⑤IV層の除去→⑥V層上面の精査・遺構検出→⑦V層の除去→⑧VI層上面の精査・遺構検出→⑨VIII層（砂丘表土）検出である。遺構は④において中世、平安時代のものが多数検出されたが、②、⑥、⑧ではほとんど遺構が確認できず、⑧で小ピットが数基確認できただけである。包含層除去と面精査・遺構検出は基本的には人力で行ない、ベルトコンベアにより土を排出したが、①については耕作土と



第4図 グリッド設定図 (1/1000) スクリーントーンは調査範囲

Ⅱ層の区別がつきにくいこと、遺物が多くなく下部付近に包含されることにより、遺物が出土する深さまでバックホーで掘り下げている。またⅤ～Ⅶ層についても遺物がほとんどないため、バックホーを使用し除去した。遺構検出に際しては、遺構プラン確認の段階で1/100の略図を作成し、位置や切り合い関係の把握に努めた。

遺構No.は遺構の種類に関係なく検出順に一連番号を付した。遺構実測図は基本的には1/20でとったが、微細図など必要に応じて1/10にしたものもある。平面実測は一部平板を使用したほかは、ほとんど水系で設定した1 mメッシュを利用した断面実測は主要遺構あるいは特徴のある断面土層をもつ遺構について行なった。遺物は遺構出土のものは遺構ごとに、包含層出土のものは各包含層でグリッドごとに取り上げ、遺跡名、出土地点（遺構No.またはグリッド名）、層位、日付を記入したラベルを付けた。

調査経過 現場ではプレハブ設置、排土置場の確保のため、地点によって調査が先行あるいは後行している。また状況によって前述した基本手順が変更したものもある。以下、具体的に調査経過を記す。現場での実際の作業は4月17日からである。4月17日、プレハブ設置予定地点に3本の試掘坑を設置しこの地点の調査計画をたてる。遺構、遺物とも少ないことより調査終了近くのプレハブ撤去後に調査することにする。次にF～L-1～8（以下「1区」とよぶ）へ移るが、4月18日から確認調査の1 T、2 T内の埋土を除去し遺跡の層位を確認しながら未調査地点の掘削を行なう（Ⅰ、Ⅱ層の除去）。24日からのⅢ層上面の精査では遺構が確認しにくいいためすぐにⅢ層除去に切り替え、Ⅳ層上面の精査を行なう。ゴールデンウィークあけの5月8日にⅣ層上面確認遺構の半截を開始し、必要なものは断面図をとった。これと並行して1区の1/100略図を作成する。Ⅳ層上面では土坑・井戸・掘立柱跡・溝状遺構・畝状遺構など、多数検出され、1区の北側半分にある遺構の完掘が終了した31日からそれらの平面実測を行なう。これに必要な1 mメッシュの基準点は30日に業者が設定した。6月13日に平面実測を終了した遺構についてレベリングを行なう。同日、J～L-10～16（以下「2区」とよぶ）における作業を開始する。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層の除去は14日終了。15日からⅣ層上面遺構検出となり、それ以降の作業は1区と同じ手順を進める。30日、遺構実測を一時中断し、清掃後1区の掘立柱建物跡や溝状遺構、そして全域の写真撮影を行なう。7月3日、2区の遺構平面実測、レベリング開始。5日、2区の掘立柱建物跡、全域の写真撮影を行なう。6日より入力によるⅣ層除去→Ⅴ層上面精査、遺構検出→遺構実測図作成。19日～25日、バックホーによるⅤ層除去、Ⅵ層上面遺構検出（遺構ほとんど無し）→Ⅵ層除去。20日～27日、Ⅶ層（Ⅶ層が存在しないところはⅧ層）コンタリングおよび調査区西壁セクション図の作成。28日、図面整理、機材・用具撤去の準備。31日機材・用具撤去。2日、業者によりプレハブが撤去され、3日その地点の調査へ移る。4日最終遺構SE 227の井戸枠の取り上げをもって終了する。

3. 層 序 (第5図)

調査範囲は畑地として利用されていた所であり、標高は1.8m~2.4mを測る。南と東へゆるく傾斜しているが、中央付近(H~L-2~8)はほぼ平坦である。東側はやや勾配が大きくなるが、攪乱がとところどころみられ、後世の削平によるものと思われる。

層序は比較的単純で耕作土から地山まで8層に分層できる。以下、表土(I層)を除く層序について説明する。

II層 黒褐色土で若干の粘性・しまりがある。I層との区別がつきにくい、粒子の密度が高い。中世の遺物を出土する。

III層 暗褐色土で粘性・しまりともにある。中世、平安時代の遺物を出土する。

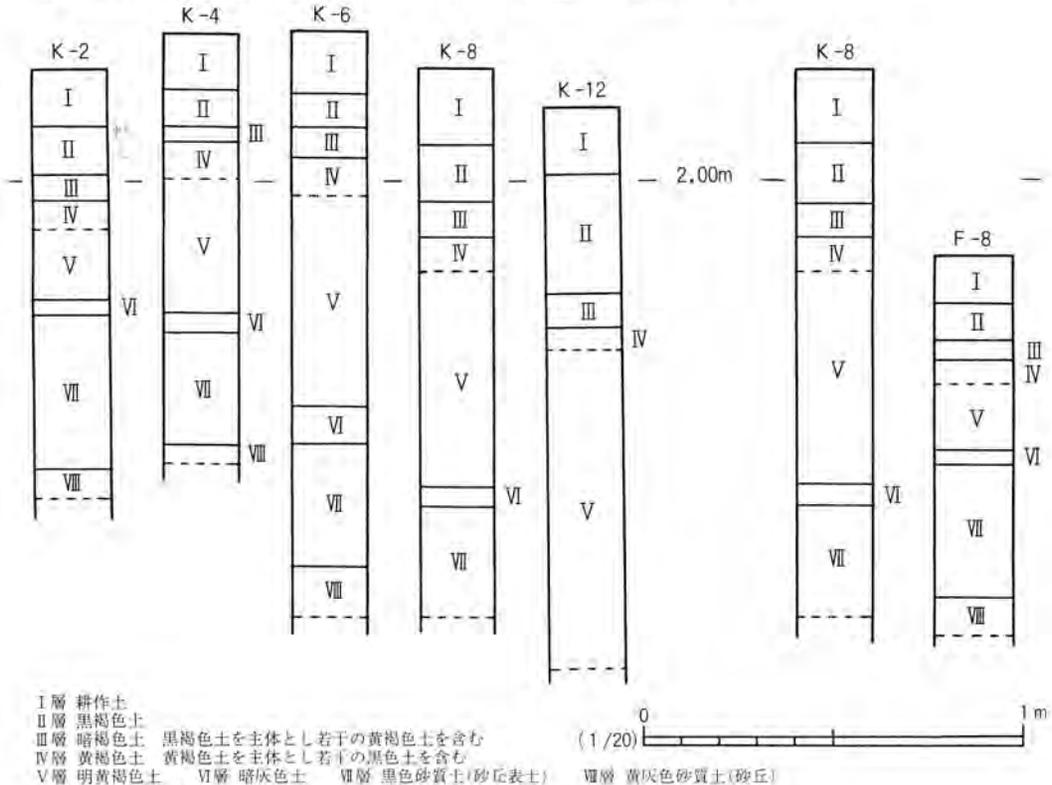
IV層 黄褐色土で粘性・しまりともにある。平安時代を中心にそれ以前の遺物も数点含む。

V層 明黄褐色土で粘性・しまりともにある。IV層との区別がつきにくい、粘性・しまりがやや強く、粒子も密である。

VI層 黒色砂質土(砂丘表土)

VII層 黄灰色砂質土(砂丘)

VI、V層は洪水堆積土と思われるが、IV層を切って平安時代の遺構が見られることから、IV、V層の形成は9世紀以前と考えられる。砂丘地形はかなりの高低差があるが、洪水の段階(IV、V層の形成)で緩和され、以降その地形の傾きに沿って堆積している。



第5図 土層断面図

第Ⅳ章 遺 構

1. 概 観

荒木前遺跡において検出された遺構は土坑、井戸、掘立柱建物、溝状遺構、畝状遺構などである。ほとんどがGイラン以西にみられ、標高がやや高いI～L-5～9あたりに集中している。調査区の東側縁辺部は遺構があまり検出されていないが、もともとの分布が希薄であったのと後世の削平によるものと思われる。これらの遺構は、検出面が同一で、出土遺物が少ないことから時期推定がむずかしいと思われたが、後述するように覆土により推定可能なものもある。

2. 遺 構 各 説

a. 土坑・井戸（第6図～16図 表3）

検出された土坑・井戸は形態による区別がつきにくいいため、ここではまとめて取り扱うことにする。それぞれの特徴は表にまとめた。主要なものは土坑6、井戸26を数えるが、これらには覆土にパターン（①、②、③）がみられ時期の推定も可能である。各パターンの状況は次のようである。

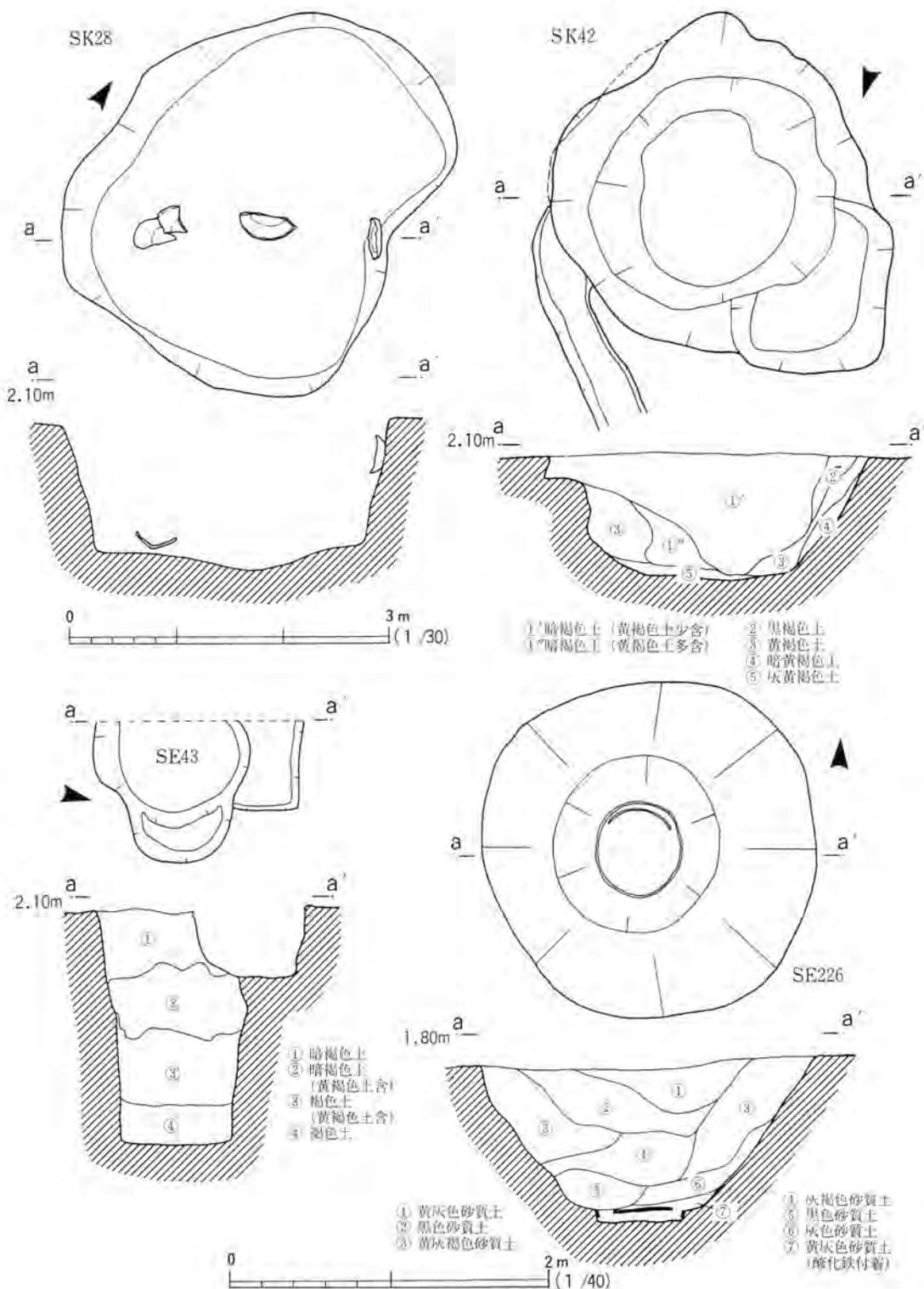
①Ⅱ層、Ⅲ層土を覆土の上部にもち、分層線が水平に近い堆積のもの。短期間で埋まった（埋められた？）ものと思われるもので、中世に属する。

②覆土の上部にⅣ覆土をもち、分層線がU字またはV字状に堆積しているもの。平安時代のものである。

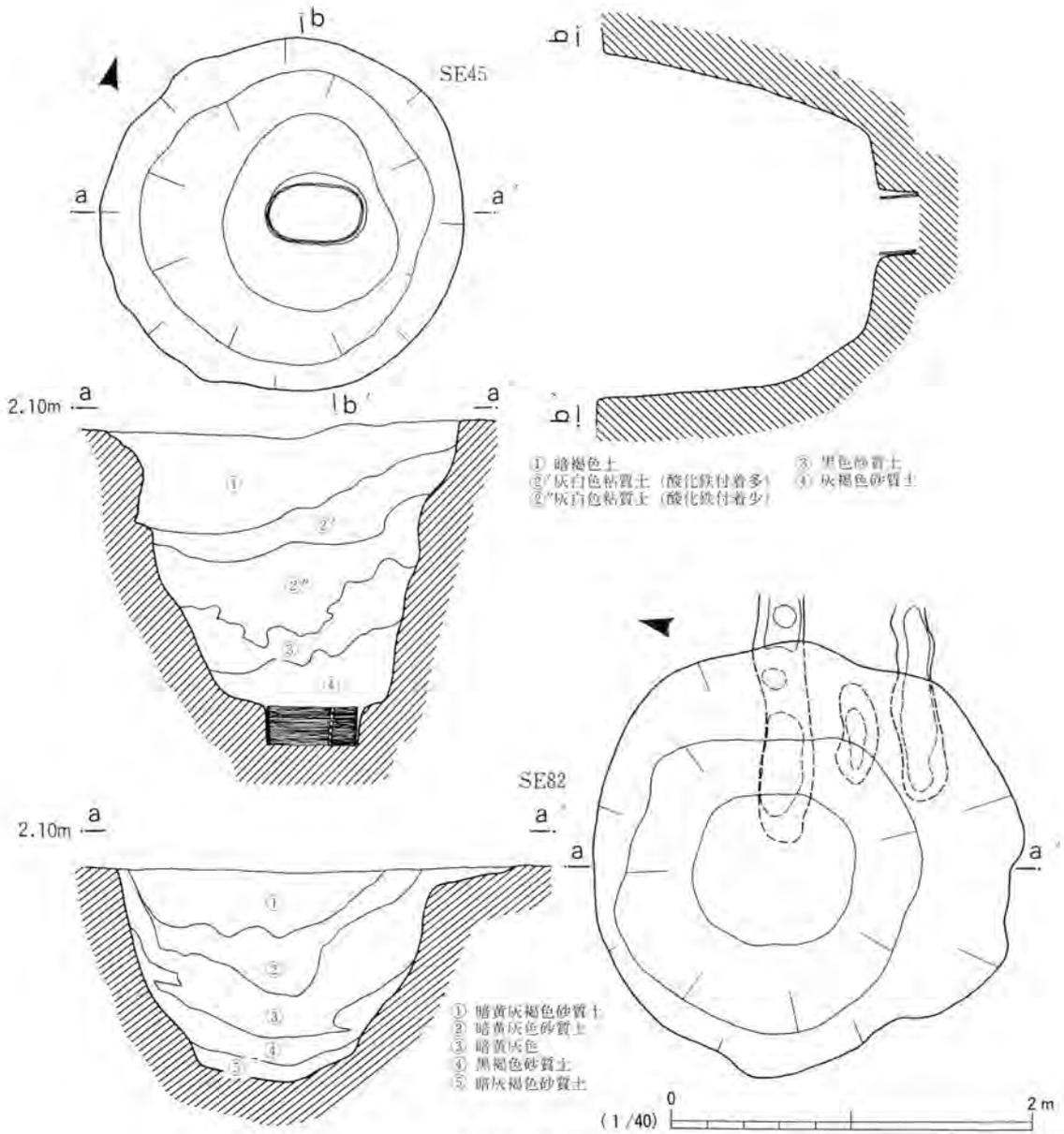
③覆土はⅣ～Ⅵ層土、地山の砂質土を主体とする。Ⅱ層、Ⅲ層土の混入はまったくみられない。平安時代のものである。

各覆土パターンの具体的な時期ははっきりしないが、①はSD9以前、②、③は同じ平安時代でも③の方が相対的に古く位置づけられるようである。次に各パターンごとに形態的特徴をみることにする。

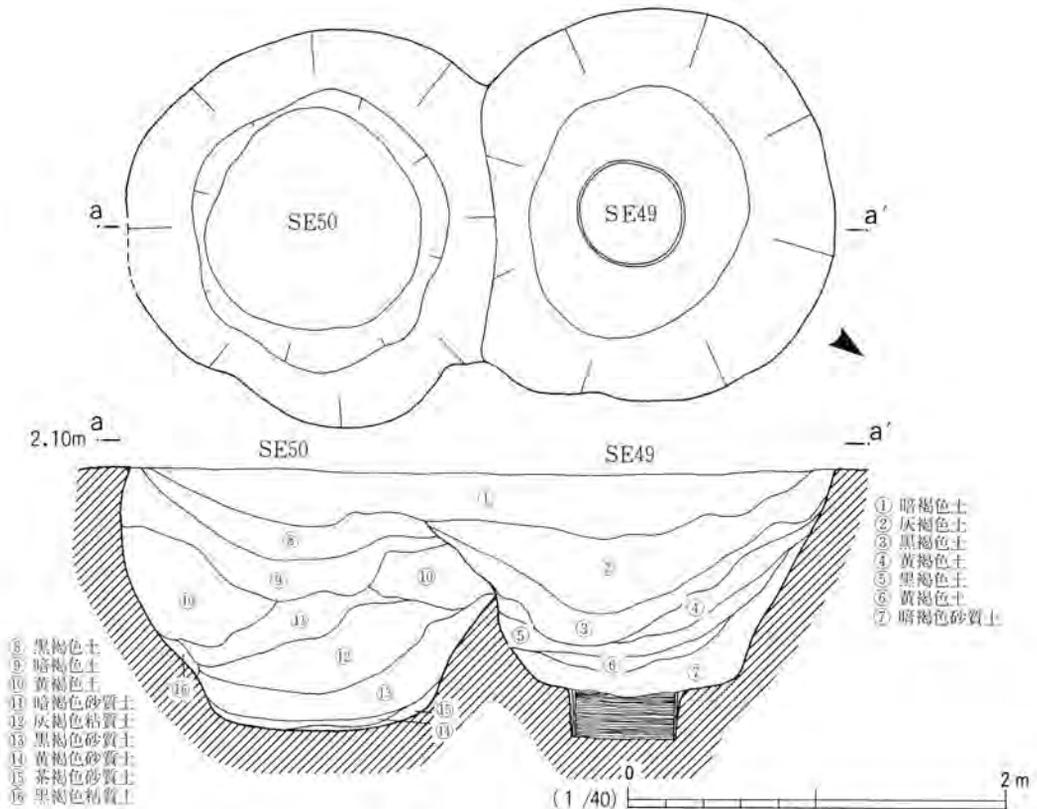
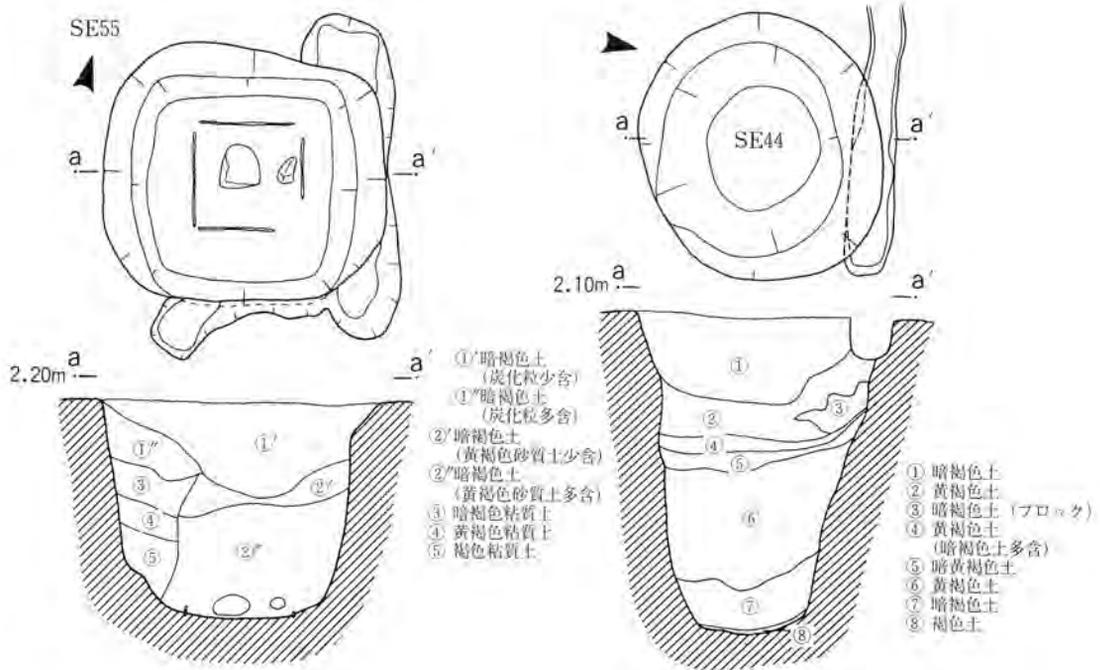
①に属するものは11基であり、3つの特徴に分かれる。a. 平面形が円形で壁の立ちあがり急なもの（SE43・SE44・SE52・SE63・SE85）、b. 平面形が方形で壁の立ちあがり急で、平面の大きさに対する深さがaにくらべやや浅いもの（SE55・SE91・SE93）c. 規模が大きく、造りの丁寧な井戸施設（井戸側、水溜）が設置されているもの（SE83・SE47・SE227）である。



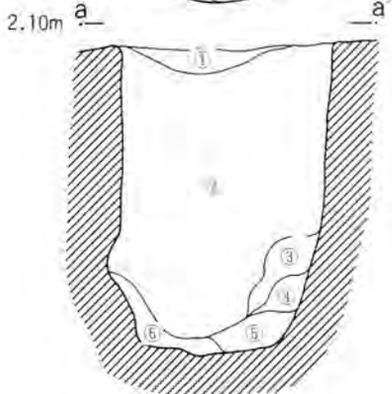
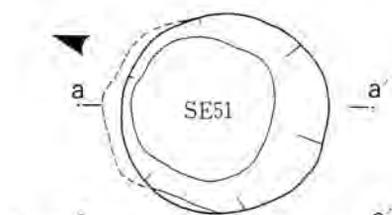
第6図 遺構実測図



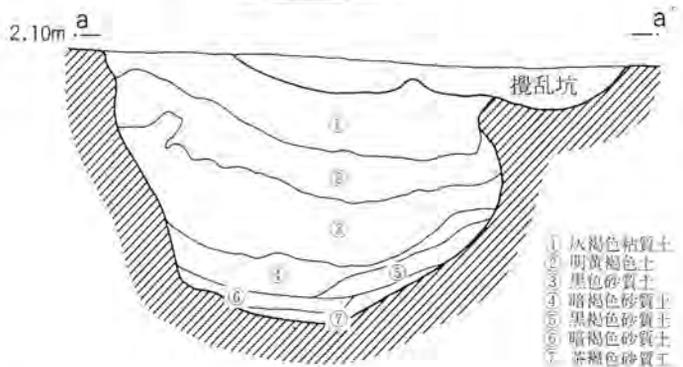
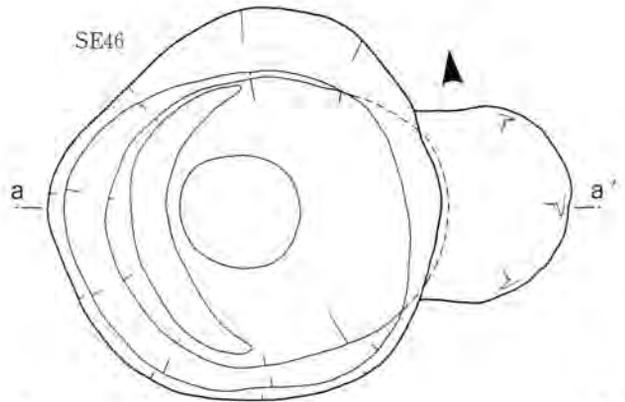
第7图 遺構実測図



第8図 遺構実測図



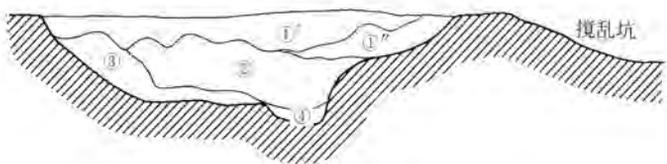
- ① 暗褐色土
- ② 黄灰色砂質土
- ③ 黑褐色砂質土
- ④ 黄白色砂質土
- ⑤ 茶褐色砂質土
- ⑥ 灰色砂質土



- ① 灰褐色粘質土
- ② 明黄褐色土
- ③ 黑色砂質土
- ④ 暗褐色砂質土
- ⑤ 黑褐色砂質土
- ⑥ 暗褐色砂質土
- ⑦ 茶褐色砂質土

SD9-a SD9 断面图 (H-1)

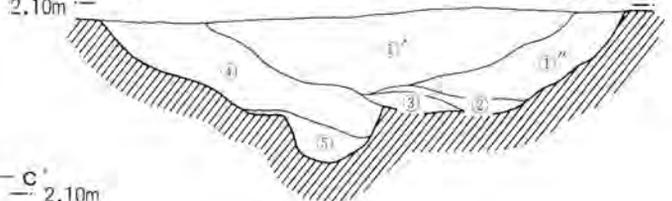
SD9-a' 2.10m



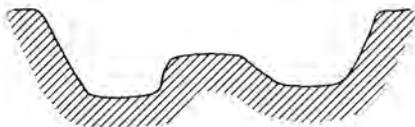
- ① 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒多)
- ①' 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒少)
- ② 黑褐色粘質土 + 暗褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土、灰褐色粘質土含)
- ④ 黑褐色粘質土 (暗褐色粘質土含)

- ① 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒多)
- ①' 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒少)
- ② 黄褐色粘質土 + 灰色粘質土
- ③ 暗褐色砂質土
- ④ 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土粒含)
- ⑤ 黑褐色粘質土 + 暗褐色粘質土

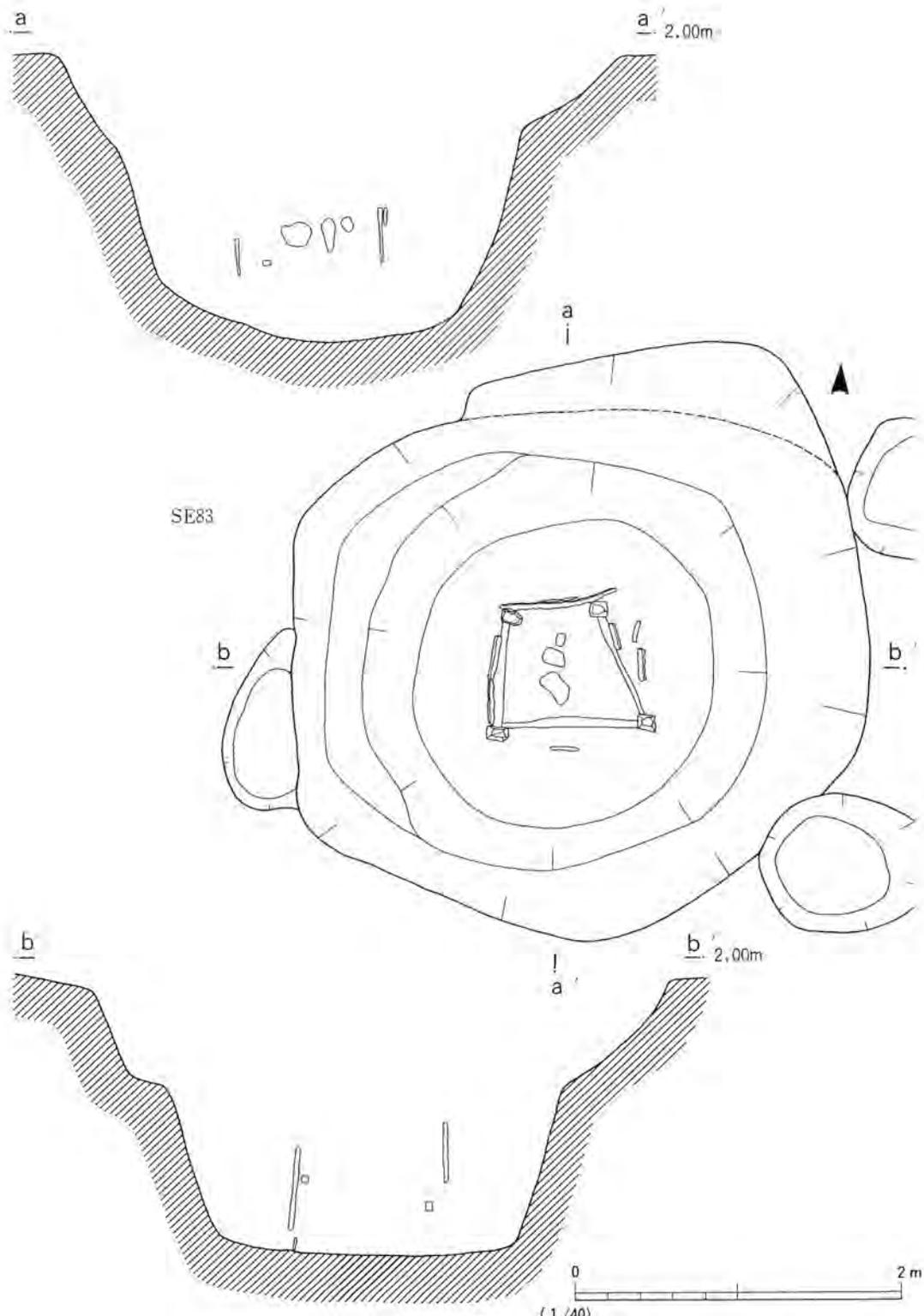
SD9-b SD9 断面图 (H.I-4) SD9-b'



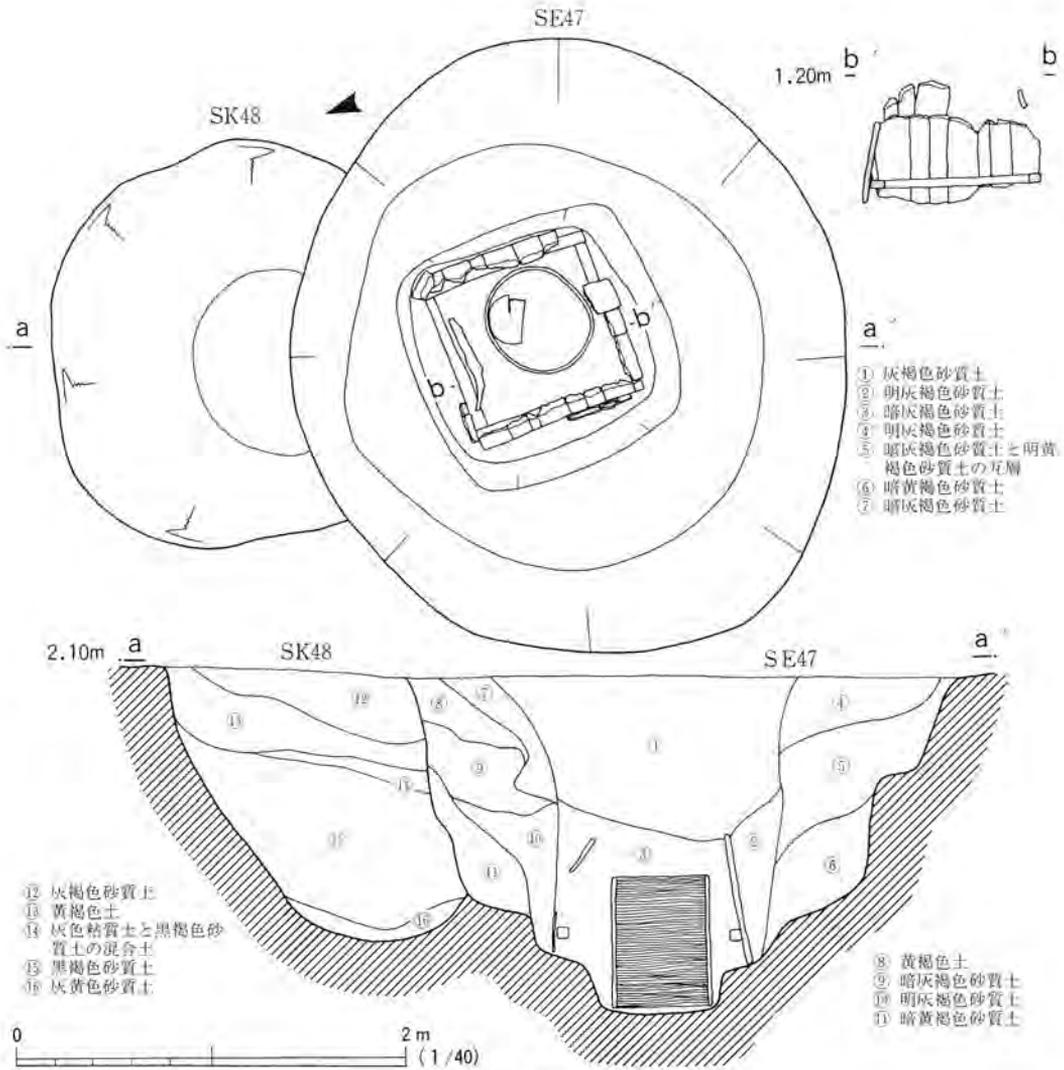
SD9-c SD9-c' 2.10m



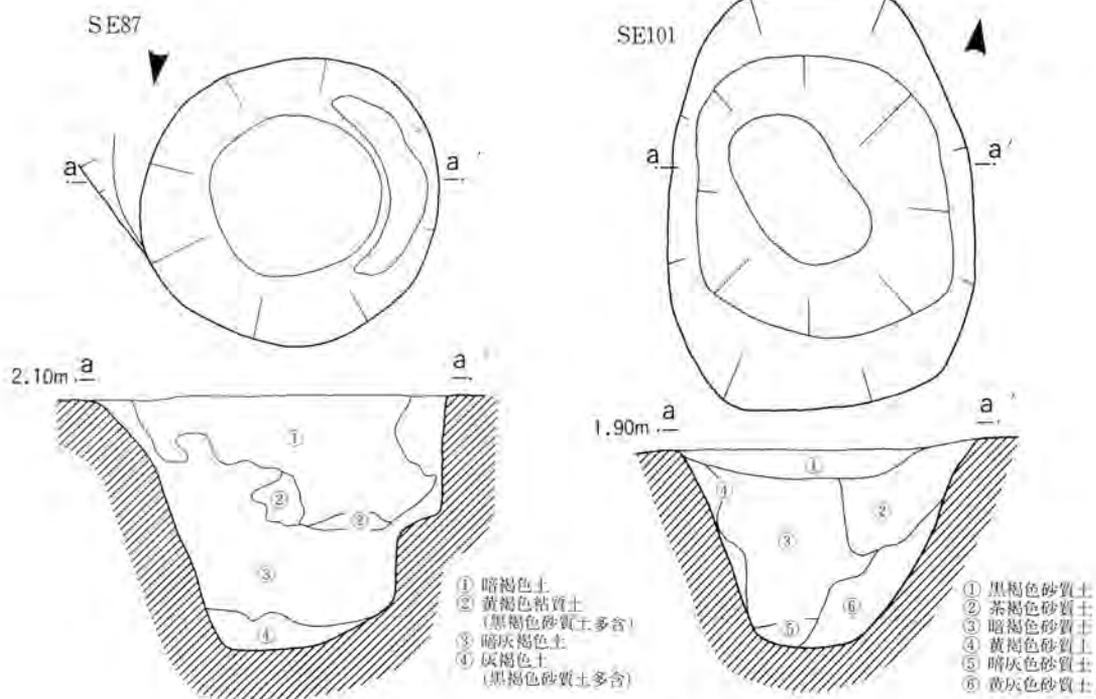
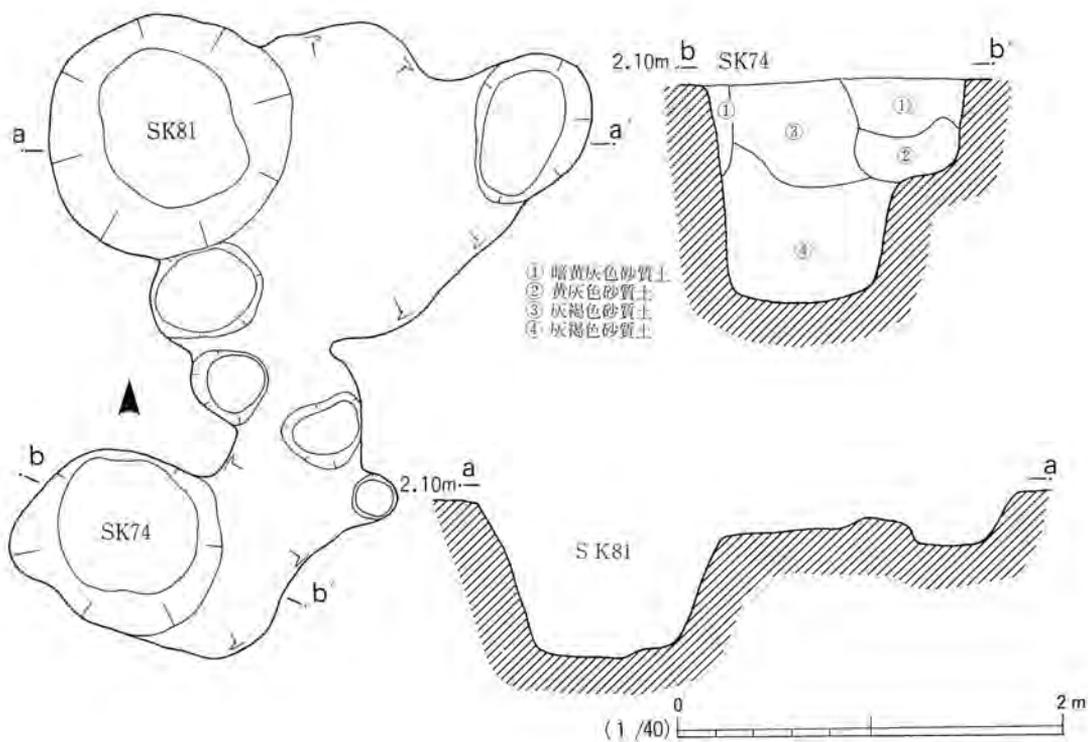
第9图 遺構実測図



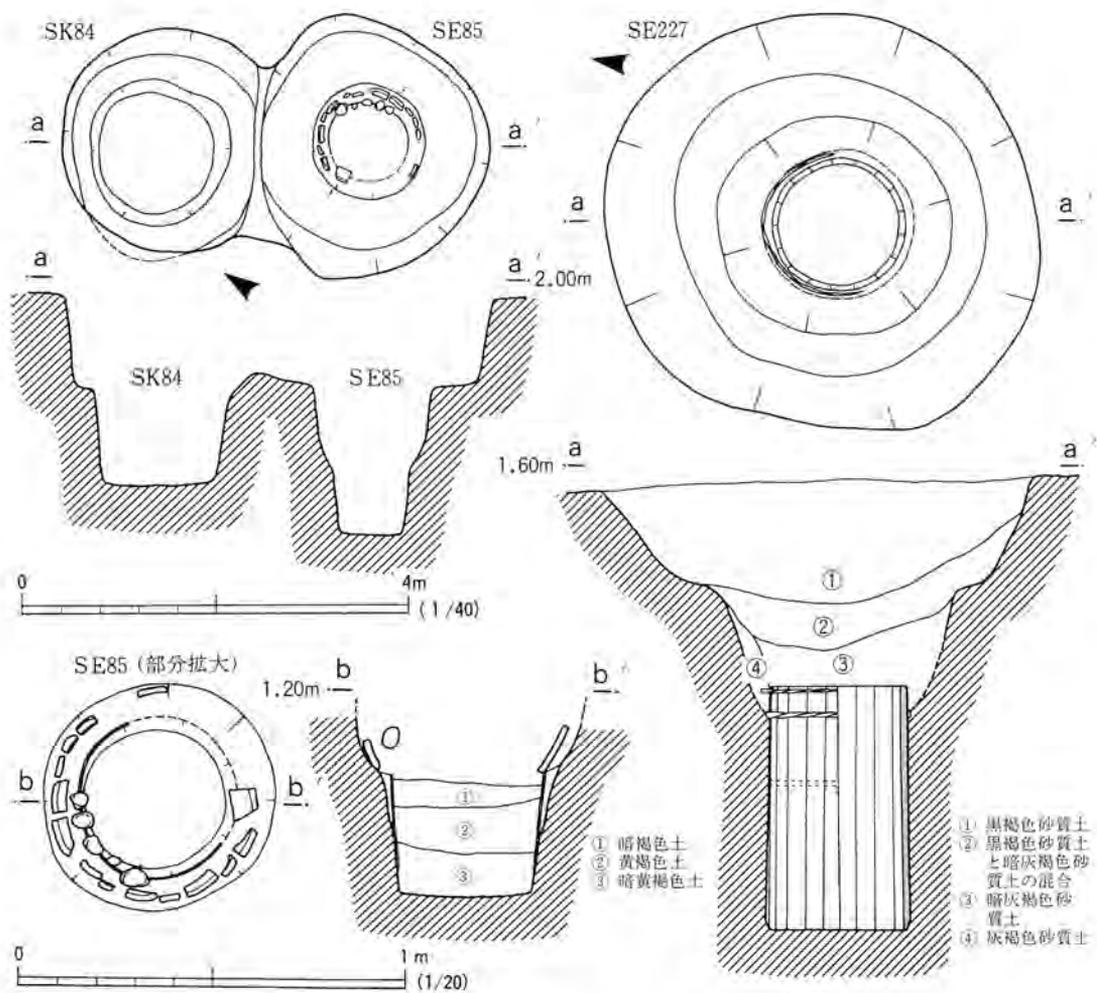
第10図 遺構実測図



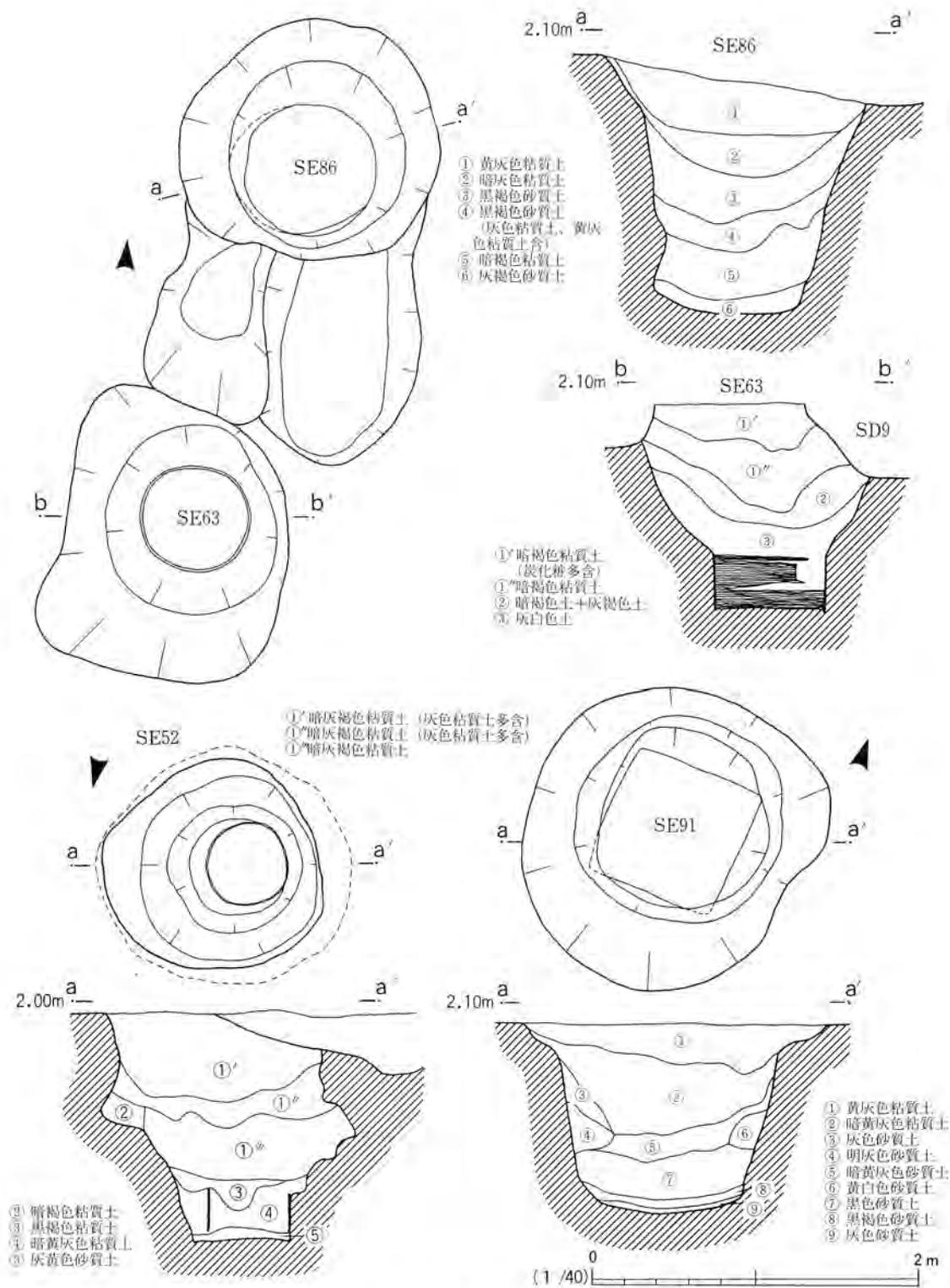
第11図 遺構実測図



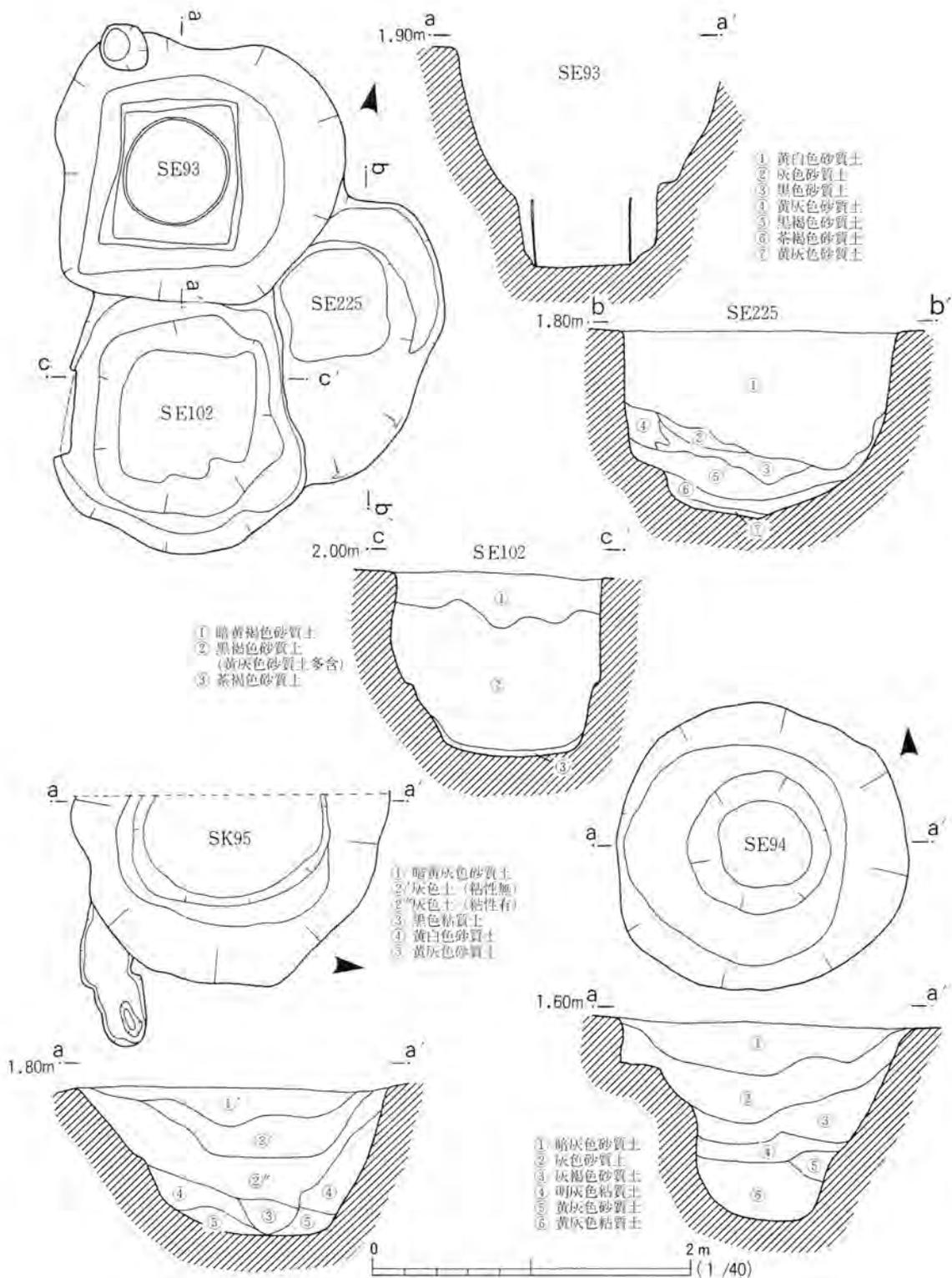
第12図 遺構実測図



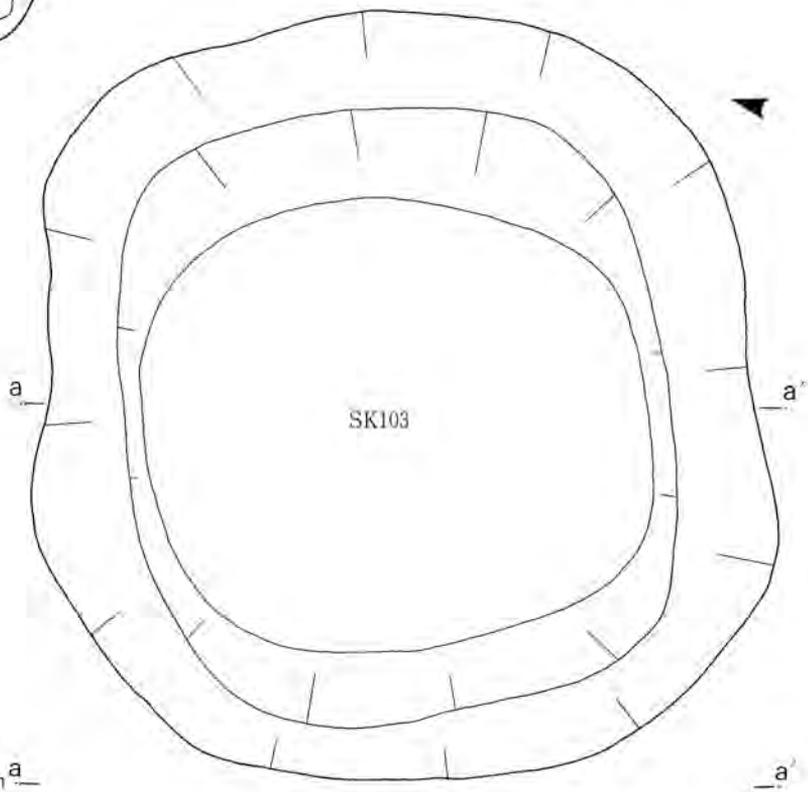
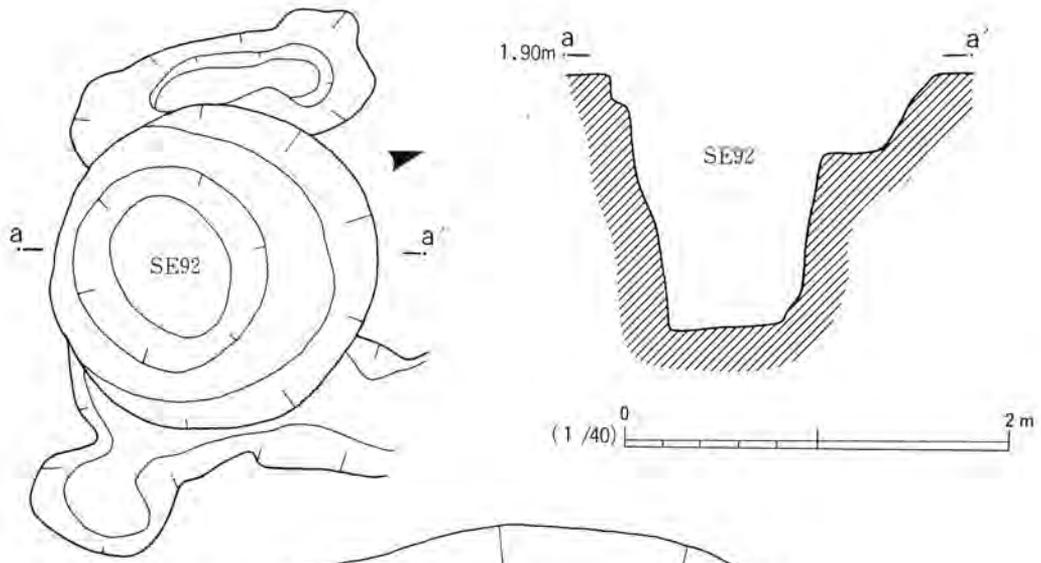
第13図 遺構実測図



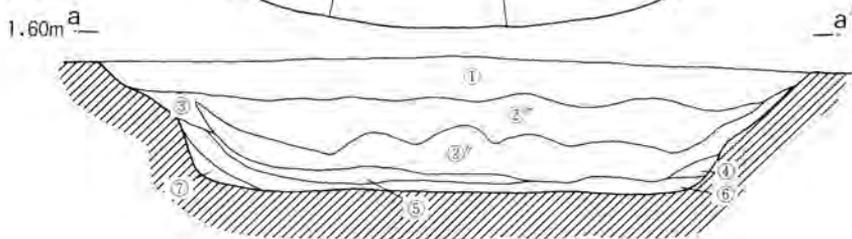
第14图 遺構実測図



第15図 遺構実測図



- ① 暗褐色土
- ② 灰褐色土 (酸化鉄付着多)
- ②' 灰褐色土 (酸化鉄付着少)
- ③ 暗褐色土
- ④ 黒色土
- ⑤ 暗灰色粘質土
- ⑥ 暗灰褐色粘質土
- ⑦ 暗灰色粘質土



第16圖 遺構実測図

遺構No	地 区	大 き さ (m)			覆土	特 徴	挿図No	図版No
		長 軸	短 軸	深 さ				
SK28	K.L-1	4.86	4.00	1.89	③	覆土は一層、黄褐色土層。	第6図	図版3
SK42	K.L-4	4.21	3.89	1.54	②	東側上部に段あり。	第6図	
SE43	L-4	1.94	(1.76)	3.00	①	北側上部攪乱坑により破壊。東側上部に段あり。	第6図	図版4
SE44	K.L-5	2.84	2.54	3.42	①	北側上部畝状遺構に切られている。	第8図	図版4
SE45	J.K-7	4.09	3.92	(3.66)	②	西側上部にわずかな段あり。水溜施設(整槽円形の曲物)残存。	第7図	図版5
SE46	J-7	4.11	3.98	2.90	③	東側上部攪乱坑により破壊。東側壁中部オーバーハング。底部円形の窪みあり(水溜施設跡)。	第9図	
SE47	J-8	6.64	5.78	3.68	①	壁が階段状になっている。井戸側(方形縦板組横棧どめ)、水溜施設(円形の曲物)残存。	第11図	図版7.8
SK48	J-7.8	4.20	(2.48)	2.94	③	南側SE47に切られている。井戸の可能性あり。	第11図	図版7
SE49	I.J-5	4.12	(3.64)	(2.88)	②	南東側SE50と切りあっている。水溜施設(円形の曲物)残存。	第8図	図版6
SE50	I-5.6	4.20	(3.92)	2.81	②	北西側SE49に切られている。	第8図	図版6
SE51	H.I-7	2.20	2.09	3.32	②	北側壁下方一部オーバーハングしている。	第9図	
SE52	H.I-8.9	2.64	2.54	2.86	①	西側上部SD9に切られている。壁中部オーバーハング。水溜施設(円形の曲物)跡あり。	第14図	図版8
SE55	G.H-5	3.00	2.45	3.10	①	底部に方形木柵(水溜施設?)跡あり。	第8図	図版4
SE63	J-7.8	3.40	2.78	(2.58)	①	東側上半部SD9に切られている。水溜施設(円形の曲物)跡あり。	第14図	図版9
SK74	H-6	(2.10)	1.88	2.31	③	東側上部攪乱坑により破壊。底部ほぼ平。井戸の可能性あり。	第12図	
SK81	H-5.6	(2.63)	(2.50)	2.72	③	覆土は一層、暗黄褐色砂質土。東側上部攪乱坑により破壊。井戸の可能性あり。	第12図	
SE82	K.L-6.7	4.94	4.64	2.44	③	南側上部わずかな段あり。	第7図	
SE83	H.I-6	(7.52)	(7.09)	3.55	①	壁中部に段あり。井戸側(方形縦板組隅柱横棧どめ)残存。	第10図	図版7
SK84	H-8	2.57	(2.00)	2.05	③	南東側SE85に切られている。壁中部に段あり。	第13図	図版10
SE85	H-8	2.78	(2.38)	2.55	①	北西側SE84と切りあっている。壁に段有。井戸側(珠洲焼播鉢破片、石)、水溜施設(円形の曲物)跡あり。	第13図	図版10
SE86	I-7	3.28	3.02	3.24	②	南側上部攪乱坑による破壊。	第14図	図版9
SE87	I-6	3.37	3.15	2.84	②	西側壁中部に段あり。	第12図	
SE91	K.L-10	3.78	3.34	2.37	①	上部にわずかに段あり。底面方形。	第14図	図版9
SE92	K-9.10	3.46	3.40	2.72	③	北側に段あり。	第16図	
SE93	J.K-9.10	3.48	3.23	2.79	①	壁下半部に段あり。底面形方形。水溜施設(円形の曲物)残存。SE102、SE225と切りあっている。	第15図	図版10
SE94	J.K-12	3.84	3.64	2.60	③	西側上部に段あり。壁下半部にわずかな段あり。	第15図	
SK95	L-11	3.95	(2.38)	1.90	③	西側調査区域外。上部は削平されている可能性あり。井戸の可能性あり。	第15図	
SE101	G-6.7	4.48	3.18	2.20	②	上部は削平されている可能性あり。	第12図	
SE102	J.K-10	(3.20)	2.70	2.36	③	壁中部にわずかな段あり。SE93に切られている。SE225と切りあっている。	第15図	図版9
SK103	J.K-14	8.14	7.34	1.34	②	壁中部にわずかな段あり。底部ほぼ平。	第16図	図版11
SE225	J-10	3.61	2.03	2.35	③	北側下部に段あり。底面方形。	第15図	
SE226	F-5.6	4.18	4.16	2.10	③	上部削平されている可能性あり。水溜施設(円形の曲物)跡あり。	第6図	図版3
SE227	E-9.10	4.61	4.38	4.84	①	壁中部に段あり。水溜施設(桶)あり。	第13図	図版9

表3 土坑・井戸観察表

②、③に属するものはそれぞれ8基、14基である。これらの形態的特徴は、a. 平面形が円形で壁の立ちあがり急で、平底のもの、b. 断面形が楕円状もしくはU字状のもの、の2種類がみられる。aに属するものは、②がSE51・SE86、③がSK84・SE92、bに属するものは②がSK42・SE45・SE49・SE50・SE87・SE101、③がSE46・SK48・SE82・SE94・SE95・SE102・SE225・SE226である。

b. 掘立柱建物（第17～20図）

確認された掘立柱建物は11棟である。SB308（平安時代）を除いてすべて中世である。以下これらについて簡単に触れるが、記述の順序は時期に関係なく北側からとする。なお、現場では検出された柱穴に遺構番号を与えており、**掘立柱建物**の番号である300代は再編成した時につけたものである。

SB301（第19図）

G-2・3にある4間(6.35m)×3間(3.25m)の南北棟建物で、方位はN-1°-Eである。上部が削平されているため遺存が少なく、また攪乱により形状が原形をとどめていないものもある。柱間寸法は南北方向が約1.55m、東西方向が約1.05m前後である。覆土は黄褐色土を含む暗褐色である。

SB302（第19図）

K・L-4～6にある掘立柱建物である。東西方向は1間確認されているが、調査区外へのびる可能性がある。南北方向は2間(7m)である。柱間寸法は南北方向が3.5mで東西方向の柱間寸法(2.5m)より長い。柱掘形は径45～60cmほどの不整形円で、深さは50cm前後である。柱痕は断面観察の際にかすかに認められたものがあり、径が約15cmを測る。覆土は暗褐色土で中世と思われる。

SB303（第19図）

K・L-5・6にある2間(6.6m)×1間(3.0m)の南北棟建物で、方位はN-8°-Eである。南北方向の柱間寸法は不揃いで3.2m～3.7mと幅がある。**掘形**は北側の2つが隅丸方形で原形をとどめていると思われるが、その他は円形であり、その地点に遺構や攪乱が密集していることから、いくらか破壊を受けていることが考えられる。深さはいずれも50cm以上で、黒褐色土を含む暗褐色土を覆土とする。中世である。

SB304（第19図）

K・L-5・6にある東西棟と思われる掘立柱建物である。東西、南北方向それぞれ1間ずつ確認されており調査区外へ続く。柱間寸法はいずれも3.8m前後である。掘形は径35～65cmの不整形円で深さは50～60cmとしっかりしている。断面観察の際に柱痕が確認されたものがあり底面径とほぼ同じ15cmであった。覆土は黄褐色土を含む暗褐色土である。

SB305（第19図）

J, K-6にある2間(5.4m)×1間(3.85m)の東西棟建物で、方位はN-84°-Eである。

東西方向の柱間寸法は2.4m～2.7mを測る。掘形は径35～60cmの不整円形で深さは50～60cmである。柱痕は確認できなかった。6基の柱穴のうち1基がSB 303の柱穴と切りあっており、SB 305の方が古いことがわかる。覆土は黄褐色土を含む暗褐色土で中世である。

SB 306 (第20図)

J・K-7にある2間(6m)×(3.95m)の南北棟建物で、方位はN-19°-Wである。南北方向の柱間寸法はほぼ等間隔で約3mを測る。掘形は平面形が楕円に近い円形であり、長径が35～50cm、短径が30～45cmと他の掘立柱建物の柱穴にくらべてやや小振りである。これに対し深さはどれも70cm前後で深くなっている。覆土は暗褐色土であり、中世の遺構である。

SB 307 (第20図)

I・J-6・7にある南北2間(4.35m)×東西1間(3.05m)の掘立柱建物で、1区でみられる建物のなかでは小規模なものである。方位はN-22°-Wであり、SB 306とほぼ並行している。南北方向で柱穴を検出できなかったところがあるが、確認できるところで柱間寸法は2.17m前後を測る。掘形は不定形で大きさも一定していない。暗褐色土の覆土をもつ。

SB 308 (第20図)

K・L-10・11にある掘立柱建物で、南北2間(7.2m)×東西1間(5.85m)が確認されている。東西方向は検出された隅柱の間にもう1基ずつ存在していた可能性があるが、そこはSD 9が走っており、不明である。方位はN-19°-Wとなっている。掘形は他の建物の柱穴にくらべて大きく(径60～70cm)深い(約60cm)。平面形は方形に近いようにも感じられる。覆土は暗黄褐色土で、平安時代と思われる。

SB 309 (第18図)

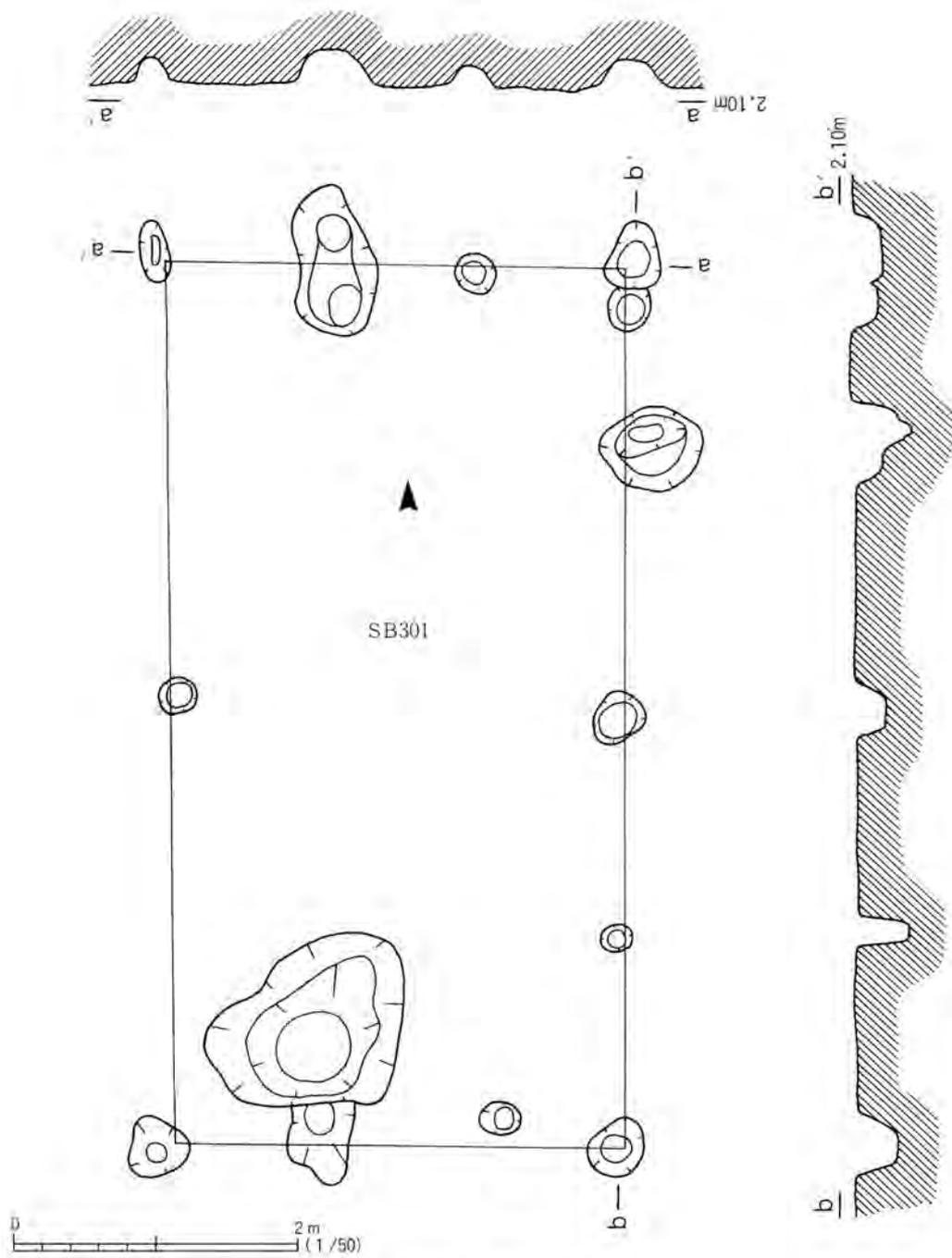
K・L-10・11にある2間(3.7m)×1間(3.18m)の掘立柱建物で、方位はN-45°-Eである。北東-南西の柱間寸法は約1.8mを測る。他の遺構や攪乱坑によって破壊されているものがあるが、柱穴はほぼ同形状で径30～40cmである。覆土は暗褐色である。

SB 310 (第18図)

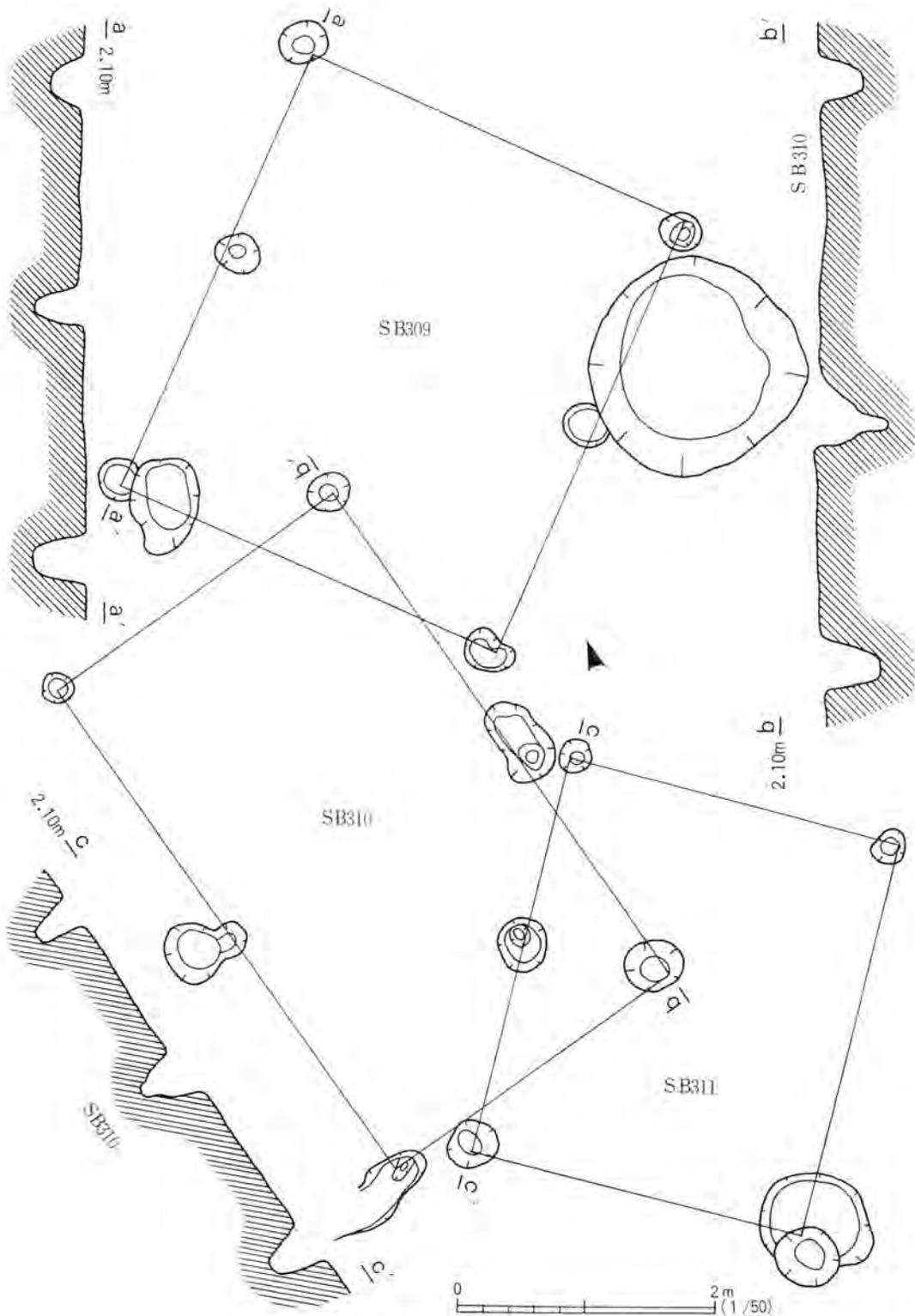
L-11にある2間(4.57m)×1間(2.63m)の南北棟建物で、方位はN-14°-Wである。柱穴は遺存状況が悪く、原形をとどめていないものが多い。南北方向の柱間寸法は約2.3m等間であるが、柱痕が検出されているのがありそれによって計測すると不等間隔になる。覆土は暗褐色土もしくは茶褐色土である。

SB 311 (第18図)

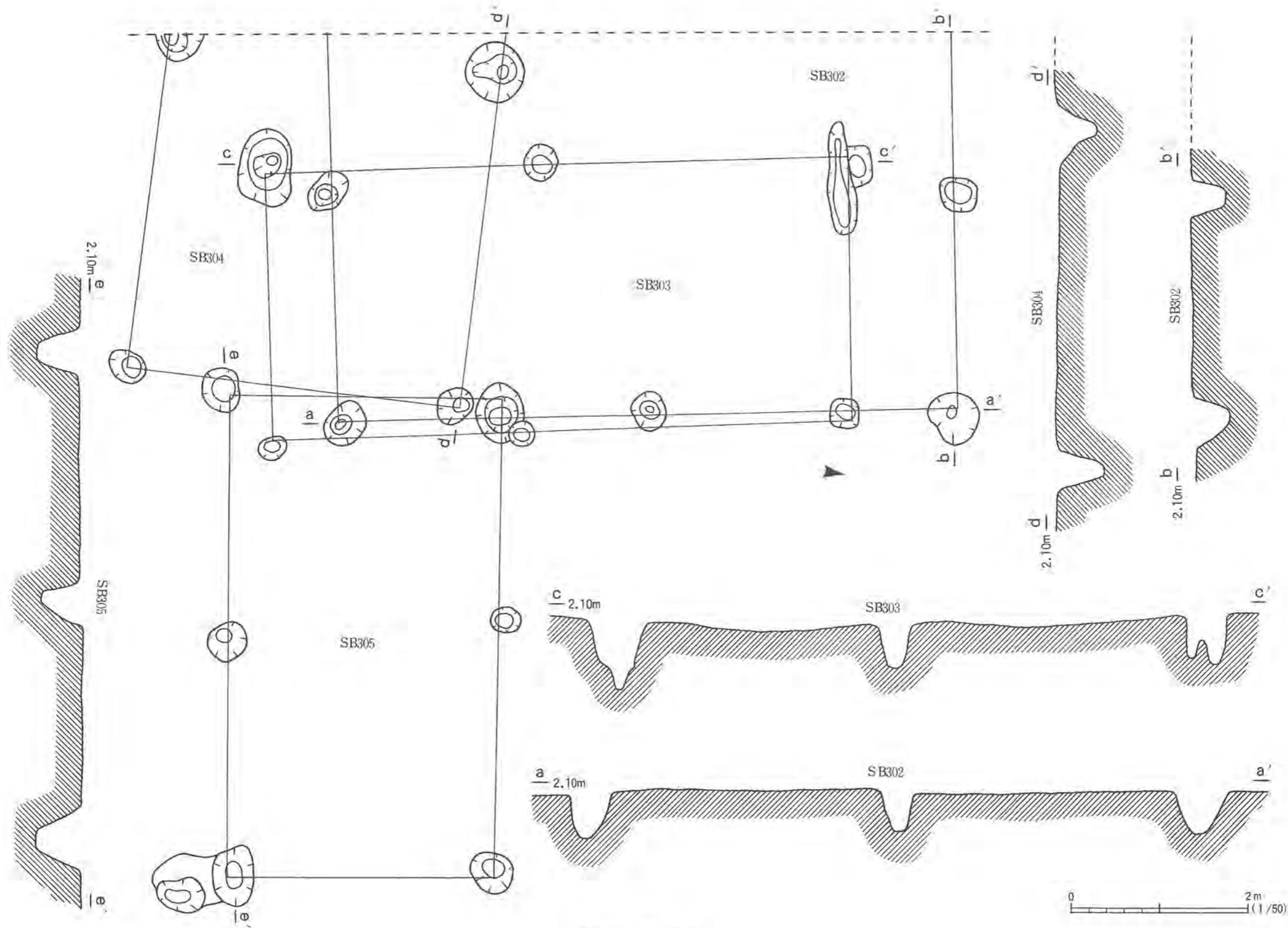
K・L-11・12にある南北2間(3.2m)×東西1間(2.6m)の掘立柱建物で、確認されている掘立柱建物のなかでは一番規模が小さいものである。方位はN-34°-Eをさす。南北方向で柱穴を検出できなかったところがあるが、確認できるところで柱間寸法は1.5m前後を測る。暗褐色土であるが砂質に近い覆土をもつ。



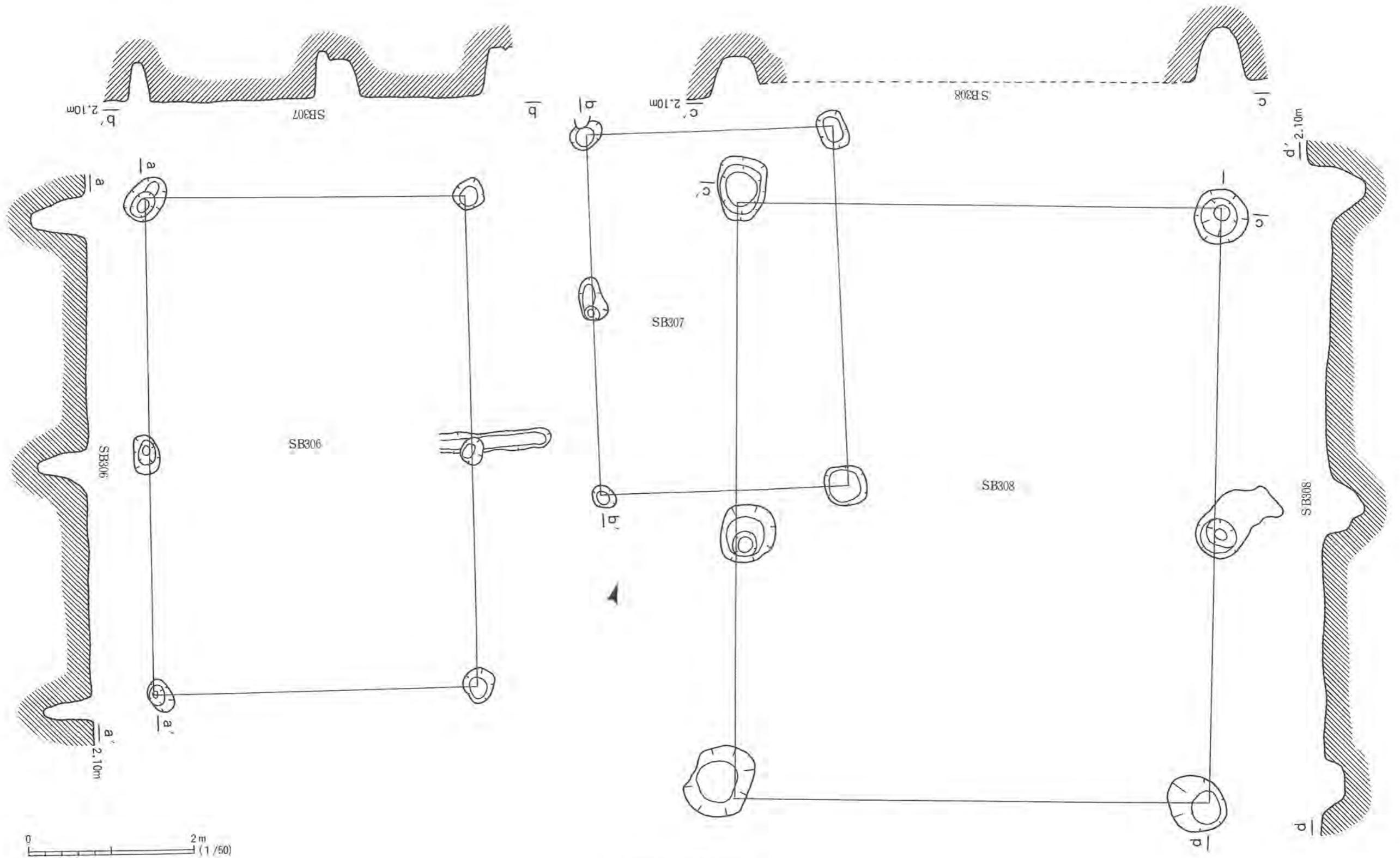
第17图 遺構実測図



第18图 遺構実測図



第19图 遺構実測図



第20図 遺構実測図

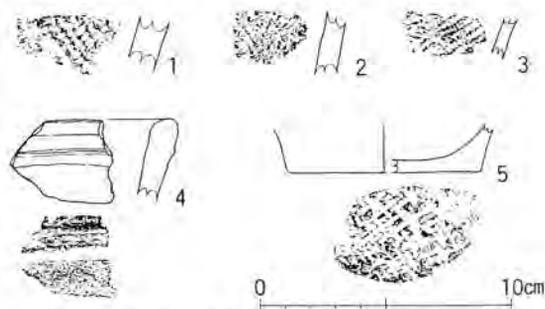
c. 溝状遺構・畝状遺構（第9図、付図）

SD 9（第9図、付図）

調査区のほぼ中央H・I-1-1～9を南北方向にはしる溝状遺構である。H・I-6付近でとぎれておりその北側と南側とでは形状がやや異なる。北側の溝は幅2～2.5m、深さ0.6～0.8mである。断面をみると底部にさらに小溝が走って段状になっている。覆土は暗褐色、黒褐色といった中世包含層と同じものである。検出面からの深さは北の方が深い、底部の標高はほとんど差がない。一方南側の溝は幅が約3m、深さが0.45mである。断面形は中央がもり上っており2本の溝が平行して走っているようであるが、覆土で観察するかぎりにおいては切りあいが認められず1本の溝とした。北側の溝でみられるものよりは黄色味があった、やや砂質ほい覆土である。両者とも同じ遺構としてとらえ、空堀と考えるものである。

畝状遺構（付図）

幅の狭い溝が平行してはしっているもので、4～5本が群をなして並んでいる。調査区西側（I-L-1-9）にみられるが、削平されて原形をとどめていないところもある。1の条の幅は30cmほどで約60cmの間隔をもつ。群と群の間隔は約5～8cmである。覆土は中世包含層と似ているが、SD 9を切っていることより中世末の遺構と考えられる。本遺跡で一番新しく位置付けられる遺構である。



第21図 遺物実測図（1/3）縄文工器

第V章 遺物

荒木前遺跡の出土遺物はコンテナで約10箱である。大半が平安時代と中世の遺物であるが、両者の間では6:4～7:3の割合で平安時代の遺物が多い。他には縄文時代中・後期、古墳時代、奈良時代、近世、近代の遺物のごく少量出土している。

1. 土器・陶磁器類

遺構からまとめて出土したものがほとんどないため、種別ごとに記述する。縄文土器、転用砥石以外については観察表を作成し、本文中は概要にとどめた。

a. 縄文土器 (第21図、図版28)

3 (表採)を除いてすべて、平安時代あるいは中世の遺構からの出土である。1はRL、3はLRの縄文が施された胴部片(2の原体は不明)、4は口縁部片で口唇部直下に微隆帯が施されている。5は底部外面に網代痕がみられるものである。1・2・4は中期後葉、3・5は後期初頭のものと思われる。

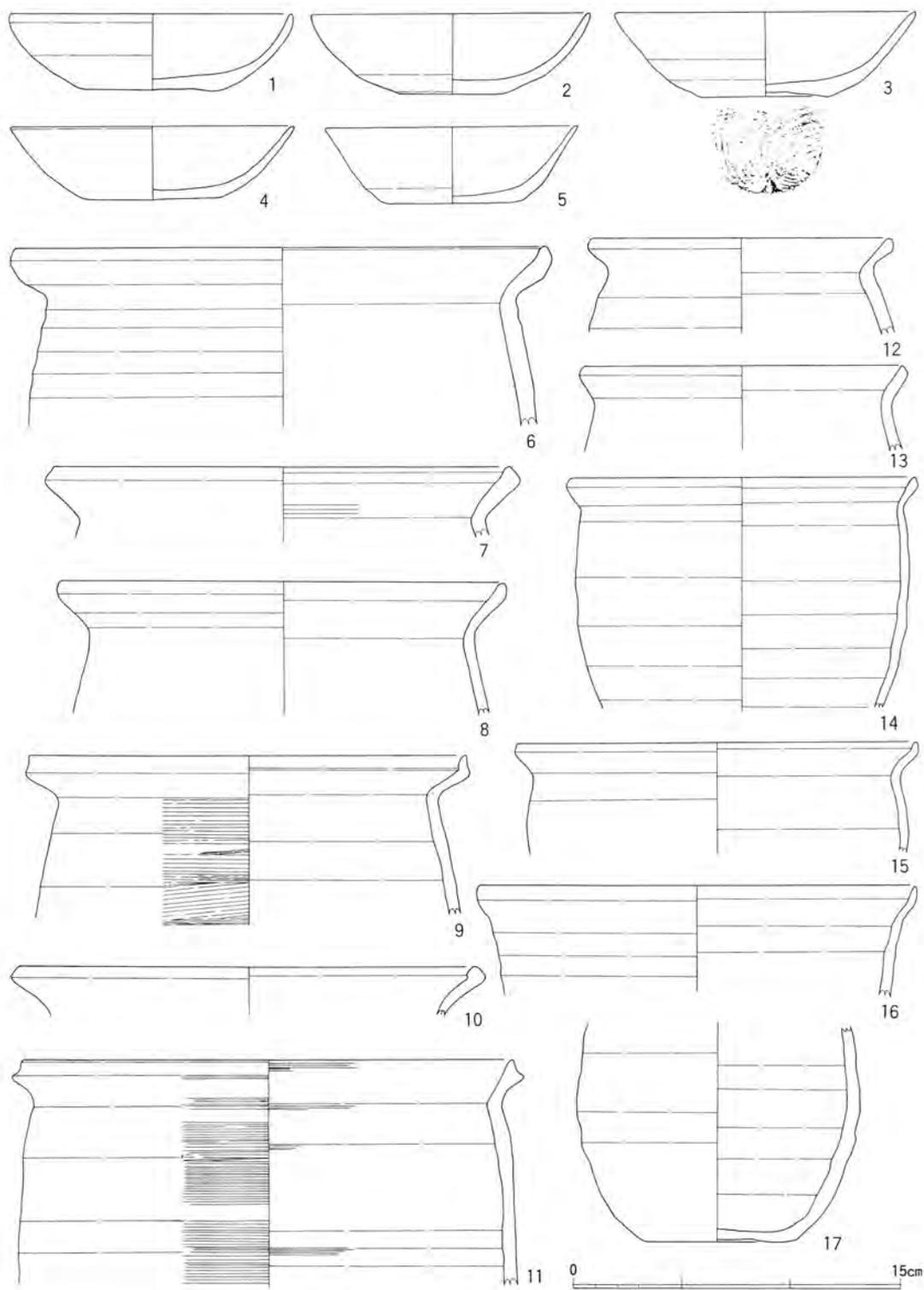
b. 土師器 (第23図1～26、図版14表4)

出土量のもっとも多いものである。完形あるいは近い遺存のものではなく、ほとんどが破片資料である。器形復元できるものも20数個体と少ない。主な器種として碗、甕、鍋がみられる。碗(1～5)はすべて無台で、摩耗していないものは底部外面に回転糸切り痕が確認できる器面は丁寧なロクロナデ外面に施される。甕(6～19)は口縁部の遺存も少なく器形復元に苦労したが、大きさに多くの種類があり確実に小甕と思われるもの以外は「甕」とした。甕もまた、摩耗して調整の不明なものが多い。口縁部はほとんど「く」の字状に外反するが、16のようにあまり屈曲しないものもある。端部は丸くおさまるもの(6・8・12・13・14)面を作り出すもの(7・11)上方へつまみあげられ面をもつもの(9・10・15)がみられる。鍋(20～26)は甕に比べるとずっと少なく、遺存率もよくない。口縁部は「く」の字状に外反するが端部のつまみあげが顕著なものはない。24は小型の鍋である。25・26は口縁部形態、口径から鍋と考えた。

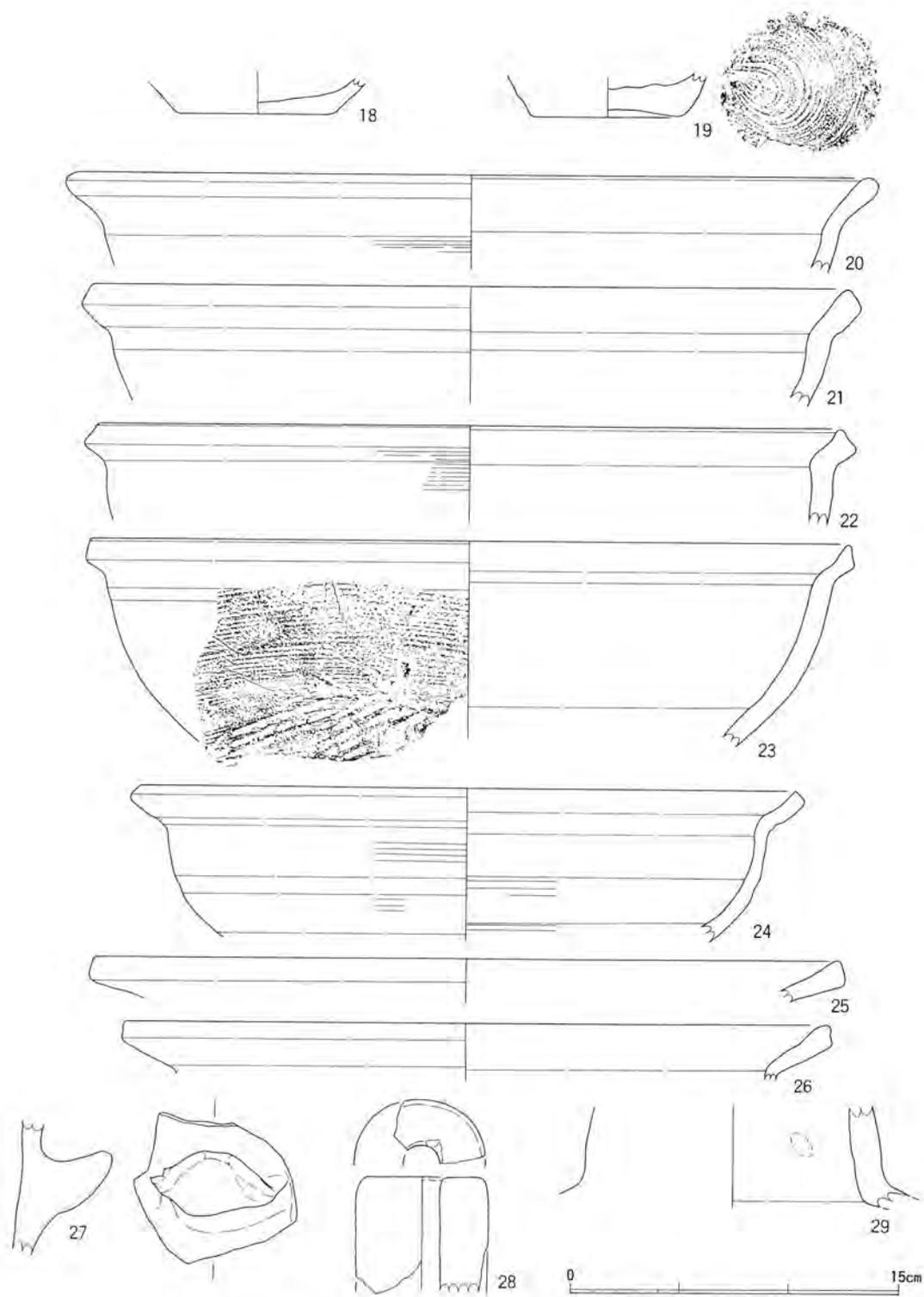
c. 須恵器 (第24図30～64、第25図65～86、図版15～17表4)

出土は土師器にくらべやや少ない程度である。無台杯、有台杯、杯蓋、壺類、甕類といった器種がみられるが、供膳具が多い。時期的には9世紀後半～10世紀前半のものが中心で佐渡・小泊窯のものが多い。他には8世紀のものもいくつかみられる。

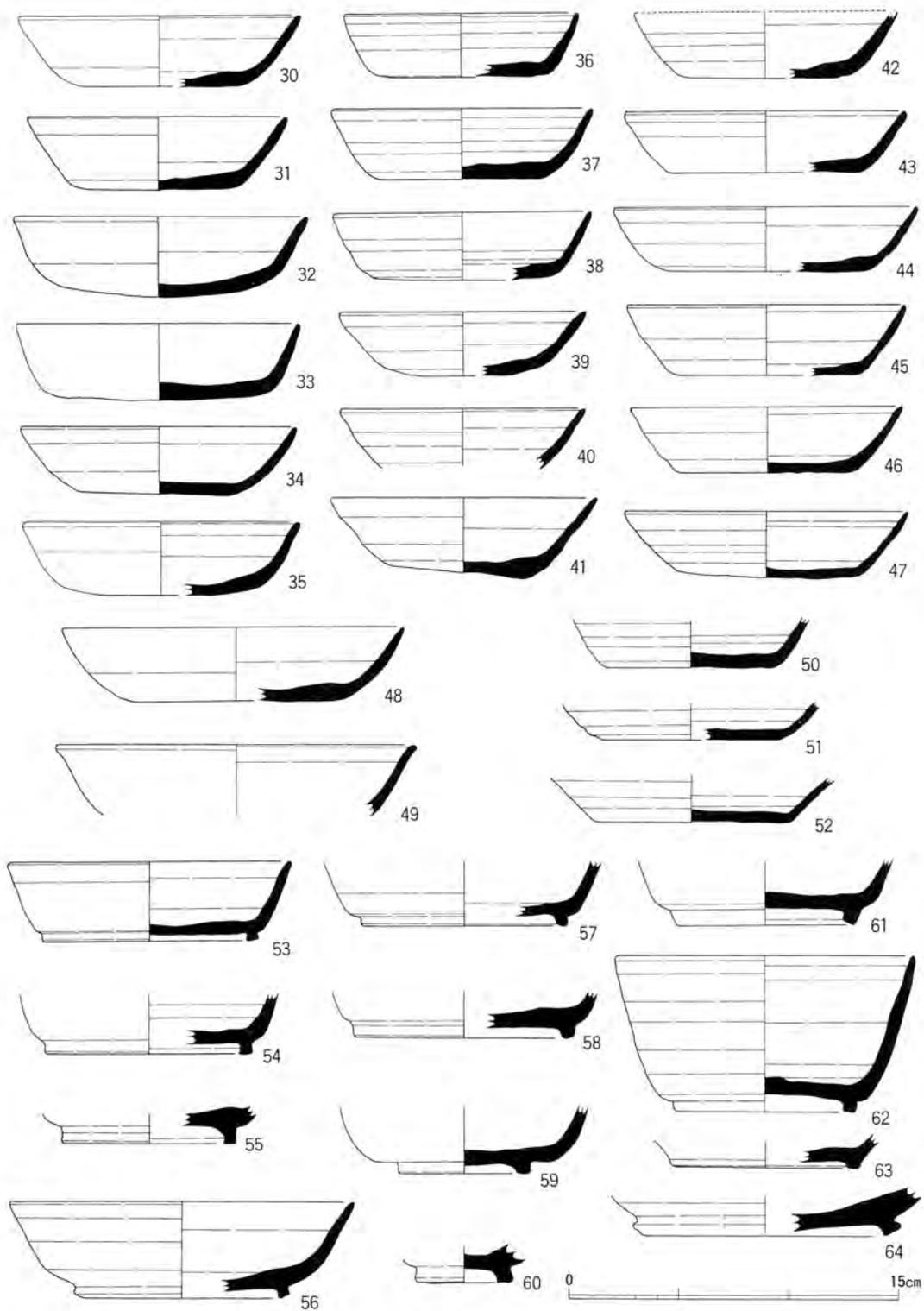
無台杯は大きく3種類の形態がみられる。a. 口径12～13.5cm、器高3cm前後。器壁が厚手で底部から口縁部にかけて曲線的であるもの(32・33) b. 口径12～13.5cm、器高3cm前後。



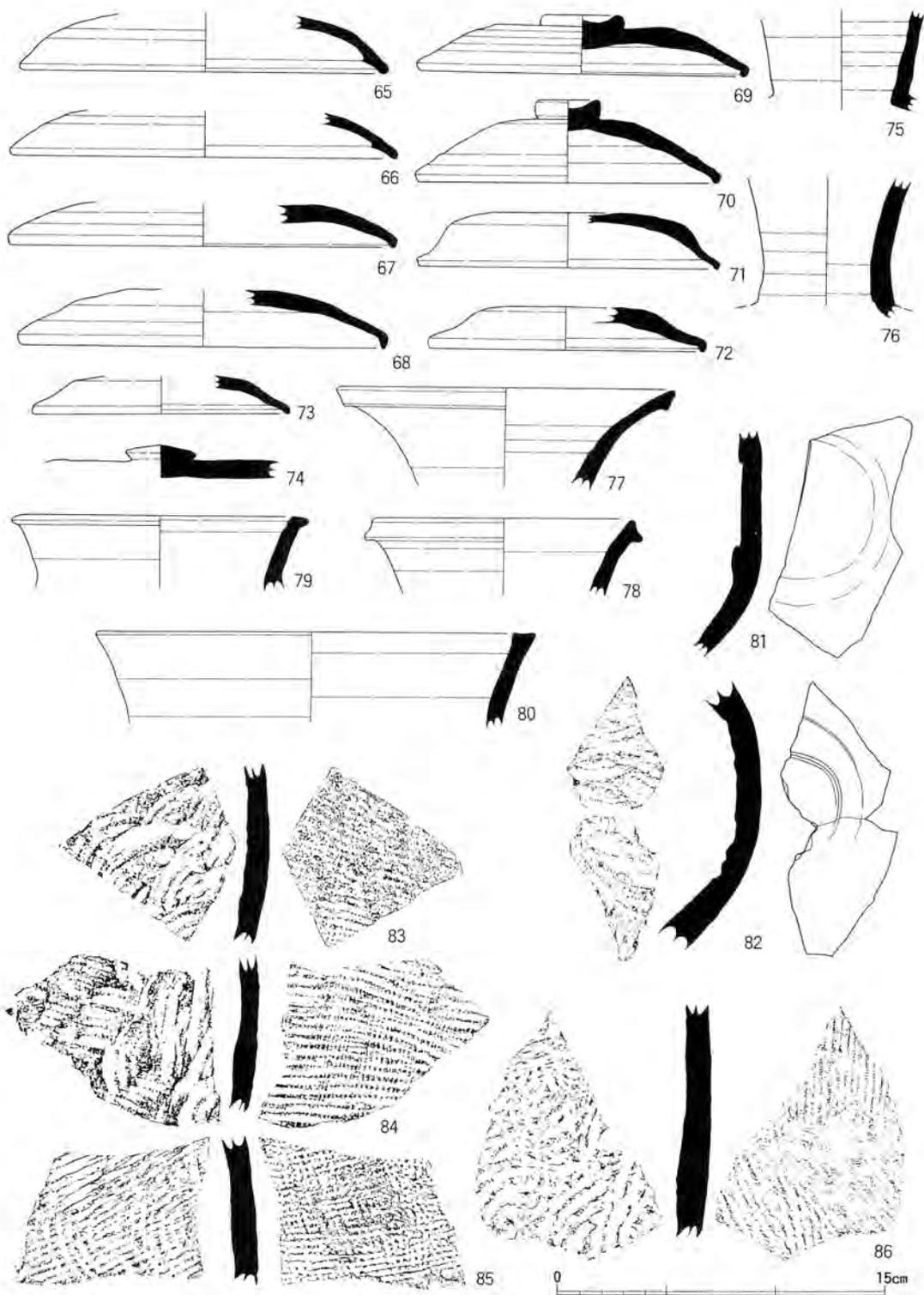
第22図 遺物実測図 (1 / 3) 土師器



第23図 遺物実測図 (1 / 3) 土師器 (18~27) 土製品 (28,29)



第24図 遺物実測図 (1 / 3) 須恵器



第25图 遗物实测图(1/3) 須惠器

器壁がaにくらべ薄く底部から口縁部への立ち上がりが明確なもの(30・31・34～47・50～52)

c. 口径が15～16cmとa、bにくらべ大きく、体部の立ち上がりにやや丸味をおびるもの(48・49)である。aとb・cでは時期差があると思われる、aは8世紀末～9世紀前半、b・cは9世紀後半～10世紀前半に位置づけられよう。31・32・35・41は阿賀北地方の製品である。有台杯は身の浅いものと深いものがみられるが、破損品が多く器高を確認できるものが少ない。8世紀末～9世紀前半の小泊窯産のものが多いが、56のように阿賀北地方産でやや古くなるものもある(60も阿賀北地方の製品である)。杯蓋には古いタイプがみられる。65・66はかえりがつくもので7世紀末～8世紀初頭に、67・74は同一個体と思われる8世紀前半にそれぞれ位置づけられよう。75～78は長頸瓶でいずれも小泊窯製品である。79・81・82は横瓶で79・81は小泊窯製品、82は阿賀北地方(笹神?)産である。

d. 船載陶磁器 (第29図119～129・133・134・図版22表4)

図示できなかつたものを含めて20点ほど出土している。内容は青磁、白磁、染付といったものである。119・120の染付皿はも文様がはっきりしないが、形態から16世紀に比定されるものと思われる。青磁碗は上田氏の分類(上田1982)によるB類—外面に蓮弁文をもつものとE類—口縁が内湾するものが存在する。122・123はB—I類(13世紀末～14世紀前半)121はB—II類(14世紀中頃～15世紀初頭)124はB—IV類(15世紀後半～16世紀前半)125はE類(14世紀中頃～15世紀初頭)に属する。青磁皿の126～128は15世紀前半～中葉のものであろう。129・133・134は白磁皿である。129は森田氏の分類(森田1982)のD群(14世紀後半～15世紀代)133・134はD群かE群(15世紀後半～16世紀代)にあたる。

e. 瀬戸・美濃焼 (第29図130～132・135～137・139・142・143、図版22・23表4)

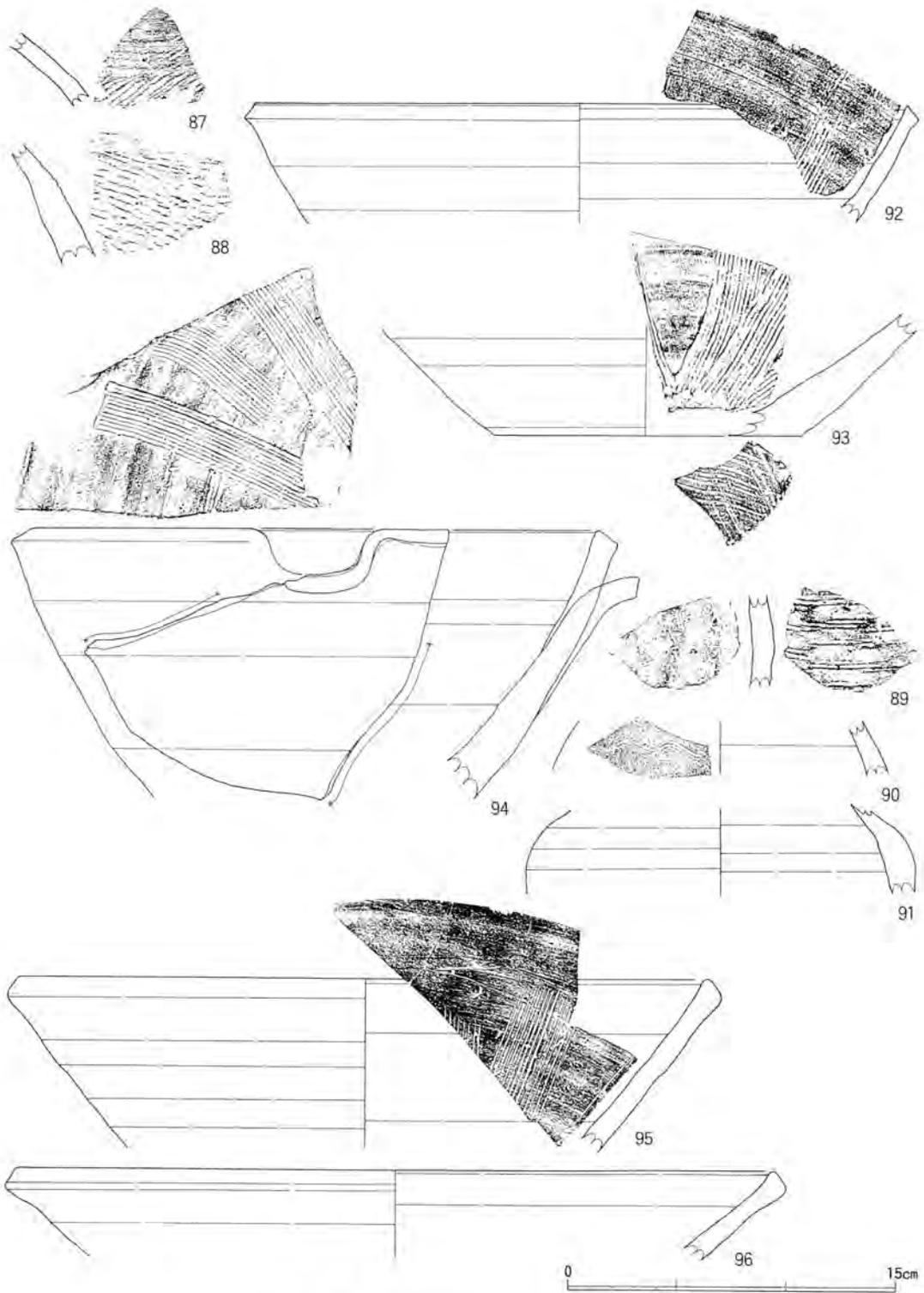
130～132は黄緑釉のかかるものである。大窯期の製品と思われる16世紀前半におさまるものであろう。135～137は天目茶碗で、136は古瀬戸の後期様式の15世紀前半に位置づけられる。135は大窯期のごく初期のものと思われる。139は15世紀中葉～後半に比定されるものである。

f. 瓦質土器 (第29図140・141、図版23表4)

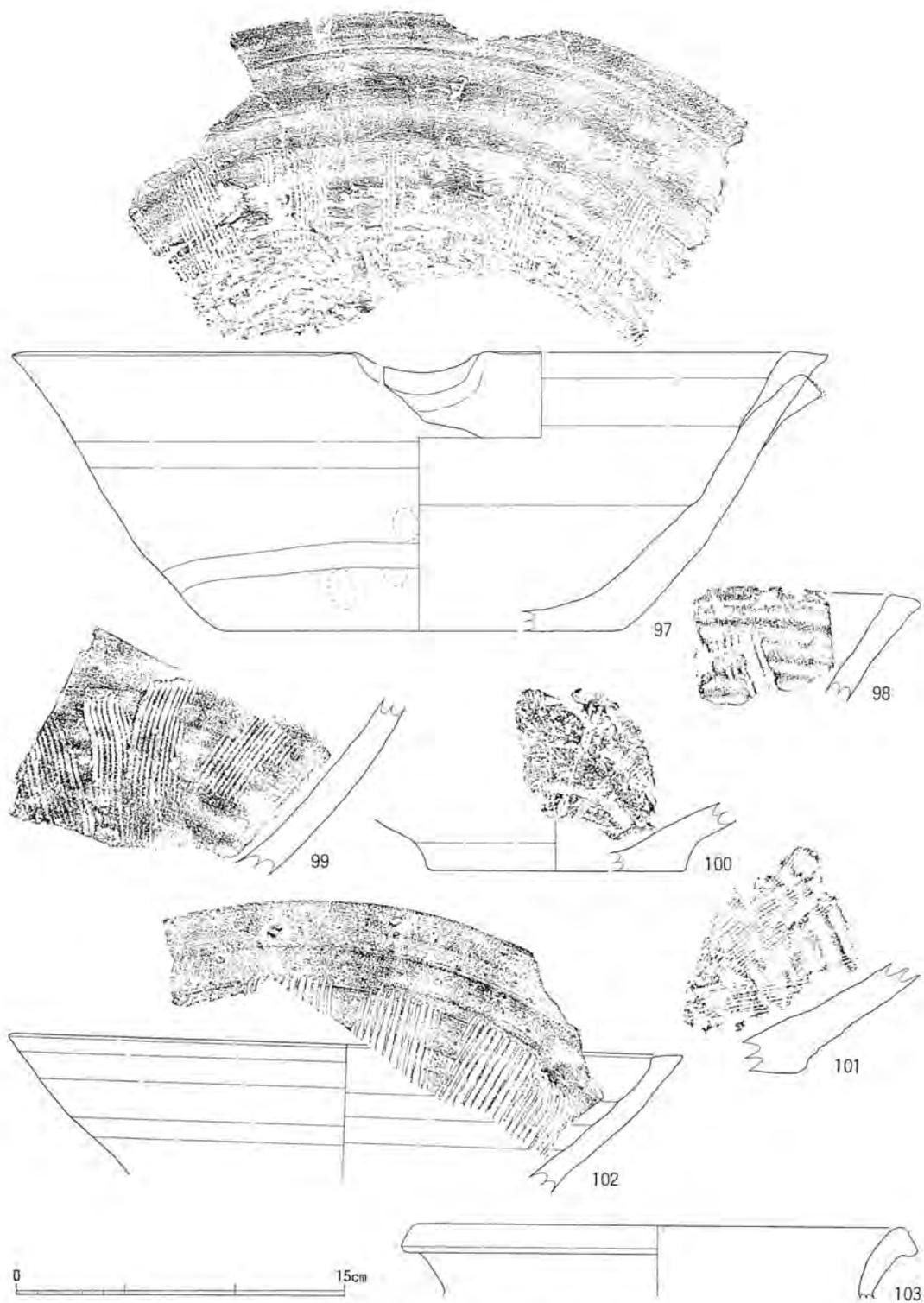
どちらも器面の調整が丁寧であり、体部外面にスタンプ文が施される。SD 9から出土しているが、伴出遺物に時期幅があり、時期比定ができない。

9. 珠洲焼、珠洲系陶器 (第27図87～96、第28図97～103、第29図104～106、図版18・19・20表4)

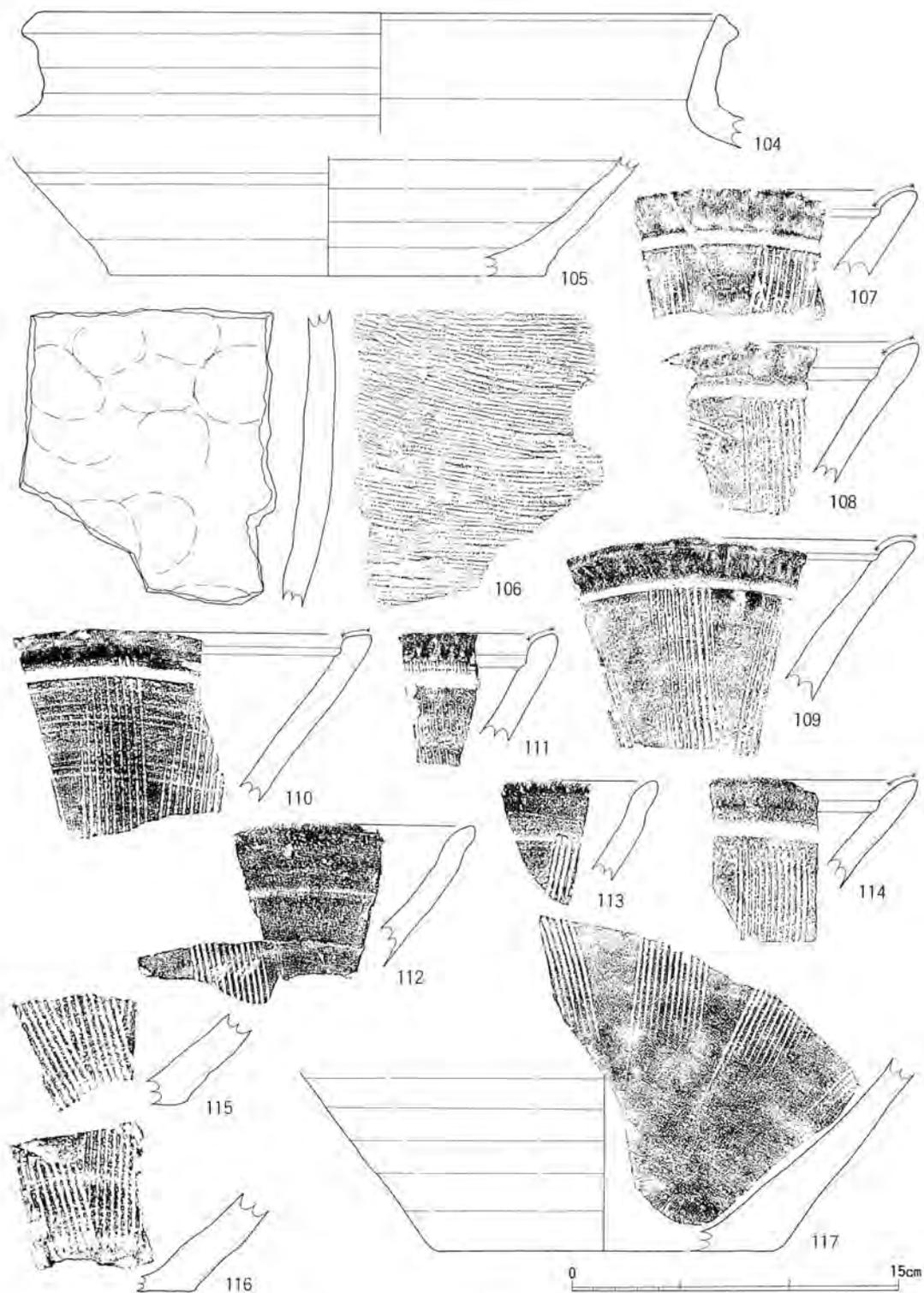
中世遺物の中では一番多く出土しており、テンバコ2箱ほどである。器種は壺、甕、片口鉢(播鉢、捏鉢)であるが、播鉢が圧倒的に多い。壺は叩き成形のもの(吉岡分類の壺T種)とロク口成形のもの(同R種)がみられる。量的には前者が多く87～89・103～105があてはまる。後者には90・91があたるが、どちらも小型の壺である。89の叩き目はあまり例を知らないが、亀田町中の山遺跡で同様のものが出土している。播鉢は口縁部にいくつかの形態がみられる。端部外面で面をとるもの(吉岡編年のII期にあたり92～96が属す)と水平な面をもつもの(吉岡編年のIV期にあたり97～102が属す)の2種類がみられる。他に今回図化しなかつたが笹神系の胎土をもつ「珠洲系陶器」の破片が出土している。暗色の胎土に粗い(0.5～15mm)石英粒を含むも



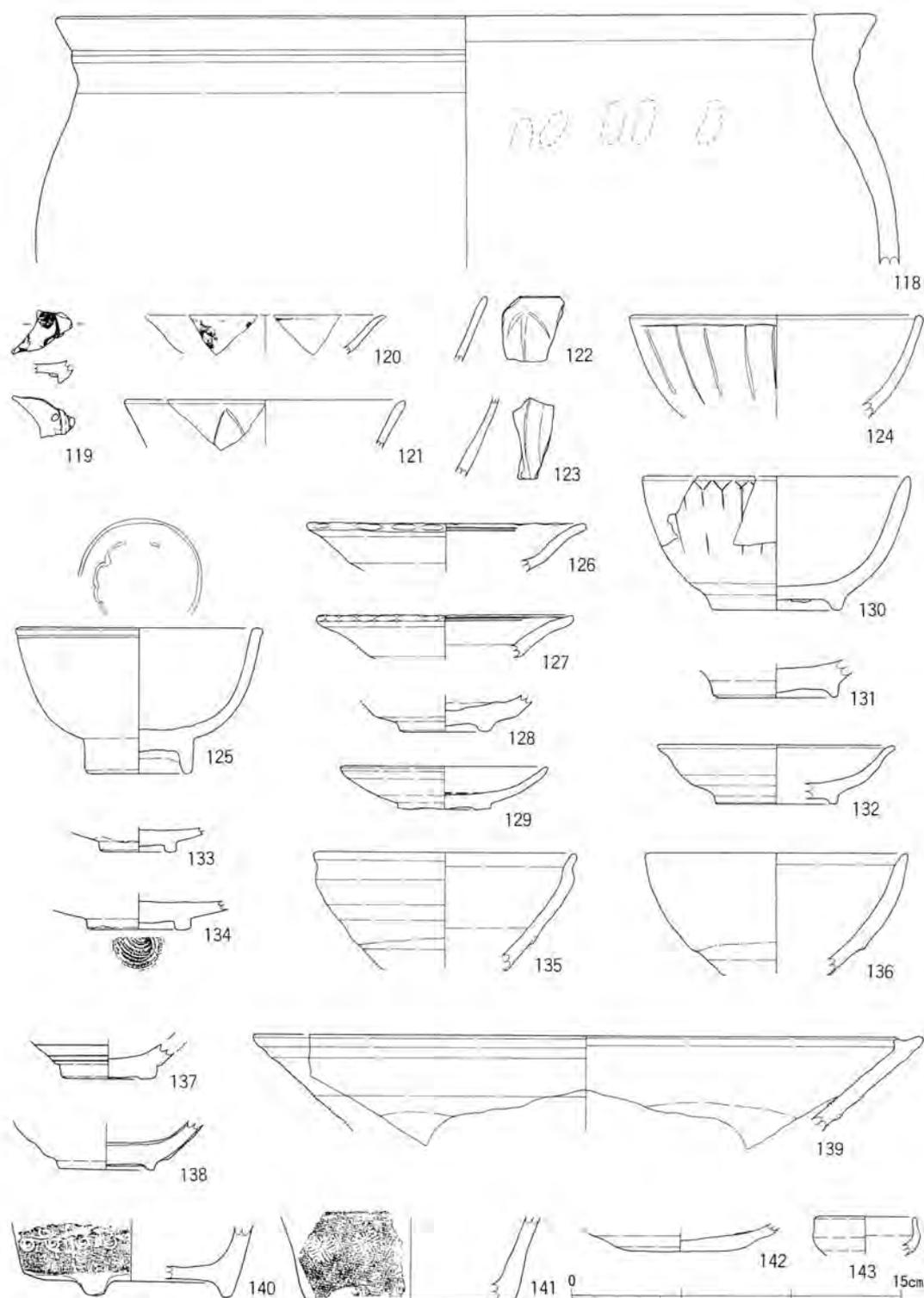
第26図 遺物実測図 (1 / 3) 珠洲焼



第27図 遺物実測図 (1 / 3) 珠洲焼



第28図 遺物実測図 (1 / 3) 珠洲焼 (104~106) 越前焼 (107~117)



第29図 遺物実測図 (1/3)

越前焼(118) 船載染付(119,120) 船載青磁(121~128) 船載白磁(129,133,134)
 瀬戸・美濃焼(130~132,135~137,139,142,143) 瓦質土器(140,141) 不明(138)

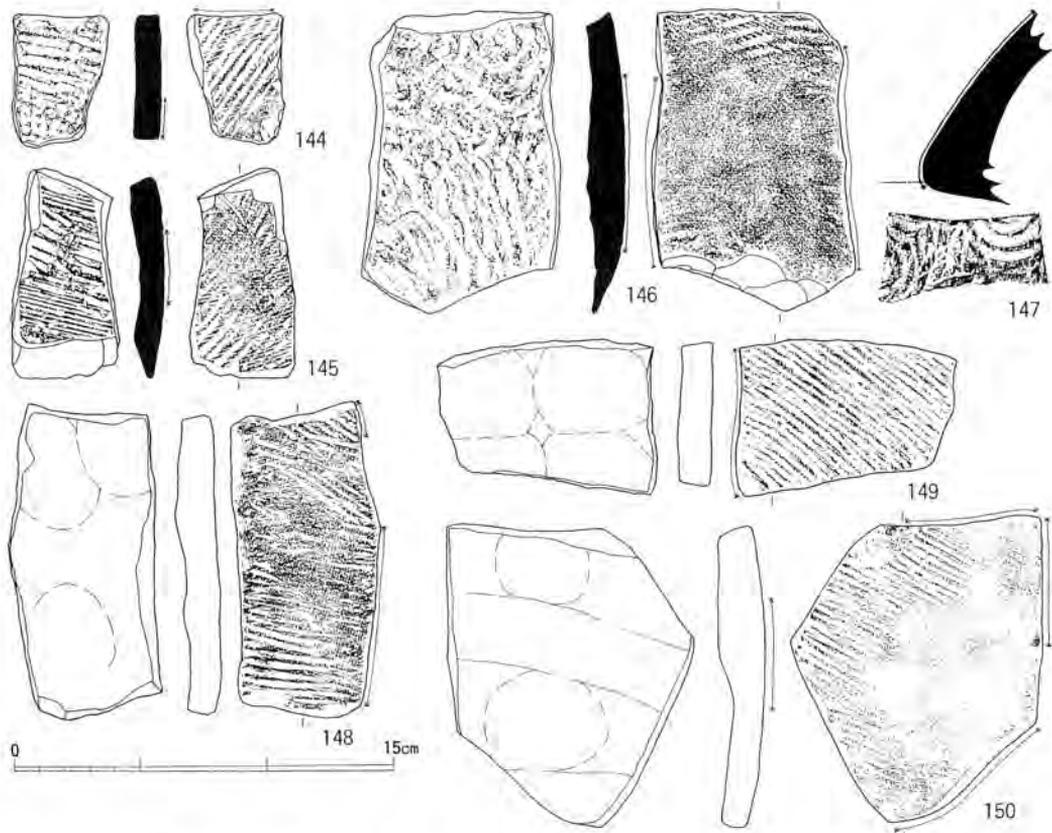
ので甕か壺の破片と思われる。

h. 越前焼 (第29図107~117、第30図118、図版21・22表4)

播鉢と甕が出土している。時期幅があまりなく、16世紀前半~後半に比定される。107~111・114の口唇部は摩耗しており、二次使用も考えられる。

i. 転用砥石 (第30図)

面が摩滅して平滑なものを取り上げた。擦痕が顕著にみとめられるのは少ないが、大きさ形状をみると石製砥石と類似しているところが多く、材料が須恵器、珠洲焼という硬質の素材であるというところから砥石として二次使用されたものと考えた。144~147は須恵器、148~150は珠洲焼で重量は次のとおりである。144、35g・145、60g・146、190g・147、185g・148、155g・149、146g・150、270gである。第26図94の珠洲焼の播鉢片も転用砥石の可能性もある。



第30図 遺物実測図 (1/3) 転用砥石 須恵器(144~147) 珠洲焼(148~150)

表4 土器・陶磁器観察表

No.	出地点	種別	器種	遺存	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
1	1トレンチ	土師器	碗	1/2	12.9	6.0	3.6	明褐	長石、細雲母、小礫	内面丁寧なナデ。底部回転糸切り。	外面磨耗。
2	L-1.2	土師器	碗	体部1/2欠	12.8	5.0	3.8	明褐	長石	内面丁寧なナデ。	外面磨耗。
3	K.L-13.14	土師器	碗	口縁部1/2欠	13.7	5.8	4.0	淡褐	長石、細雲母、小礫	体部外面下位ヘラケズリ。底部回転糸切り。	器面磨耗。
4	K-1	土師器	碗	1/2	13.0	6.1	3.5	淡褐	長石、細雲母、小礫	底部回転糸切り。	器面磨耗。
5	J-3	土師器	碗	1/2	11.6	6.4	3.6	淡褐	長石、小礫	底部回転糸切り。	器面磨耗。
6	L-8	土師器	甕	口縁～体部1/2	14.4			明褐	長石、細雲母、石英、小礫	口縁部ロクロナデ。体部上位にかすかなカキ目痕。	体部外面磨耗。
7	SK103	土師器	甕	口縁部1/2	21.0			白褐	長石、細雲母、石英	口縁部ロクロナデ。口縁部内面下位にかすかなカキ目痕。	
8	L-13	土師器	甕	口縁部1/2	20.4			淡褐	長石、細雲母、小礫	口縁部ロクロナデ。	器面磨耗。
9	J-3	土師器	甕	口縁～体部1/2	20.0			淡褐	長石、小礫	口縁～体部内面ロクロナデ。体部外面カキ目。	
10	SE94	土師器	甕	口縁部1/2	21.0			淡褐	長石、細雲母、小礫	口縁部ロクロナデ。	器面磨耗。
11	J-3	土師器	甕	口縁～体部1/2	22.6			淡褐	長石、細雲母、小礫	内外面にカキ目。	
12	L-14	土師器	甕	口縁部1/2	13.6			明褐	長石、細雲母、石英、小礫	口縁～体部内面ロクロナデ。	外面磨耗、口縁～体部外面、被熱。
13	L-15	土師器	甕	口縁部1/2	14.6			淡褐	長石、石英、小礫	口縁部ロクロナデ。	口縁部内面煤付着。
14	4トレンチ	土師器	甕	口縁～体部1/2	15.7			淡褐	長石、小礫	口縁～体部ロクロナデ。	器面磨耗、口縁～体部外面煤付着。
15	K-1	土師器	甕	口縁部1/2	18.3			淡褐	長石、小礫	口縁～体部ロクロナデ。	口縁部内面煤付着。
16	K-13.14	土師器	甕	口縁～体部1/2	20.1			淡褐	長石、小礫	口縁～体部ロクロナデ？。	器面磨耗、口縁～体部外面煤付着。
17	L-14	土師器	小甕	底部体部1/2		6.9		白褐	長石、小礫	体部ロクロナデ？。	器面磨耗。
18	J-3	土師器	小甕	底部1/2		7.2		淡褐	長石、石英	内面ロクロナデ。底部回転糸切り。	
19	SK28	土師器	小甕	底部		6.9		明褐	長石、長英、小礫	内面ロクロナデ。底部回転糸切り。	
20	L-14	土師器	鍋	口縁部1/2	36.4			淡褐	長石、石英、小礫	口縁部ロクロナデ。体部外面上位にかすかなカキ目痕。	器面磨耗。
21	H-7	土師器	鍋	口縁部1/2	34.8			淡褐	長石、小礫	口縁～体部にかすかなカキ目痕。	外面煤付着。
22	H-8	土師器	鍋	口縁部1/2	34.1			明褐	長石、細雲母	口縁～体部カキ目。	
23	L-13	土師器	鍋	口縁～体部1/2	34.8			淡褐	長石、細雲母、石英、小礫	体部外面上半カキ目、下半タタキ目。	内面磨耗、体部下半煤付着。
24	L-13	土師器	鍋	口縁～体部1/2	30.2			明褐	長石、小礫	口縁部ロクロナデ。体部内外面カキ目。	外面磨耗。

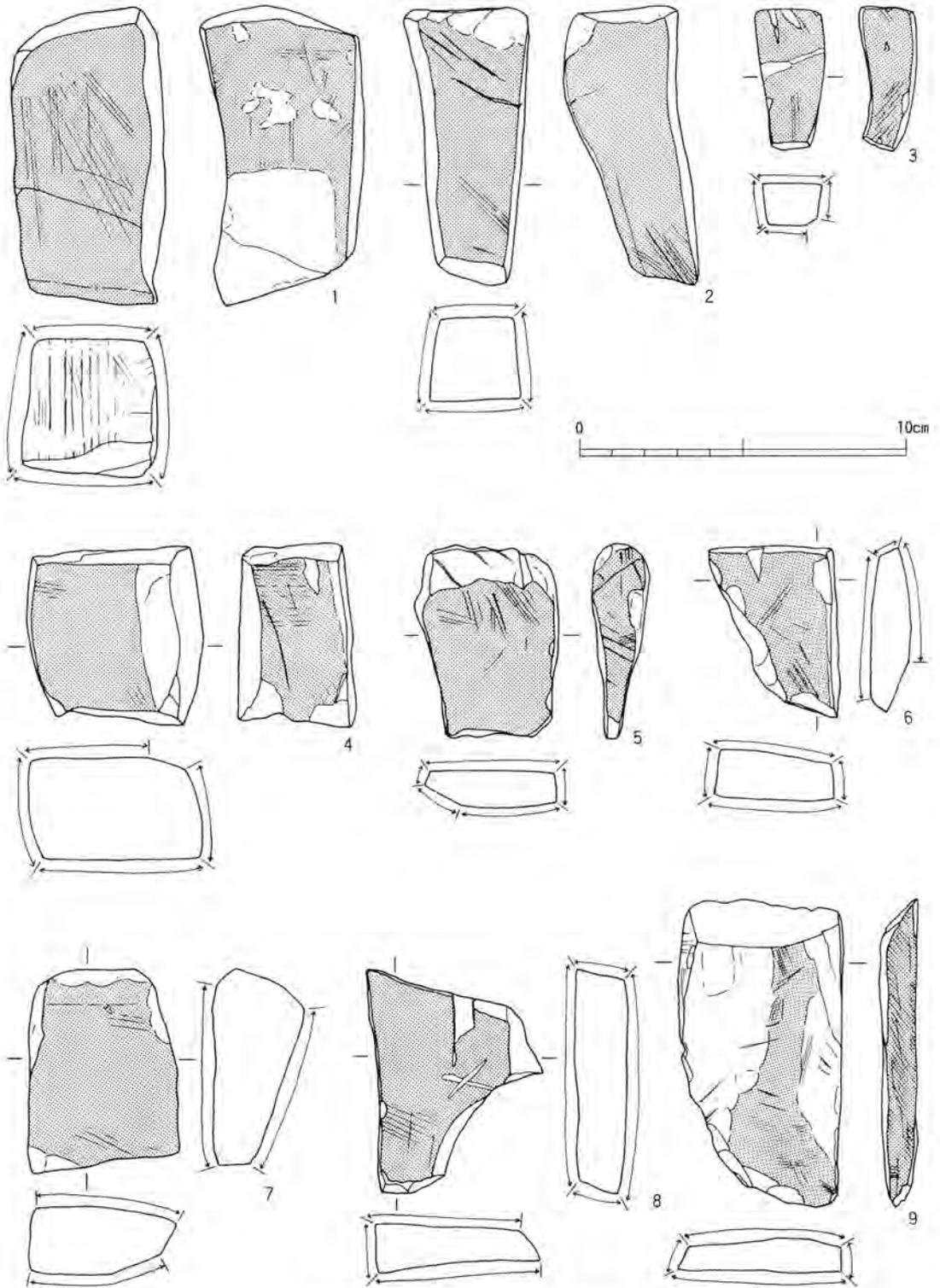
No	出地点	種別	器種	遺存	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
25	K-9.10	土師器	鍋	口縁部 $\frac{1}{4}$	34.2			淡褐	石英、小礫	口縁部ロクロナデ。	器面磨耗。
26	SK103	土師器	鍋	口縁部 $\frac{1}{4}$	32.4			淡褐	石英、小礫	口縁部ロクロナデ。	器面磨耗。
27	I-5	土師器	甌	把手				明褐	長石、細石英、小礫	内部ロクロナデ。	
28	L-7	土製品	土錘					淡褐	海綿骨針	手握ね。	
29	L-7	土製品	円筒形支脚					明褐		内面に指頭痕？。	器面磨耗。
30	1トレンチ	須恵器	無台杯	$\frac{1}{4}$	13.0	7.6	3.3	灰		体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
31	SK103	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$	11.7	8.0	3.4	灰	長石、石英、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り→かるいなデ？。	
32	J-5	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	13.3	10.2	3.75	黄灰	長石、石英、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	器面やや磨耗。
33	K-3	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	12.8	9.8	3.6	黄灰	長石、小礫	体部ロクロナデ。	器面磨耗。
34	K-1	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	12.5	6.9	3.1	灰	白色小粒子、黒色小斑点	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
35	1トレンチ	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	12.8	9.8	3.4	灰	長石、細雲母、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
36	SE43	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	10.7	8.9	4.0	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
37	1トレンチ	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$	11.8	7.5	3.3	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、板状圧痕。	
38	K-12	須恵器	無台杯	$\frac{1}{4}$	11.8	8.4	3.2	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
39	I-7	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	11.2		3.0	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	粒子かなり密。
40	L-13	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$	11.1			灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。	
41	I-4.L-2	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	12.1		3.5	灰	長石、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
42	J-1	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	(11.8)	7.7	(3.1)	灰	長石、石英、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
43	K-12	須恵器	無台杯	$\frac{1}{4}$	12.6	8.8	2.9	淡灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
44	K-13	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	13.7	(9.2)	3.0	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
45	K-12	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	12.5	8.2	3.3	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、板状圧痕。	
46	SK28	須恵器	無台杯	完形	12.3	7.8	3.0	灰	白色小粒子、黒色小斑点	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
47	J-3	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	12.8	8.2	3.1	淡灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
48	J-3	須恵器	無台杯	$\frac{1}{2}$	15.5	(9.6)	3.4	淡灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	器面磨耗、生焼けカ

No	出地点	種別	器種	遺存	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
49	1トレンチ	須恵器	無台杯	体部 $\frac{1}{4}$	16.2			淡灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。	
50	SE87	須恵器	無台杯	体底部 $\frac{1}{2}$		7.6		灰	黒色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、板状圧痕。	
51	K-14	須恵器	無台杯	体底部 $\frac{1}{2}$		8.0		淡灰	白色小粒子、黒色小斑点	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
52	4トレンチ	須恵器	無台杯	体部一部底部 $\frac{1}{2}$		8.8		淡灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。	
53	J-4	須恵器	有台杯	$\frac{1}{2}$	12.8	㊦ 9.8	3.7	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	
54	L-12	須恵器	有台杯	体底部 $\frac{1}{4}$		㊦ 9.4		灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。高台内ヘラ切り痕。	
55	L-14	須恵器	有台杯	底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 7.9		暗灰	長石、細雲母、小礫	底部ヘラ切り、高台貼付→ロクロナデ。	
56	I-5	須恵器	有台杯	$\frac{1}{2}$	15.6	㊦ 8.9	4.5	灰	長石、石英、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り高台貼付→ ロクロナデ。	
57	SE51	須恵器	有台杯	体・底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 9.2		灰	白色小粒子、小礫	体部ロクロナデ。高台内ヘラ切り痕。	
58	SK103	須恵器	有台杯	底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 9.6		灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	
59	K-7	須恵器	有台杯	体底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 5.8		灰	白色小粒子、小礫	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	
60	K-8	須恵器	瓶	体底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 3.2		灰	白色小粒子、石英	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	外面に少量の自然釉
61	H-7	須恵器	有台杯	底部 $\frac{1}{2}$ 欠		㊦ 8.0		灰	白色小粒子、黒色小斑点	高台内ヘラ切り痕。	底部内面煤付着
62	F.G-6.7	須恵器	有台杯	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	13.4	㊦ 8.0	7.2	灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	
63	H-7	須恵器	瓶類?	底部 $\frac{1}{4}$		㊦ 8.3		灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。底部ヘラ切り、高台貼付 →ロクロナデ。	
64	SK47	須恵器	壺類?	底部 $\frac{1}{2}$		㊦ 10.8		灰	白色小粒子、石英	底部内面、不定方向ロクロナデ。底部ヘラ 切り、高台貼付→ロクロナデ。	
65	1トレンチ	須恵器	杯蓋	体部 $\frac{1}{4}$	16.6			灰	長石、石英	体部ロクロナデ。	
66	1トレンチ	須恵器	杯蓋	体部 $\frac{1}{2}$	17.6			灰	長石、石英	体部ロクロナデ。	縁部、かえり。
67	F-1	須恵器	杯蓋	天井～体部 $\frac{1}{2}$	17.6			灰	黒色小粒子	天井部、体部ロクロナデ。	縁部、かえり。
68	4トレンチ	須恵器	杯蓋	天井～体部 $\frac{1}{2}$	16.6			灰	長石、石英	天井部外面ヘラケズリ。天井部内面、体部 ロクロナデ。	外面自然釉 (まだら状に剝離)
69	L-13	須恵器	杯蓋	$\frac{1}{2}$	14.8		2.8	灰	白色小粒子	天井部外面ヘラケズリ。天井部内面、体部 ロクロナデ。	
70	L-13	須恵器	杯蓋	体部 $\frac{1}{2}$ 欠	13.8		3.9	灰	白色小粒子、黒色小斑点	天井部外面ヘラケズリ。	
71	T-4	須恵器	杯蓋	天井～体部 $\frac{1}{4}$	13.7		2.6	灰	長石、石英、小礫	天井部、体部ロクロナデ。	
72	I-5	須恵器	杯蓋	天井～体部 $\frac{1}{4}$	12.5		2.0	灰	長石、黒色小粒子	天井部、体部ロクロナデ。	

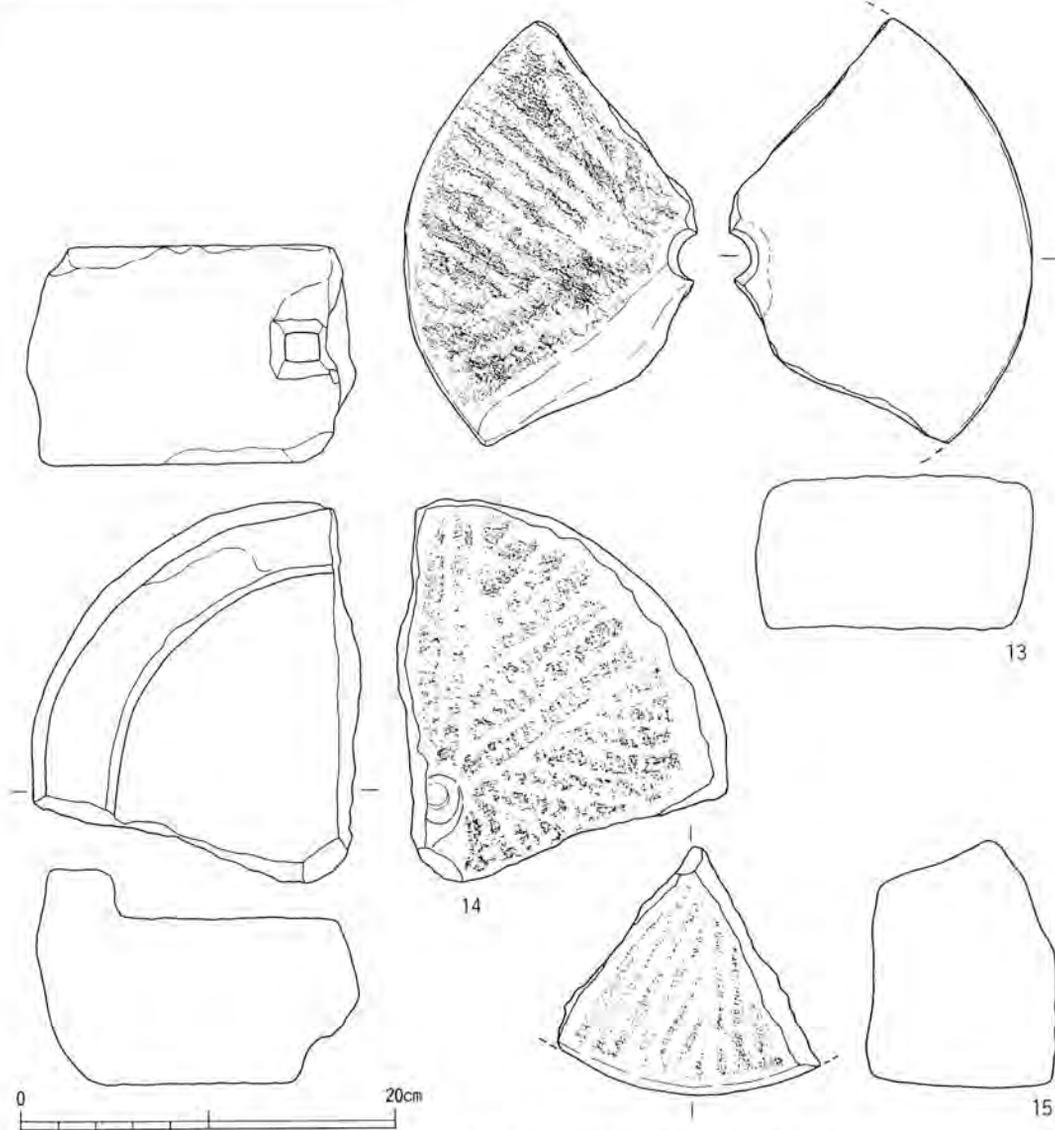
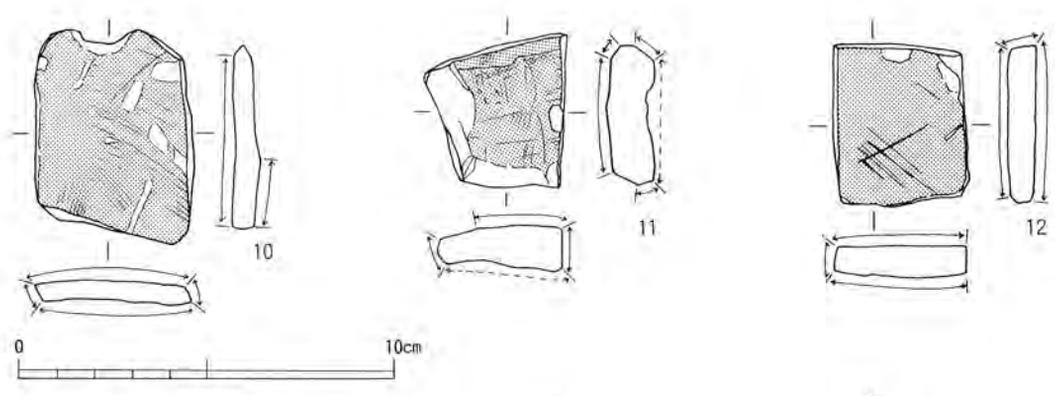
No.	出地点	種別	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
73	SD9	須恵器	杯蓋	体部 $\frac{1}{2}$	11.6			灰	白色小粒子	体部ロクロナデ。	
74	SD9	須恵器	杯蓋	つまみ、天井部一部				灰	黒色小粒子	天井部ロクロケズリ→ロクロナデ。	No67と同一個体カ
75	SD9	須恵器	長頸瓶	頸部 $\frac{1}{2}$				灰	白色小粒子、黒色小斑点	頸部ロクロナデ。	
76	I-8	須恵器	長頸瓶	頸部 $\frac{1}{2}$				灰	長石、石英	頸部ロクロナデ。	
77	L-7	須恵器	長頸瓶	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$	15.4			暗灰	白色小粒子、黒色小斑点	口縁～頸部ロクロナデ。	
78	SD9	須恵器	長頸瓶	口縁部 $\frac{1}{2}$	11.9			暗灰	白色小粒子、黒色小斑点	口縁～頸部ロクロナデ。	
79	K-12	須恵器	横瓶	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$	12.4			暗灰	長石、石英	口縁部つまみ出し。内外面ロクロナデ。	
80	4トレンチ	須恵器	大甕	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$	17.4			灰	長石、石英、小礫	口縁部ナデ。内外面ロクロナデ。	
81	L-15	須恵器	横瓶	体部一部				灰	長石、石英	外面丁寧なナデ。内面粘土接合痕あり。	
82	SE44	須恵器	横瓶	体部一部				灰	長石、石英、小礫	外面、同心円状のナデ痕。内面同心円、あて具痕。	
83	SD9	須恵器	甕	体部一部				灰	白色小粒子、石英	外面、格子タタキ。内面同心円あて具痕。	
84	L-12	須恵器	甕	体部一部				灰	長石、石英、小礫	外面、格子タタキ。内面平行あて具痕→同心円あて具痕。	
85	SK42	須恵器	甕	体部一部				灰	白色小粒子	外面、平行タタキ。内面同心円あて具痕。	
86	SK95	須恵器	甕	体部一部				暗灰	白色小粒子、小礫	外面、平行タタキ。内面同心円あて具痕。	
87	H-3	珠洲焼	壺	肩部一部				青灰	白色小粒子	内面ロクロナデ。外面ロクロナデ→タタキ。	
88	SE47	珠洲焼	壺カ甕	肩部一部				青灰	白色小粒子、海綿骨針	内面横位のナデ。外面ロクロナデ→タタキ。	
89	SD9	珠洲焼	壺	体部一部				淡青灰	白色小粒子、小礫	内面円形あて具痕。外面平行条線(2条あるいは3条一単位の)タタキ。	
90	4トレンチ	珠洲焼	壺	体部一部				淡赤灰	海綿骨針	内面ロクロナデ。外面ナデ櫛描の波状文。	
91	K-10	珠洲焼	壺	口縁部 $\frac{1}{2}$				暗青灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(11本)。	
92	SD9	珠洲焼	播鉢	肩部 $\frac{1}{2}$	30.0			暗青灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ。	
93	J-14	珠洲焼	播鉢	体～底部 $\frac{1}{2}$		(14.2)	14.2	淡青灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(11本)。底部外面ハケ状工具によるナデ。	
94	G-2.3	珠洲焼	播鉢	口縁～体部 $\frac{1}{2}$	26.0			淡青灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(11本)。	割れ口磨耗(砥石として二次利用カ)
95	G-2.3	珠洲焼	播鉢	口縁～体部 $\frac{1}{2}$	31.7			黄灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(13本)。	
96	L-8	珠洲焼	播鉢	口縁～体部 $\frac{1}{2}$	34.8			黄灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ。	

No	出地点	種別	器種	遺存	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
97	SE85	珠洲焼	播鉢	½(片口あり)	33.8	(18.4)	13.0	青灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(11本)。体部外面下位指頭痕。底部静止糸切→板状圧痕。	体部内面下半器面の剝離著しい。
98	J-1	珠洲焼	播鉢	口縁部一部				黄灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(7本)。	
99	SE55	珠洲焼	播鉢	体部½				灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(9本)。	内面一部煤付着。内面使用による磨耗。
100	L-7	珠洲焼	播鉢	底部½		(11.6)		黄灰	白色小粒子、海綿骨針、小礫	ロクロナデ→内面播目(8本?)。底部外面静止糸切。	内面使用による磨耗顕著。
101	SE91	珠洲焼	播鉢	体~底部½				黄灰	白色小粒子、小礫	ロクロナデ→内面播目(12本?)。底部外面静止糸切?。	内面煤付着。
102	SE63	珠洲焼	播鉢	体部½	30.5			淡青灰	白色小粒子、黒色小粒子、小礫	ロクロナデ→内面播目(10本)。	口唇部内面自然袖付着。
103	K-8	珠洲焼	壺	口縁部½	22.2			灰	白色小粒子	ロクロナデ。	
104	L-4	珠洲焼	壺	口縁~頸部½	31.3			灰	石英、海綿骨針	体部ロクロナデ。	
105	J-13	珠洲焼	壺	体~底部½		(20.0)		青灰	白色小粒子、小礫	体部ロクロナデ→タタキ(破片上端にかすかに痕)。底部外面静止糸切。	
106	J-13	珠洲焼	甕	体部片				青灰	白色小粒子、小礫	内面あて具痕の上をナデ。外面タタキ。	
107	SD9	越前焼	播鉢	口縁部½				明茶褐	白色粒	ロクロナデ。播目(9本)→内面沈線。	口唇部磨耗。
108	2トレンチ	越前焼	播鉢	口縁部一部				明茶褐	白色粒	ロクロナデ。内面沈線→播目(10本)。	口唇部内面煤付着。
109	SD9	越前焼	播鉢	口縁部½				明茶褐	小礫	ロクロナデ。播目(9本)→内面沈線。	口唇部磨耗。口唇部内面煤付着。
110	SD9	越前焼	播鉢	口縁部½				明茶褐		ロクロナデ。播目(9本)→内面沈線。	口唇部磨耗。
111	SD9	越前焼	播鉢	口縁部一部				灰色	白色粒	ロクロナデ。播目(不明)→内面沈線。	口唇部磨耗。
112	SD9	越前焼	播鉢	口縁部一部				橙	橙色、小礫	ロクロナデ。播目(12本)。	
113	J-12	越前焼	播鉢	口縁部一部				橙		ロクロナデ。	
114	I-7	越前焼	播鉢	口縁部一部				橙		ロクロナデ。播目(12本)。	口唇部磨耗。
115	SE83	越前焼	播鉢	体部下半一部				明褐		ロクロナデ。播目(9?本)。	
116	SD9	越前焼	播鉢	体部下半一部				明褐		ロクロナデ。播目(9?本)。	
117	SD9	越前焼	播鉢	体部下半½		(15.5)		暗黄褐		ロクロナデ。播目12本。	内外面、割れ口煤付着。
118	SE91	越前焼	甕	口縁部½	32.1			明茶褐		ロクロナデ(指頭痕あり)。	割れ口煤付着。
119	K-6	舶載染付	皿	見込一部						高台断面三角形。高台脇界線。見込玉取獅子文の一部?。高台内小礫付着。	
120	SD9	舶載染付	皿	口縁部一部	10.8					口縁部外面界線、唐草文?。	

No.	出地点	種別	器種	遺存	法量(cm)			色調	胎土	成形・調整	備考
					口径	底径	器高				
121	K-13	舶載青磁	碗	口縁部 $\frac{1}{2}$	12.7				灰白色、硬質	片切彫の蓮弁文カ。	
122	H-7	舶載青磁	碗	口縁部一部					灰白色、硬質	片切彫の蓮弁文。	
123	L-11	舶載青磁	碗	体部一部					灰白色、硬質	片切彫の蓮弁文。	
124	SD9	舶載青磁	碗	口縁～体部 $\frac{1}{4}$	13.0				暗灰白色、硬質	ヘラ先による線描蓮弁文。	
125	SD9	舶載青磁	碗	体部 $\frac{1}{4}$ 欠	10.6	4.4	6.8		暗灰白色、やや粉質	口縁外面直下に横位の沈線。見込円形沈線と印刻文。高台内蛇ノ目釉ハギ。	高台内一部煤付着。
126	G-5	舶載青磁	稜花皿	口縁～体部 $\frac{1}{2}$	12.6				暗灰白色	口唇部、工具の押しつけによる波状。口縁内面直下に横位の沈線2本。	
127	SD9	舶載青磁	稜花皿	口縁～体部 $\frac{1}{4}$	11.6				暗灰白色	口唇部、工具の押しつけによる波状。口縁内面直下に横位の沈線2本。	
128	I-7	舶載青磁	稜花皿	底部 $\frac{1}{2}$		3.8			灰色	見込、高台内、畳付無釉。	
129	SE44	舶載白磁	皿	$\frac{1}{2}$		2.8			白色、硬質	削り輪高台。畳付に弧状の 挟り 高台周辺露胎(無釉)。	見込、畳付、高台内輪下チ跡。
130	SE91	瀬戸・美濃焼	丸碗	体部 $\frac{1}{2}$ 欠	11.9	5.6	6.2	㊦黄緑	暗黄白色	印花文原体の連続施文による蓮弁文。	釉に貫入あり。高台内目跡。
131	SD9	瀬戸・美濃焼	丸碗	底部		5.2		㊦黄緑	暗黄白色	高台内無釉。	釉に貫入あり。高台内目跡。
132	K-5	瀬戸・美濃焼	端反皿	$\frac{1}{2}$	10.6	4.9	2.7	㊦黄緑	暗黄白色	高台内中央部無釉。	釉に貫入あり。高台内目跡。
133	SD9	舶載白磁	皿	底部		3.0			黄白色、やや粉質	削り輪高台。高台内～高台脇無釉。	釉に細い貫入。高台内黒痕。
134	SD9	舶載白磁	皿	底部		3.0			黄白色、やや粉質	削り輪高台。高台内、畳付無釉。	釉に細い貫入。
135	SD9	瀬戸・美濃焼	天目茶碗	体部 $\frac{1}{2}$	11.8			㊦チョコレート	淡褐灰	体部外面下位(高台周辺)化粒掛。	
136	L-7	瀬戸・美濃焼	天目茶碗	体部 $\frac{1}{4}$	11.7			㊦黒褐	淡褐灰	体部外面下位無釉。	
137	SD9	瀬戸・美濃焼	天目茶碗	底部		2.8		㊦黒褐	淡褐灰	削り出し高台。高台周辺無釉。口唇部チョコレート色の釉。	
138	I-5	不明	碗(丸碗カ)	底部 $\frac{1}{2}$		4.2		㊦赤黒	灰、混入物少、密	高台内溶け出した釉付着(基本的には無釉だったと思われる)。	二次的被熱による釉変色。
139	SD9	瀬戸・美濃焼	大平鉢	口縁～体部 $\frac{1}{2}$	30.4			㊦黄緑	淡褐白、やや粉質	体部外面ロクロ目顕著。	口縁部内面にかえりをもつ。
140	SD9	瓦質土器	香炉	体～底部 $\frac{1}{4}$					淡褐灰	体部外面連続渦巻印刻文。内面ロクロナデ。外面丁寧なナデ。板状脚。	内面煤付着。底部外面中央薄煤痕。
141	SD9	瓦質土器	香炉	体部 $\frac{1}{2}$		(9.6)			淡褐灰	体部外面印花文。内面ロクロナデ。外部ミガキ。	外面一部煤付着。
142	L-6	瀬戸・美濃焼	丸皿	底部 $\frac{1}{2}$				㊦黄緑	淡褐白	底部ナデ。底部脇指ナデ。底部外面無釉、内面灰釉。見込目あと。	外面一部煤付着。
143	3トレンチ	瀬戸・美濃焼	徳利?	口縁部 $\frac{1}{2}$	4.4			㊦鉄釉	暗灰		



第31图 遺物実測図(1/2) 砥石



第32图 遺物実測図 砥石 (1/2)(10~12) 石臼 (1/4)(13~15)

2. 土製品 (第23図28、29、表4、図版15)

28は円筒形の土鍾である。欠損しており全長は不明であるが、径は約6cmである。使用痕は認められない。29は支脚である。段をもつものと思われるが、全体像ははっきりしない。明褐色を呈しており、二次的被熱の可能性がある。

3. 石製品 (第31、32図、図版25)

a. 砥石 (1~12)

全部で14点出土しており、そのうちの12点を図化した。欠損状態にかなりばらつきがあるため、短軸方向の断面形を中心とした特徴をみることにする。断面形には大きく2種類の形態がみられる。断面の長辺と短辺の比が2:1以上のもつものとそれに満たないものである。前者は1~4、後者は5~12にあたる。ほとんどのものが4面に擦痕などの使用痕がみられる。石材は1と3が緑色凝灰岩、それ以外は泥岩である。重量は1、250g・2、113g・3、22g・4、123g・5、42g・6、29g・7、83g・8、50g・9、65g・10、25g・11、28g・12、22gとなっている。遺構出土のものは1、3~8、11、12であり、4、6、12がSD 9から、5がSE 51から、11がSE 83からそれぞれ出土している(その他は小ピットから単独出土である)。

b. 石臼 (13~15)

上臼と下臼が合わせて5点出土しているが、図化できたのは3点である。13は下臼で中央に下まで貫通する芯棒孔がある。上面(溝の面)の中央のもり上がりも下面のくぼみも大きくはない。石材は凝灰岩で3,725gある。14は上縁部にふちが残る上臼である。下面の中央には芯棒受けのくぼみがあり、深さは約2.5cmを測る。挽き木が横打ち込み式で側面に方形の穴がみられる。石英安山岩で重量は4,700gである。15は石英安山岩の下臼である。これら3点はいずれもSD 9から出土しており、13と15には部分的に被熱のあとがみられる。

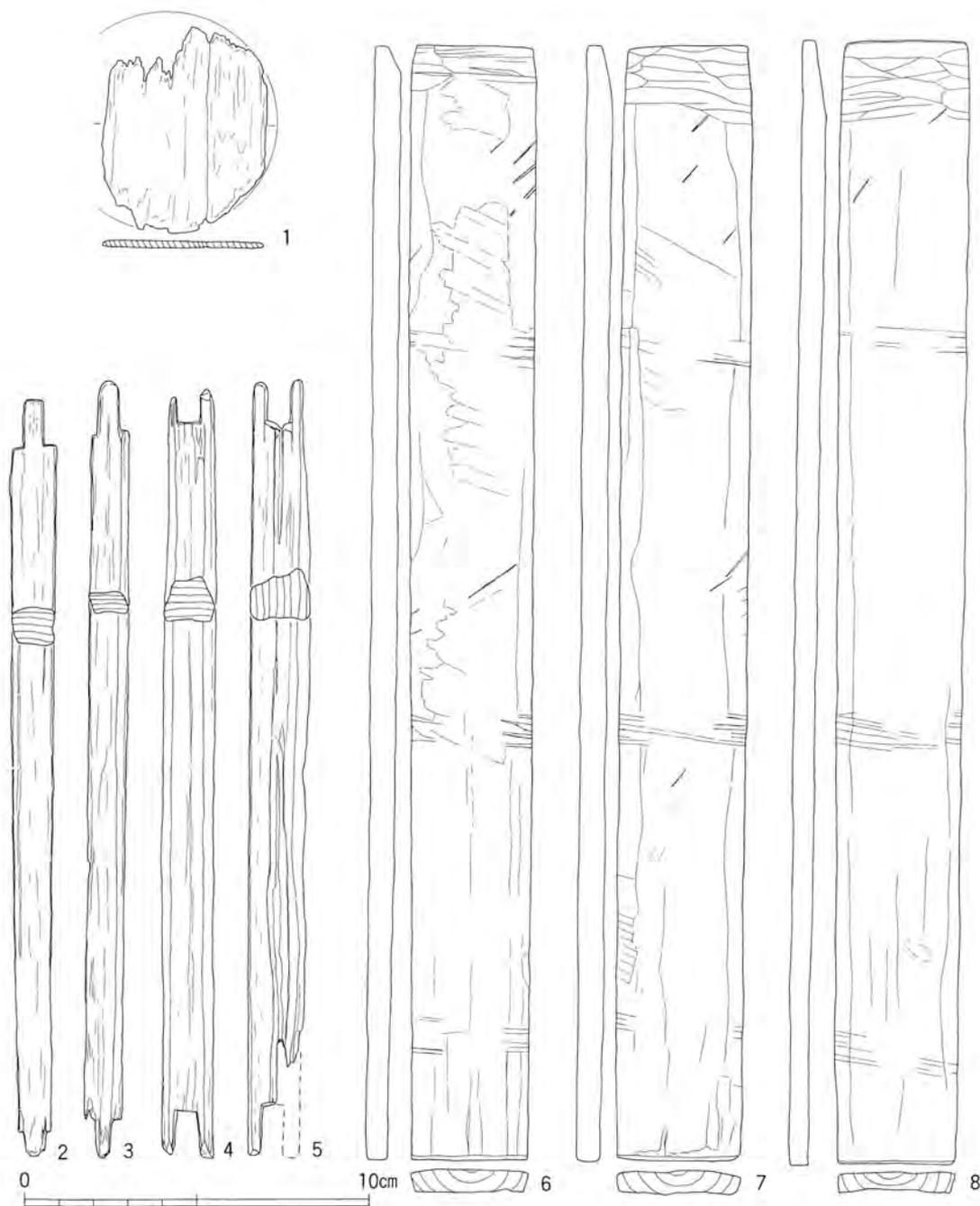
4. 銭貨 (第33図)

中国銭が3点出土している。そのうち2点(1、2)は接着しており、遺存状況も悪い。1は



第33図 銭貨拓影 (1:1)

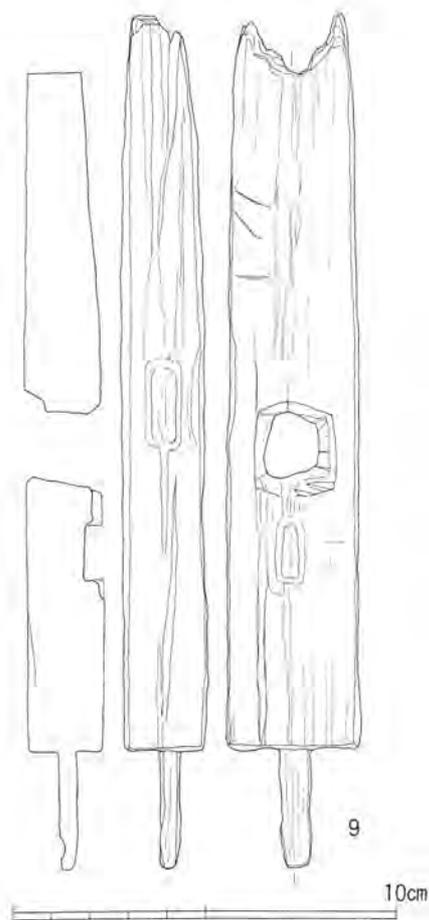
唐銭で「開元通宝」、2・3は北宋銭でそれぞれ「熙寧元宝」・「祥符元宝」である。いずれもK・L-7・8に位置するピットから出土しており、そのピットが柱穴であれば地鎮の可能性もある。



第34図 木製品 (1/8)

5. 木製品 (第33・34図、図版26・27)

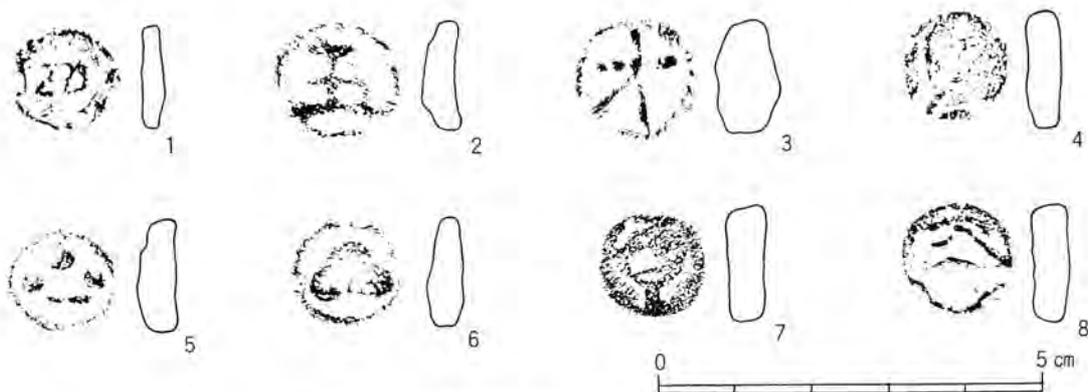
包含層からの出土はなく、すべて井戸出土のものである。内容は井側、水溜めといった井戸施設の一部であるが中には廃棄物と思われるものもある。遺存状況がよくなく破損してしまうものが多い。代表的なもの9点を図化した。1～5はSE 47、6～8はSE 227、9はSE 83からの出土である。1は曲物の底板か蓋、2～5は方形井戸枠の一部で横棧である。6～8はやはり井戸枠(17枚板組の桶)の一部で、加工痕の顕著なもの3枚を図化した。いずれも整形のための鉋痕がみられ、また3段のタガ(竹製)のあとも残っている。井戸枠として設置するためであろうか、下端になっているほうの断面は先細りになっている。9は方形井戸枠の隅柱だと思われるが他の部位が残っていないため構造がはっきりしない。1はSE 47から、6～8はSE 227から、9はSE 83からそれぞれ出土している。



第35図 木製品 (1/8)

6. 泥面子 (第36図、図版28)

径1.5cm前後、厚さ3～5mmの円盤状の土製品である。型抜きによる施文で裏面には指紋の残るものがある。文様は、はっきりしているものが少なく解読がむずかしい。1は「四」であろうか、2「五」、3「オ」、4 橘などの植物、5 梅花、6・7・8は不明。すべてI層または攪乱坑出土



第36図 遺物実測図 (1/1) 泥面子

第Ⅵ章 ま と め

低湿地が広がる新潟平野では、自然堤防や砂丘のような微高地に古くから集落が発達してきた。荒木前遺跡もまた亀田町にみる多くの遺跡がそうであるように砂丘上に立地している。

今回の調査地点は、地形や遺構のあり方から遺跡の南東部にあたると思われるが、ここが遺跡全体面積のどれくらいにあたるのか把握できていない。遺跡の中心は調査区域の西側（現在は梨畑）にあたると思われる。このあたりは字名や隣接する熊野神社の言い伝えにより、荒木五郎左衛門為久との関連性が期待されており、今回の調査ではその可能性を含めた古代・中世を中心とした集落跡であることが判明した。

出土遺物は平安時代・中世のものが圧倒的に多いが他の時代のものもみられ、特に縄文時代中・後期の資料は本遺跡が存在する砂丘の時期的な評価につながるものとして注目される。また、7世紀末～8世紀初頭といわれるかえりのある須恵器杯蓋は洪水堆積土と思われるⅣ層形成時期の目安となり得る。

平安時代の土器類をみると、土師器碗が若干あるものの食膳具と貯蔵具は須恵器が中心で、煮炊具は土師器（甕・鍋）である。須恵器の生産地をみても佐渡・小泊産のものが多く、このような様相は越後の特に蒲原を中心とした地域の時期的な特徴として捉えられよう。

中世の遺物は量的に少ないが、時期幅は13世紀～16世紀までと広い。生産地は播鉢・甕などの日常雑器が珠州や越前、奢侈品といわれる碗・皿類などが舶載（中国）や瀬戸・美濃である。これらの時期的なあり方をみると、珠州焼が13～15世紀、越前焼が16世紀に、また舶載製品が13～15世紀、瀬戸・美濃焼が15～16世紀に存在している。土器類は三足をもつと思われる小型の瓦質土器（香炉）が2点出土しているが、「かわらけ」と称される土師質土器は1点もみられない。近接する三王山・中の山両遺跡では量が少ないながらも出土している。¹⁾

今回の調査では多くの遺構が検出され好資料が得られた。主な遺構は平安時代－井戸14・土坑8・掘立柱建物1、中世－井戸10・掘立柱建物10・溝状遺構、中世末－畝状遺構などである。いずれも出土遺物が少なく、覆土のパターンにより時期決定したものもあるが、各説で述べたように特に井戸はそれによって形態・構造に各特徴が窺え、本遺跡における時期的様相と捉えられる。新潟における井戸の検出例をみるとやはり圧倒的に素掘りのものが多いが、底の施設である「水溜」に円形の曲物を利用する例は意外と少なく、新潟市小丸山遺跡、中之島町杉之森遺跡など数例しか知らない。有機質である曲物が検出されにくいことを考慮しても平安時代－4基、中世－3基²⁾は多いと言えよう。2基の井戸（中世）でみられた方形の木製井戸側³⁾は、県内では奈良・平安時代から存在しており、さらに縦板組と横板（井籠）組のものに分けられる。本遺跡の井戸はどちらも縦板組であるが、中世における横板（井籠）組例が報告されていないことより、新潟においては横板（井籠）組の盛行がやや古い時期であることも考えられる。

掘立柱建物については、調査区域外へ延びるものや削平されて柱穴不明なものがあるため正確にはつかめないところがあるが、地点によって規模に差がみられる。調査区中央から東へかけての地点と2区の北寄りの地点においてであり、前者のほうが後者に比べて規模が大きい。両者の間では「主屋」と「副屋」の関係が存在するのかもしれない。

今回の調査では多くの資料を得たものの、遺跡の全体像というものを把握するに至らなかった。現在のところ遺跡の性格としては、平安時代が一般集落、中世が在地領主層の居住地と考えているが、未調査区を含めた周辺地域の調査成果を待つことにしたい。

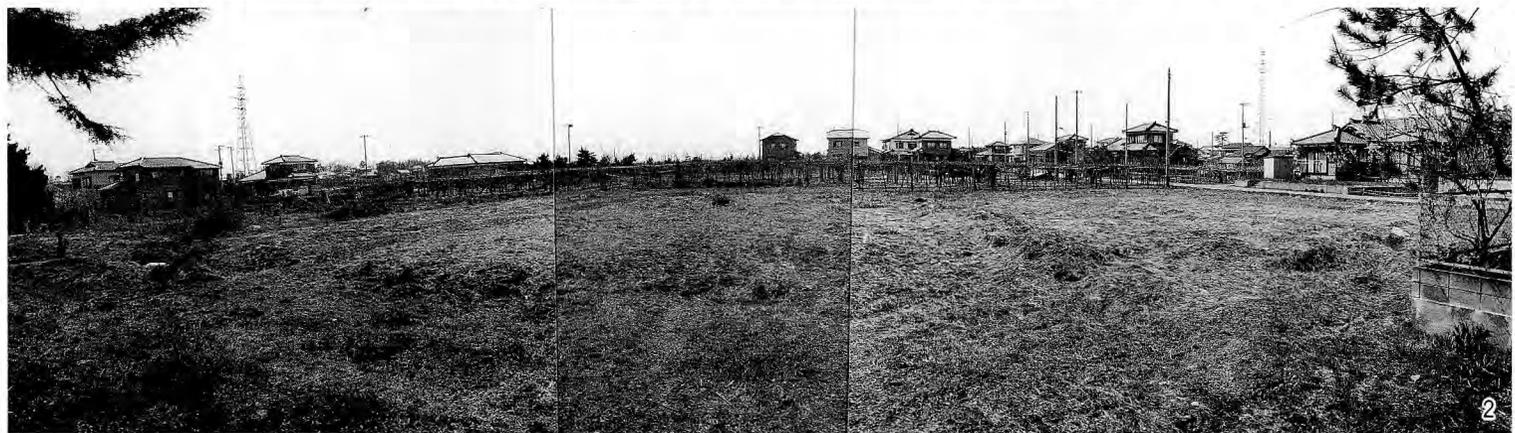
- 1) 三王山遺跡では糸切り底の、中の山遺跡ではヘラ切り底の「かわらけ」が出土している。
- 2) 素掘り部の平面形が方形の場合は方形の井戸側をもつ可能性があるため対象外とした。
- 3) 井戸の部位名称は宇野氏によるもの(宇野1982)を使用しており「井戸側」は地下壁面の施設のことである。

引用・参考文献

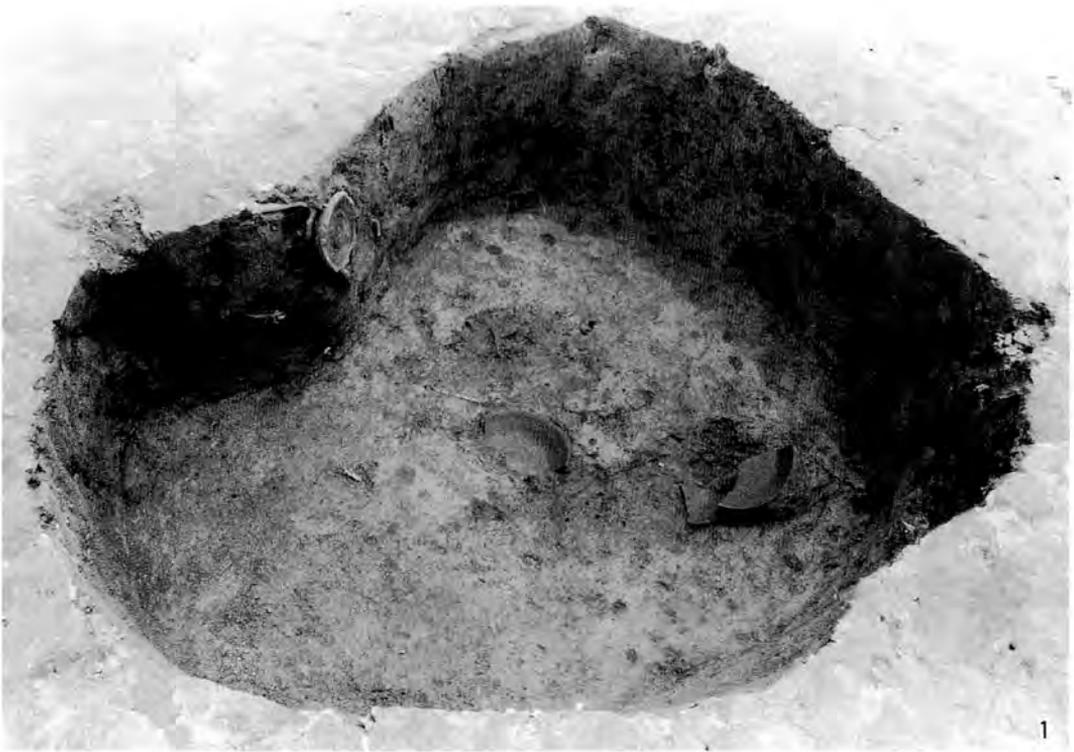
- 井上喜久男 1985 「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 2 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』 65—5
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』 No.4 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『ミュージアム』 第416号 東京国立博物館
- 小島幸雄・中村美恵子 1983 「伝至徳寺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 坂井秀弥 他 1984 「今池遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 新井市坪ノ内館跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡」
新潟教育委員会
- 坂井秀弥 1988 a 「律領期の須恵器系譜—越後西南部における二つの系譜をめぐって—」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史と考古学』 真陽社
- 坂井秀弥 1988 b 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『シンポジウム北陸器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥ほか 1989 「山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会
- 関雅之・中島栄一・戸根与八郎 1986 「第5章第4節4 集落と生産遺跡」『付編』『新潟県史 通史編1 原始・古代』
- 中川成夫・土井義雄・川上貞雄 1973 「狼沢窯址群の調査」笹神村教育委員会
- 新潟第四紀研究グループ 1971 「地形分類図よりみた新潟県の地形区」
- 福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏発掘調査報告Ⅰ』朝倉館跡の調査
- 藤澤良祐 1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』土岐市
- 北陸中世土器研究会 1988 『北陸の中世土器・陶磁器・漆器』第1回北陸中世土器研究会資料
- 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』 第27巻第4号 考古学研究会
- 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐらる問題」『庄内考古学』 18 庄内考古学会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 渡辺ますみ 1990 「新潟県における古代・中世の井戸」『新潟県考古学談話会会報』 No.6 新潟県考古学談話会



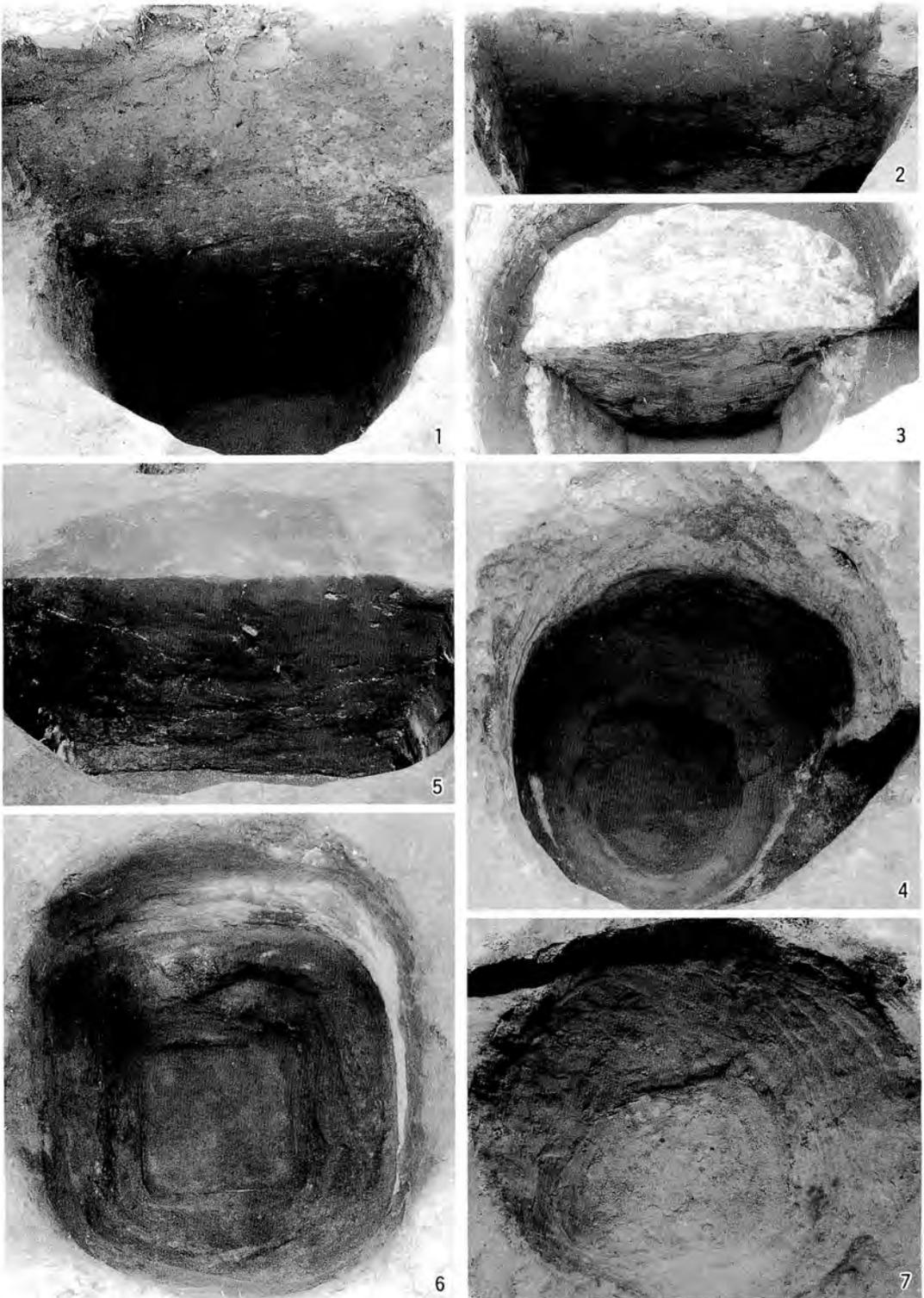
亀田町周辺空中写真（下が南）



調査前の状況 1 北西より 2 東より



1 . SK28 遺物出土状況 2 . SE226



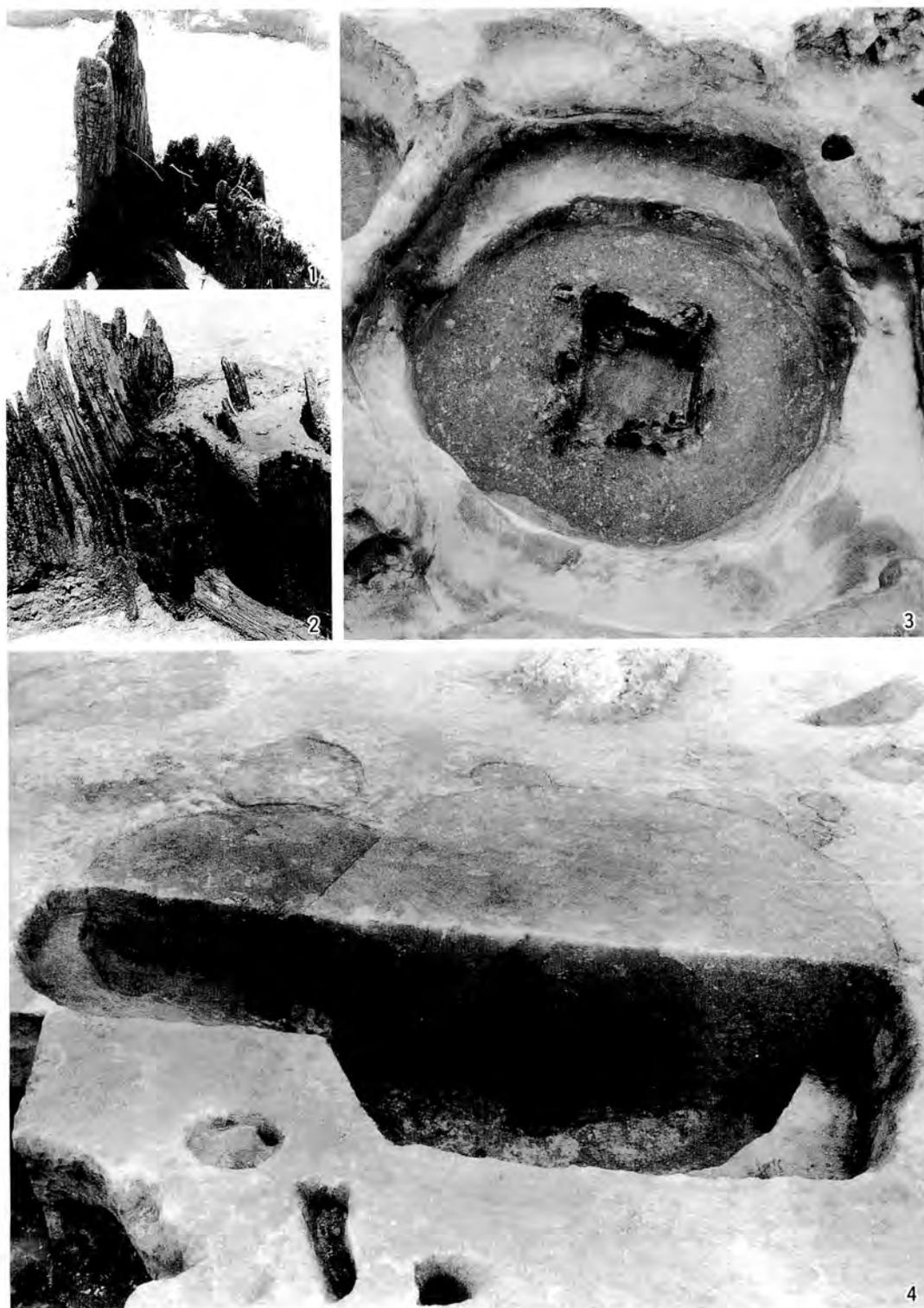
1. SE43断面 2. SE44断面(上部) 3. 同断面(下部) 4. 同完掘状况 5. SE55断面
6. SE55完掘状况 7. SE44完掘状况



SE45 1.断面 2.水溜(楕円形曲物) 3.同部分拡大 4.完掘



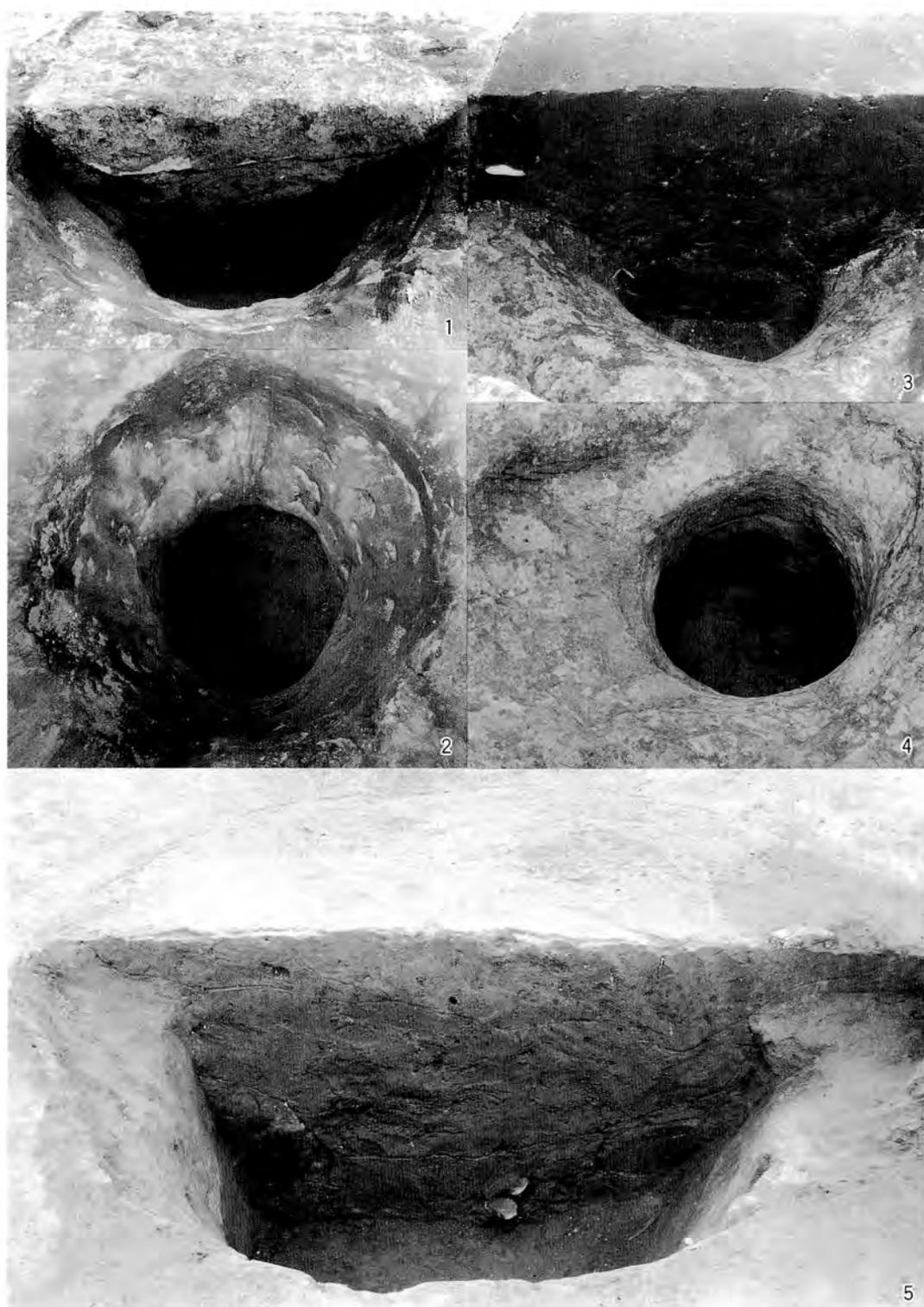
1 .SE50断面 2 .SE49断面 3 .同水溜(曲物)



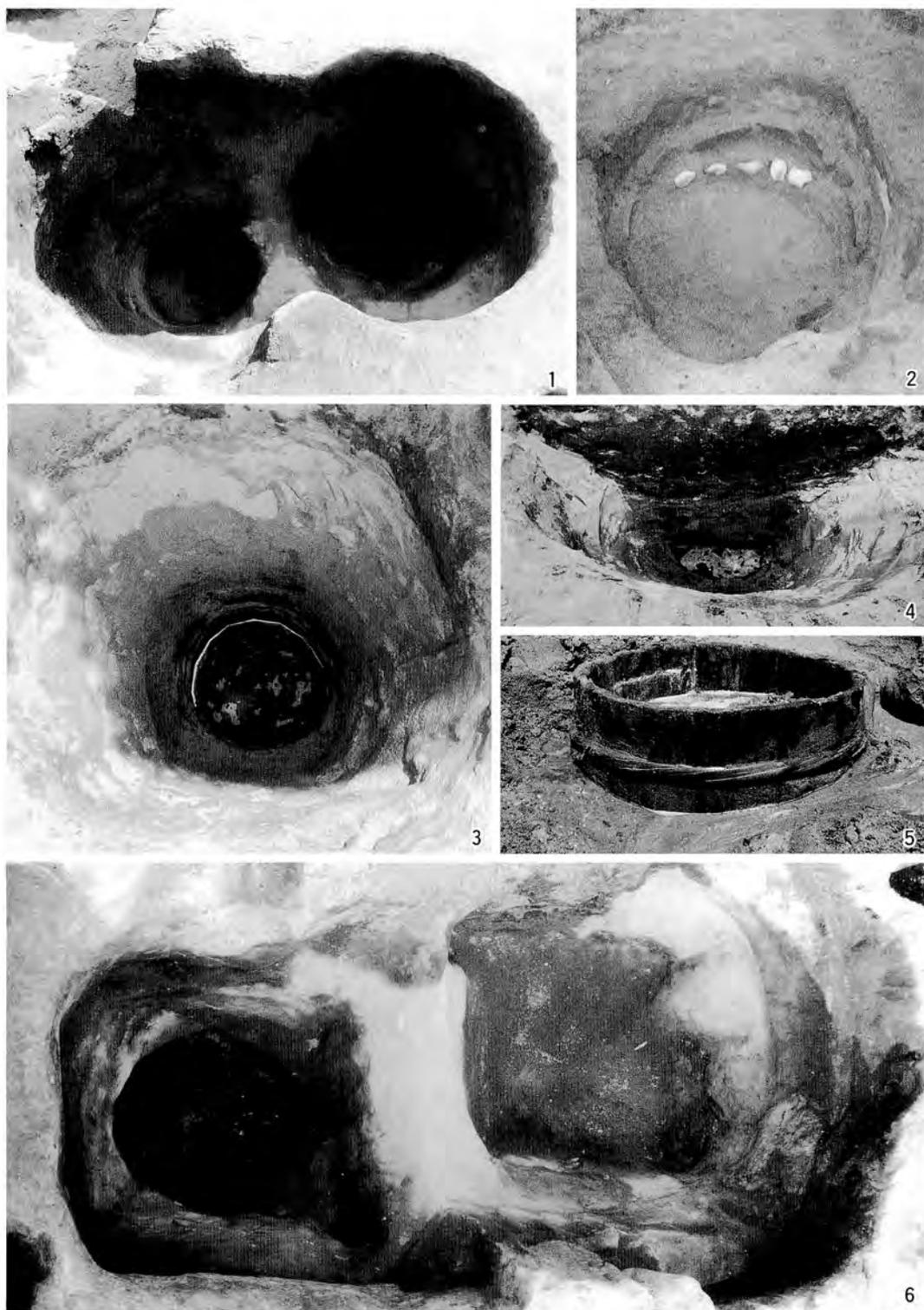
1・2 .SE83井戸側コーナ 3 .同全体 4 .SK48(左) SE47(右)断面



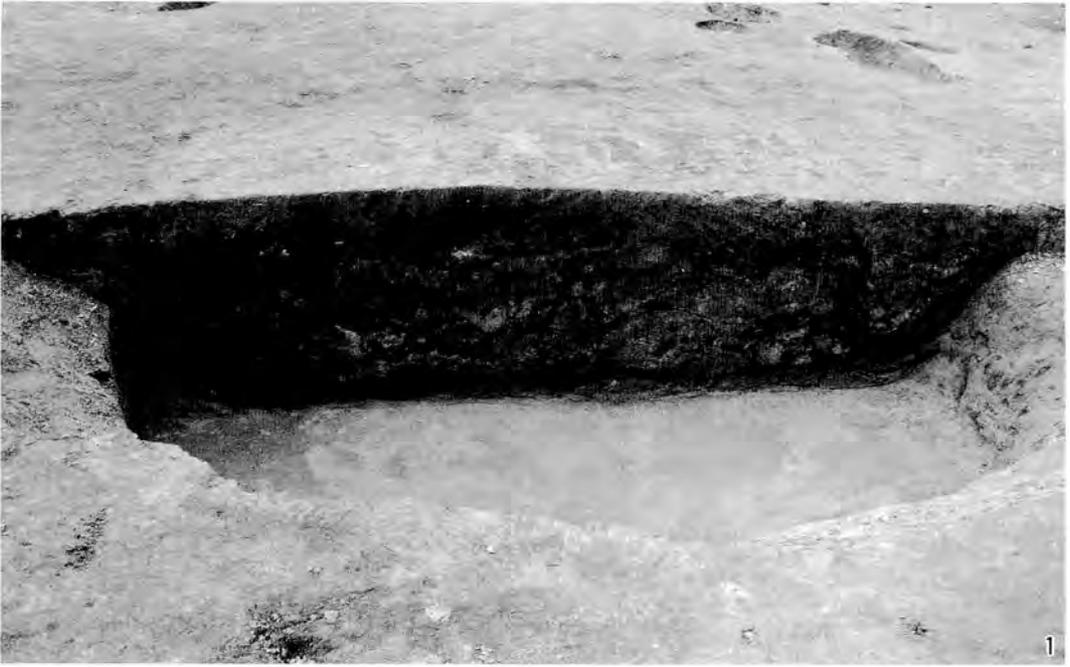
1. SE47 2. 同井戸側、水溜 3. 同井戸側 4. SE52断面



1. SE86断面 2. 同完掘状況 3. SE63断面 4. 同完掘状況 5. SE91断面



1 .SK84(左),SE85(右)完掘状況 2 .SE85井戸側(?)部 3 .SE227 4 .同断面 5 .同井戸側(桶)
6 .SE93(左),SE102(右)完掘状況



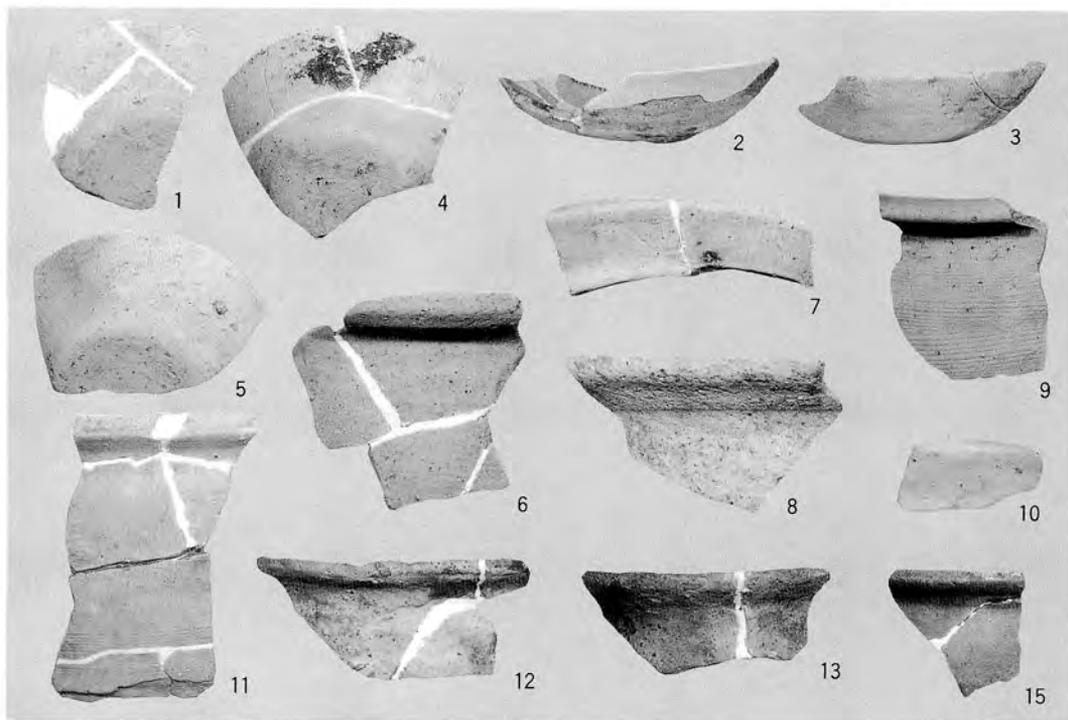
1. SK103断面 2. 同完掘状况



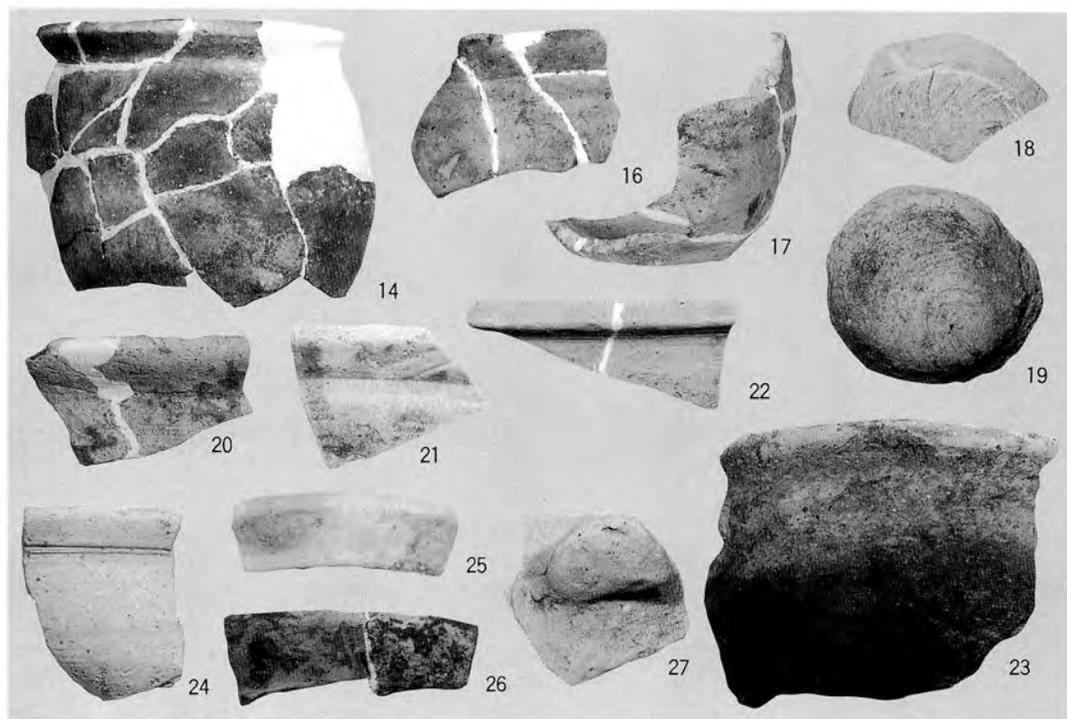
1 .SD9周辺(南より) 2 .SD9とSB301周辺



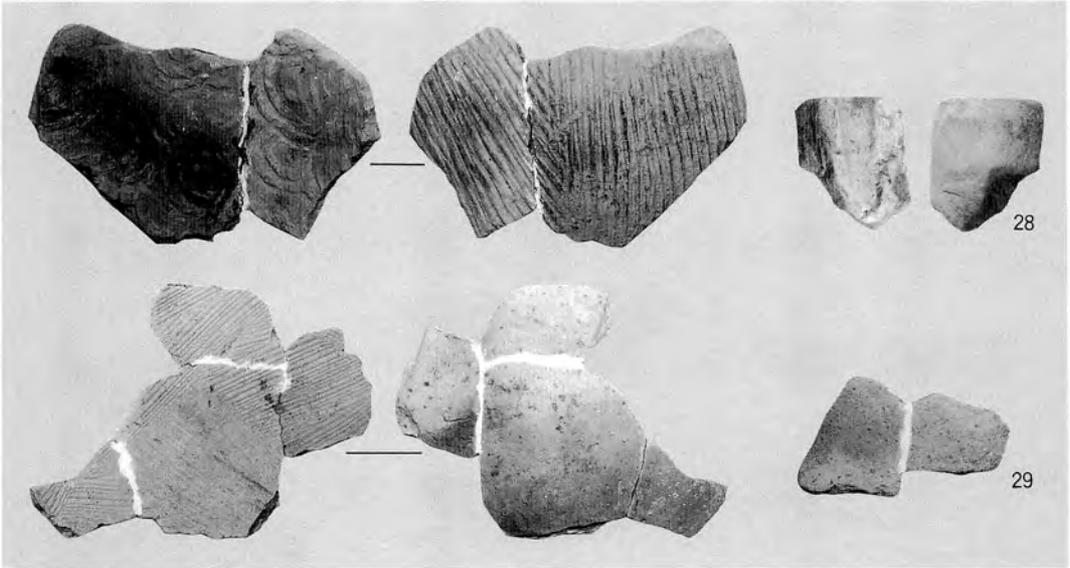
1 .I~L-5~8附近遺構検出状況 2 .J~L-9~15附近遺構検出状況



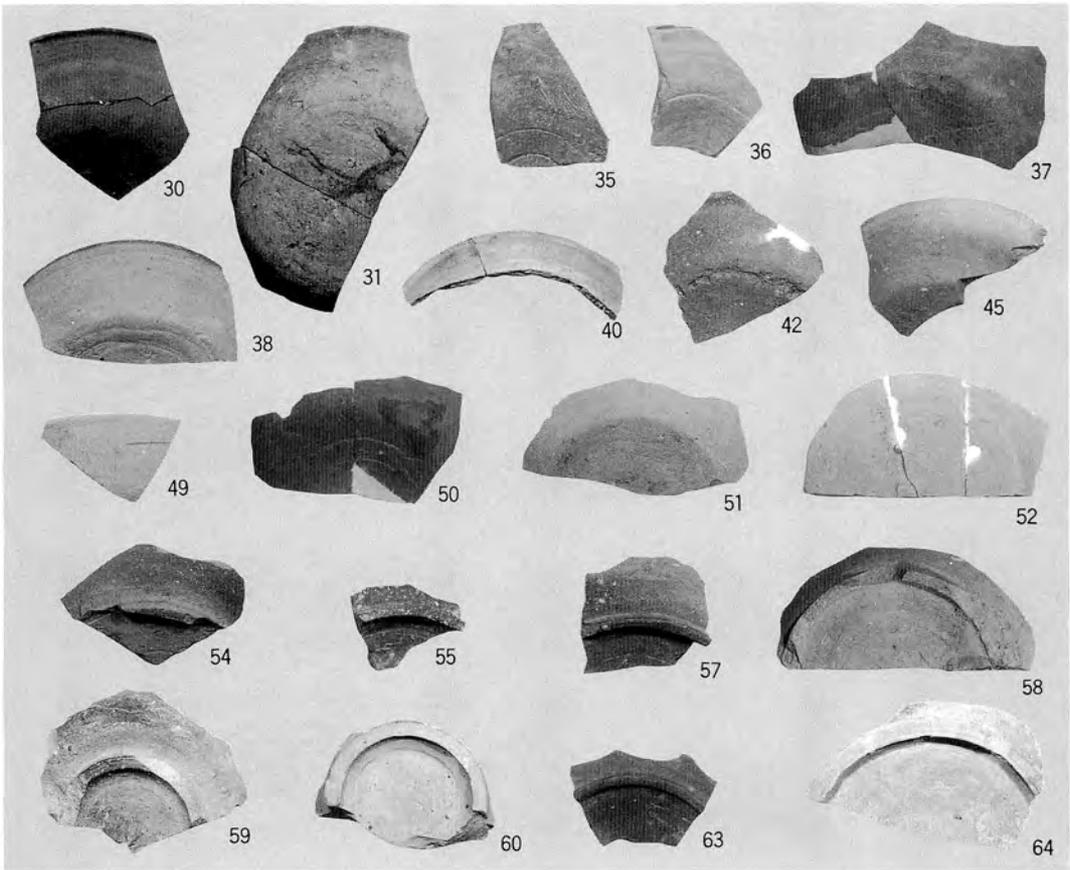
土師器 (1/3)



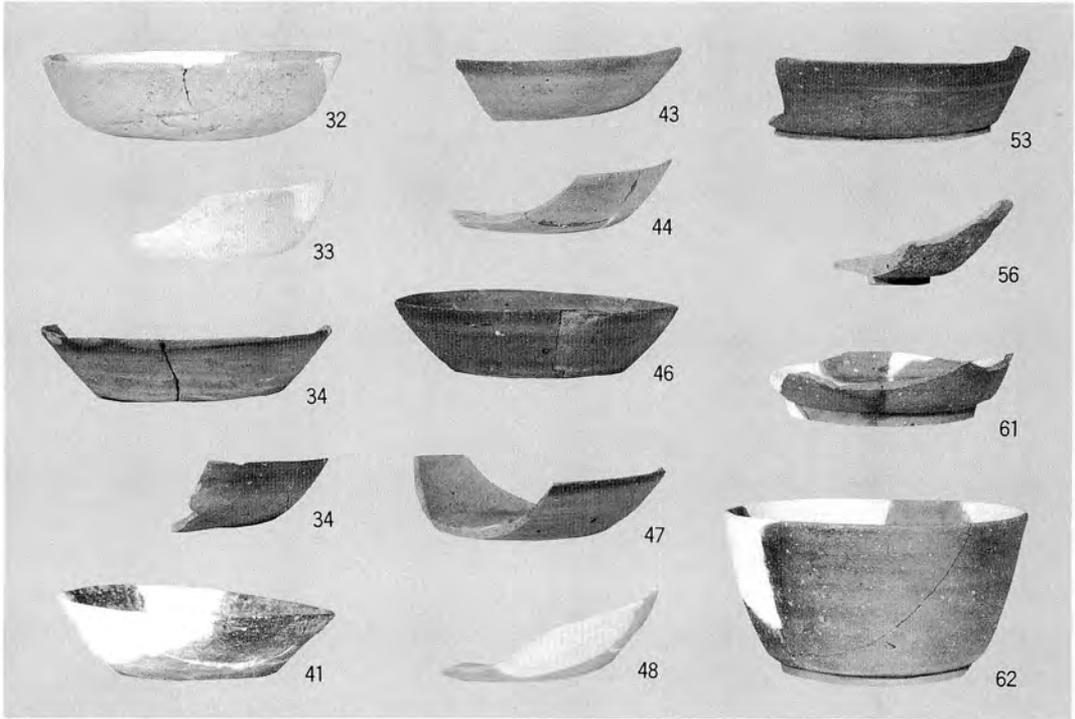
土師器 (1/3)



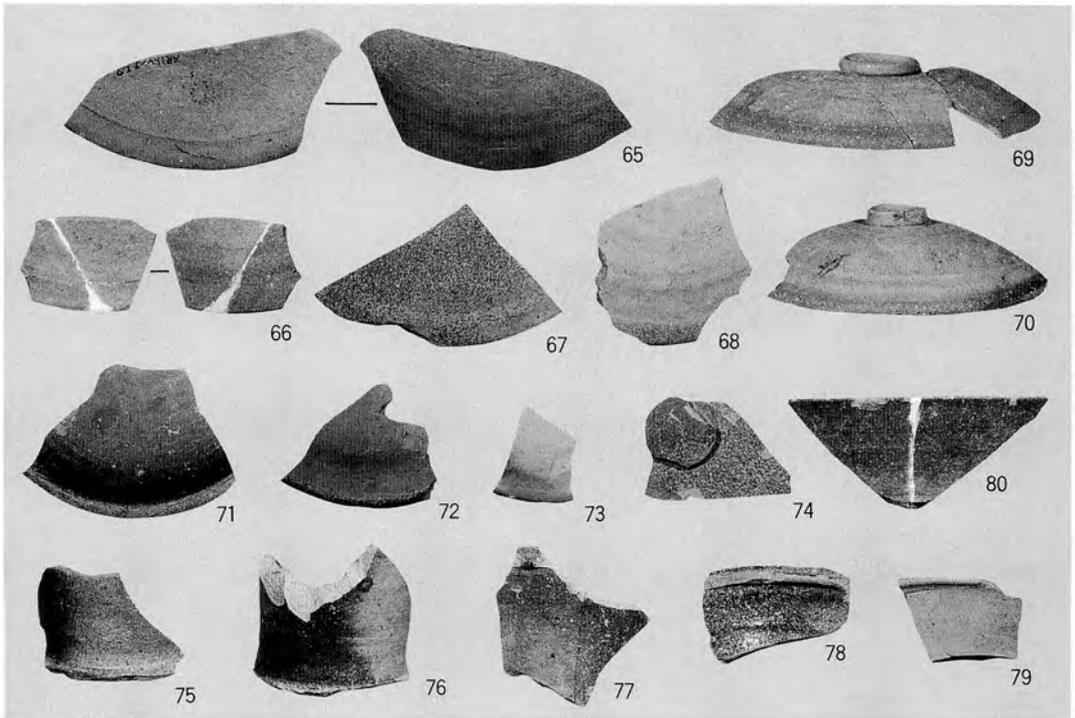
土師器・土製品 (1/3)



須恵器 (1/3)



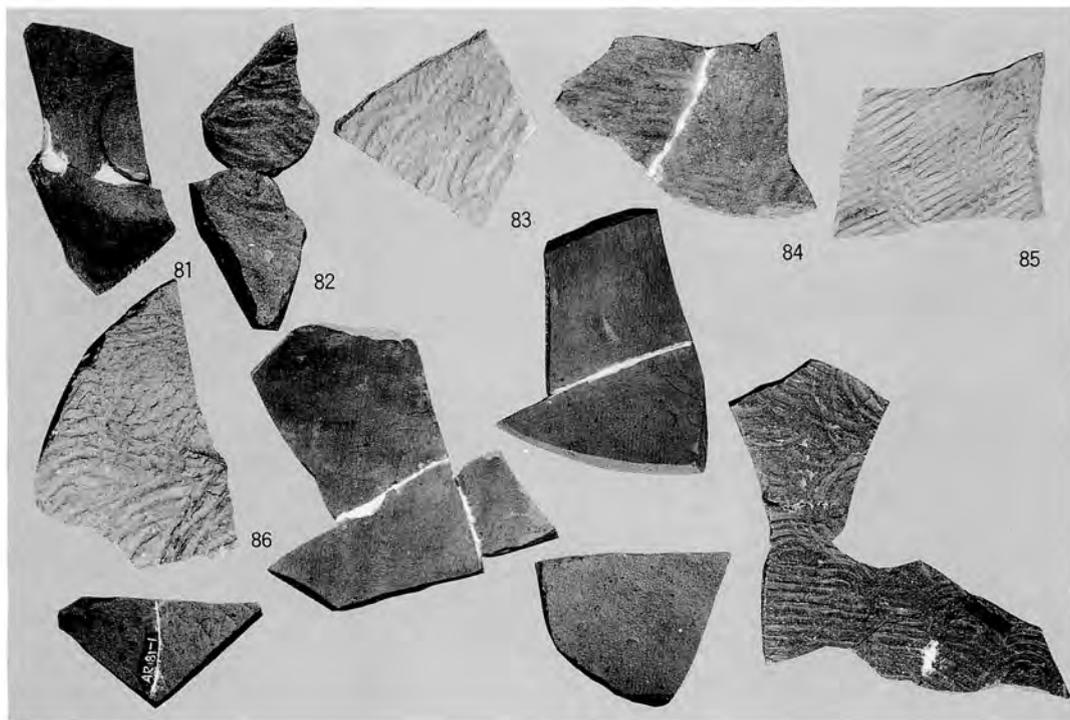
須恵器 (1/3)



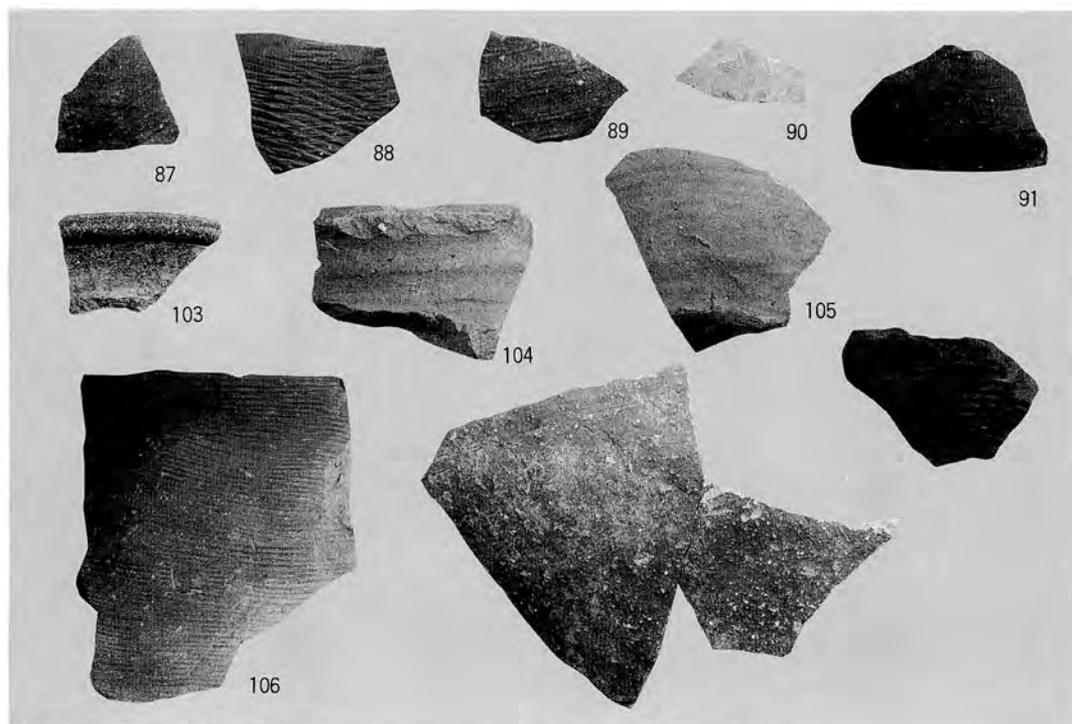
須恵器 (1/3)



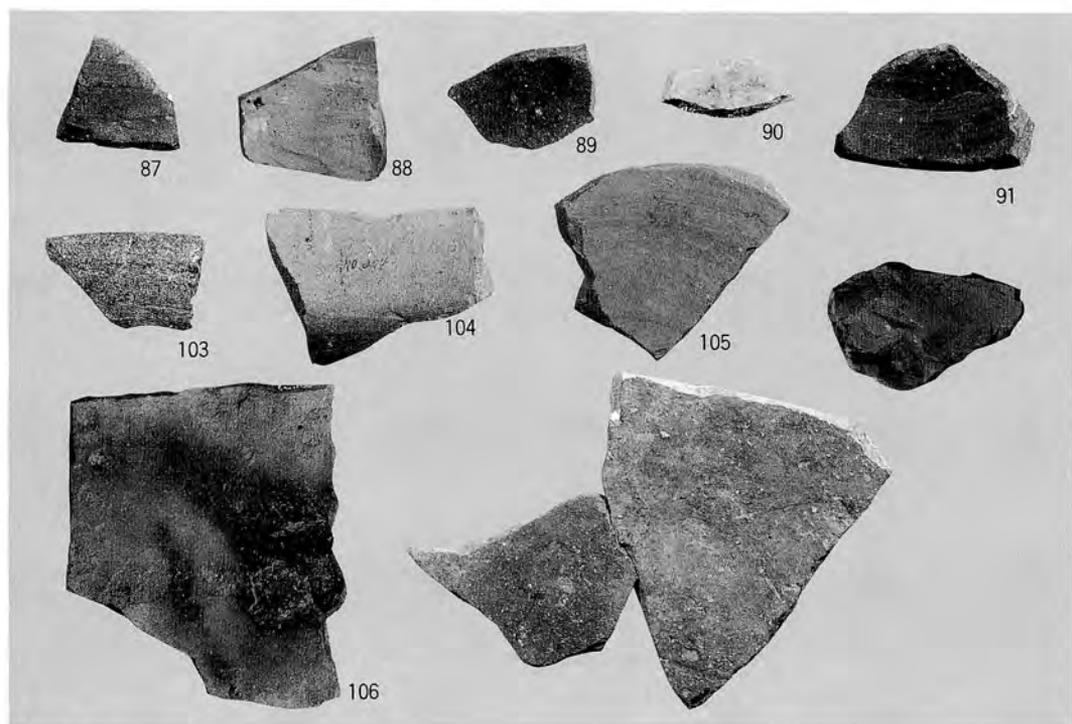
須恵器外面 (1/3)



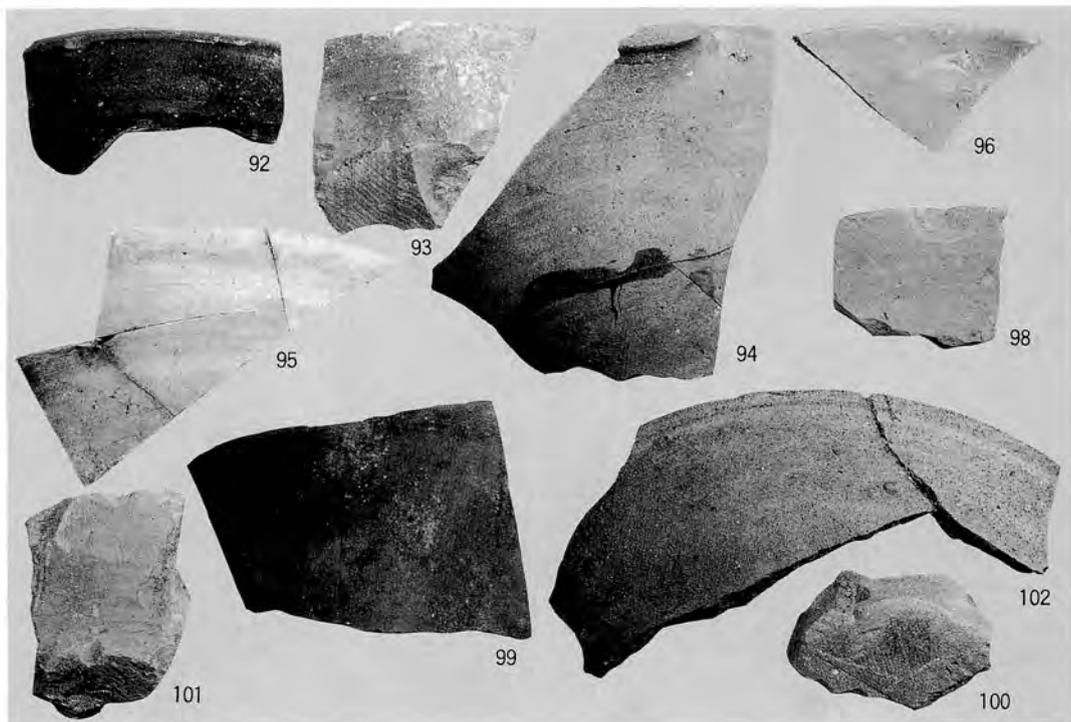
同内面 (1/3)



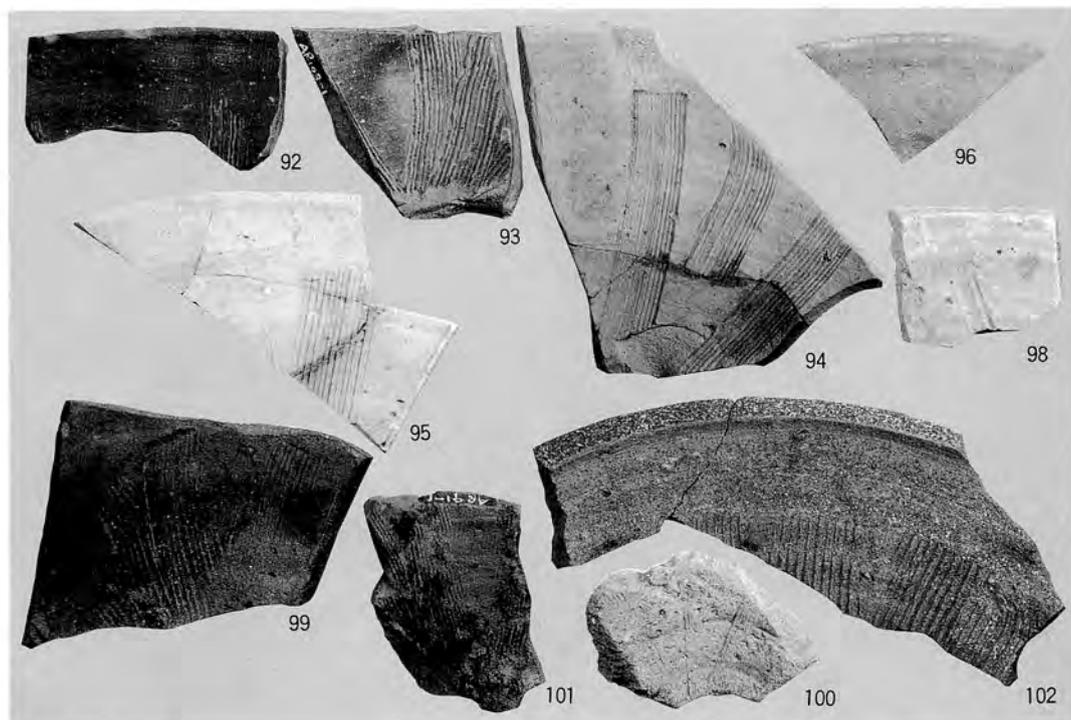
珠洲烧、珠洲系陶器外面（1/3）



同内面（1/3）



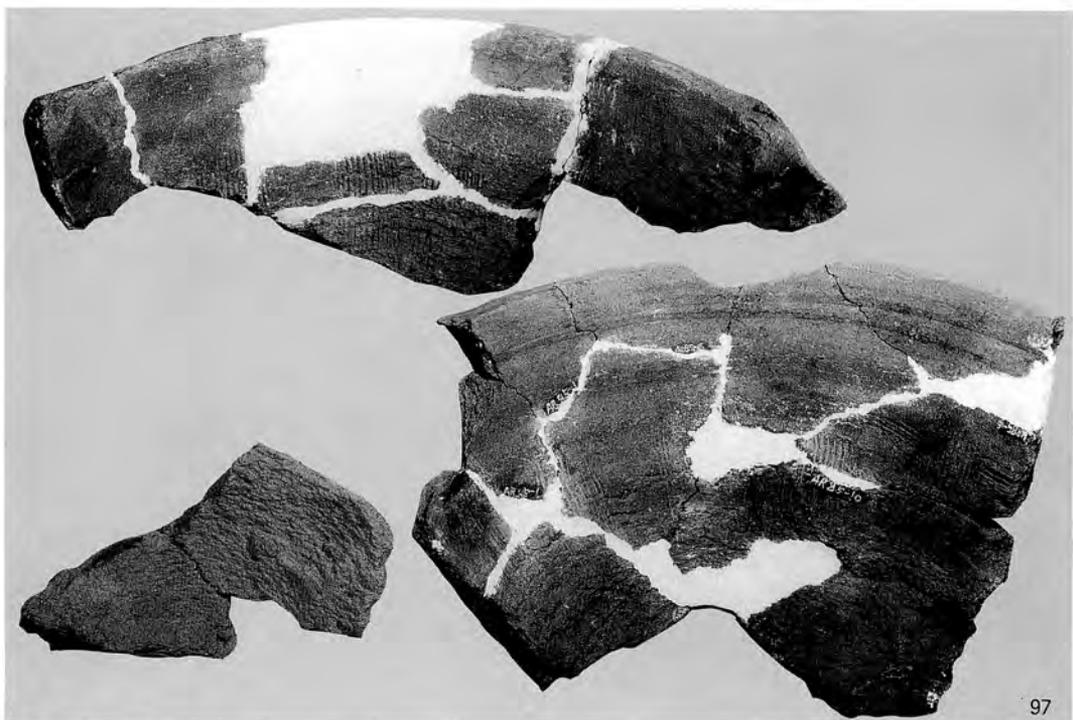
珠洲烧外面 (1/3)



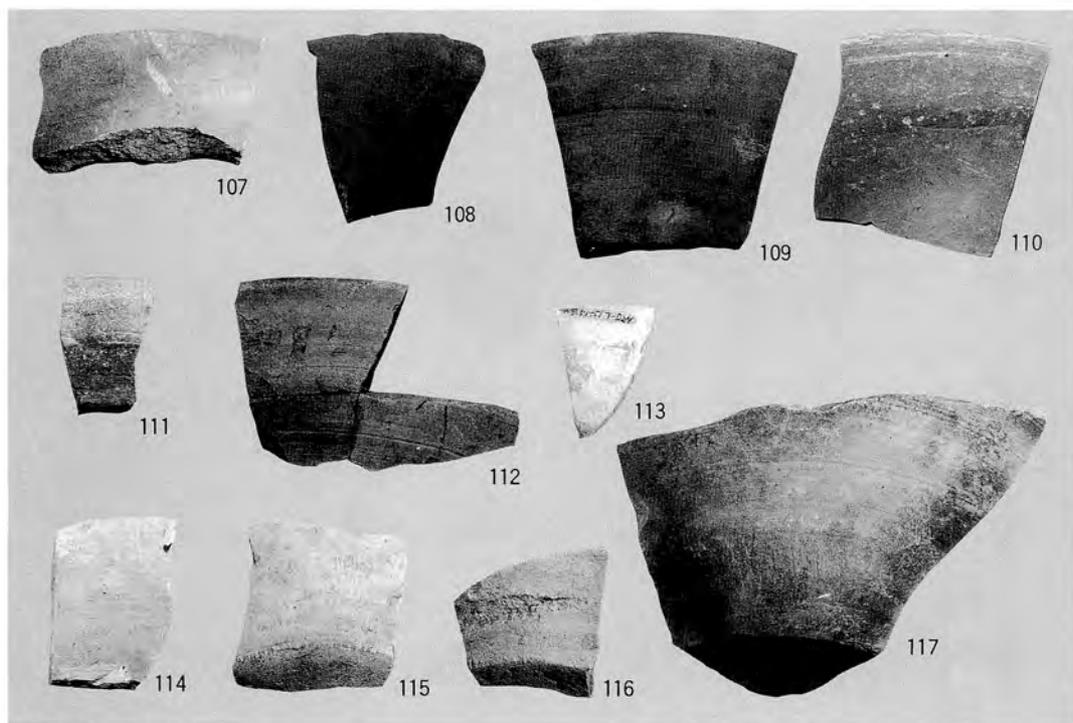
同内面 (1/3)



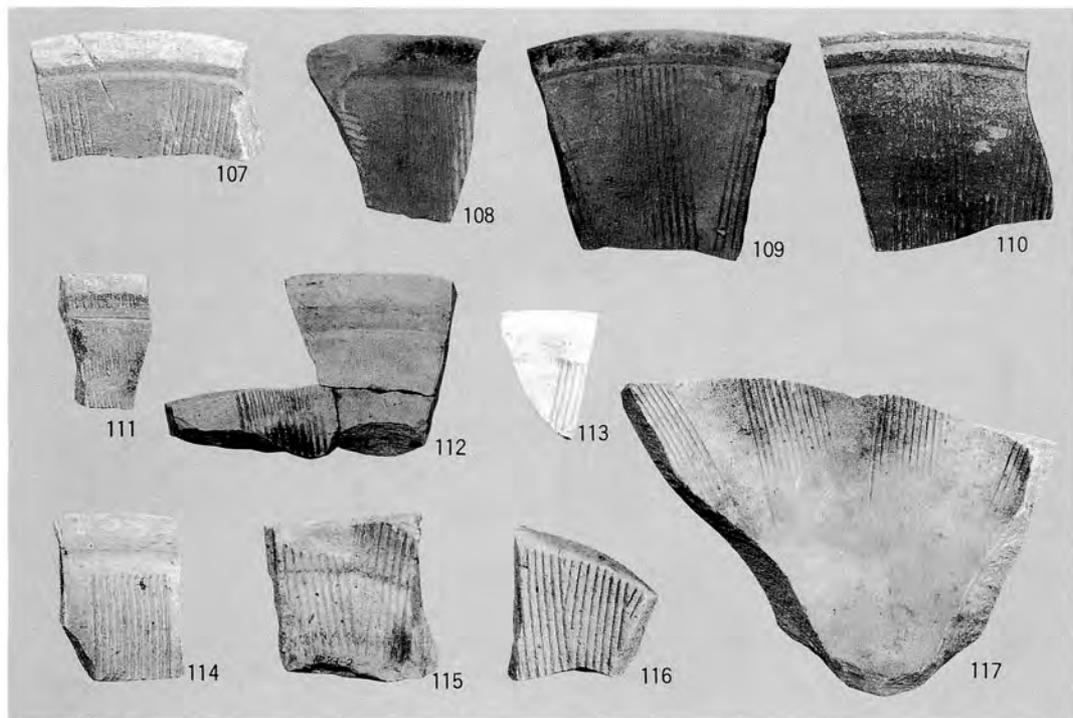
珠洲烧外面 (1/3)



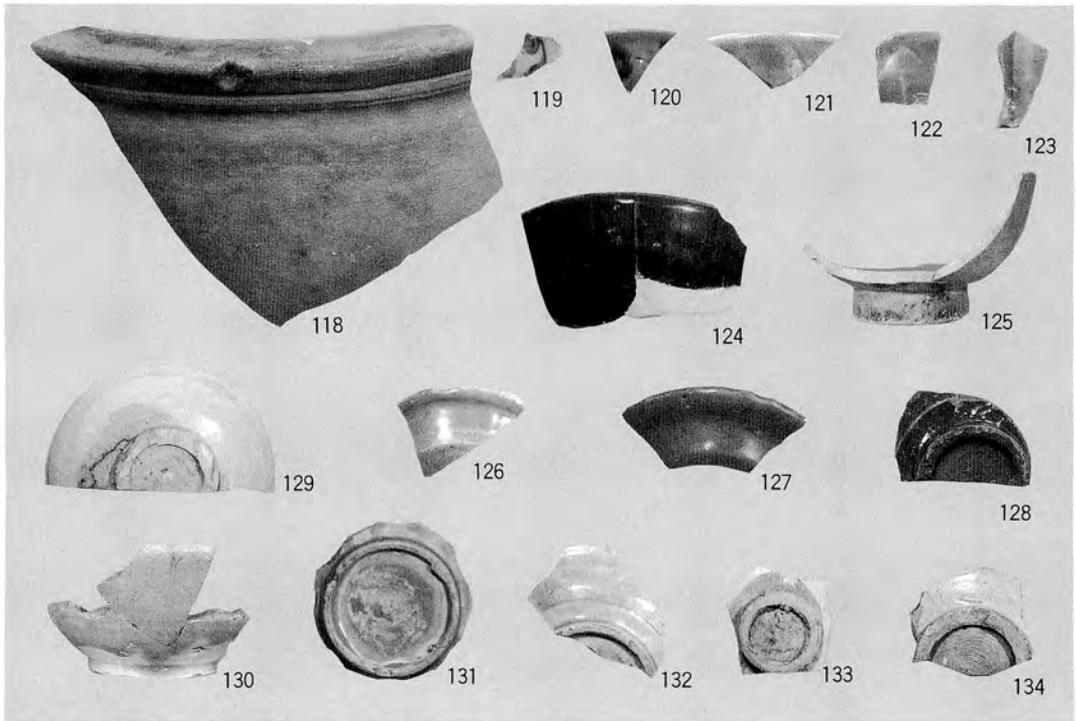
同内面 (1/3)



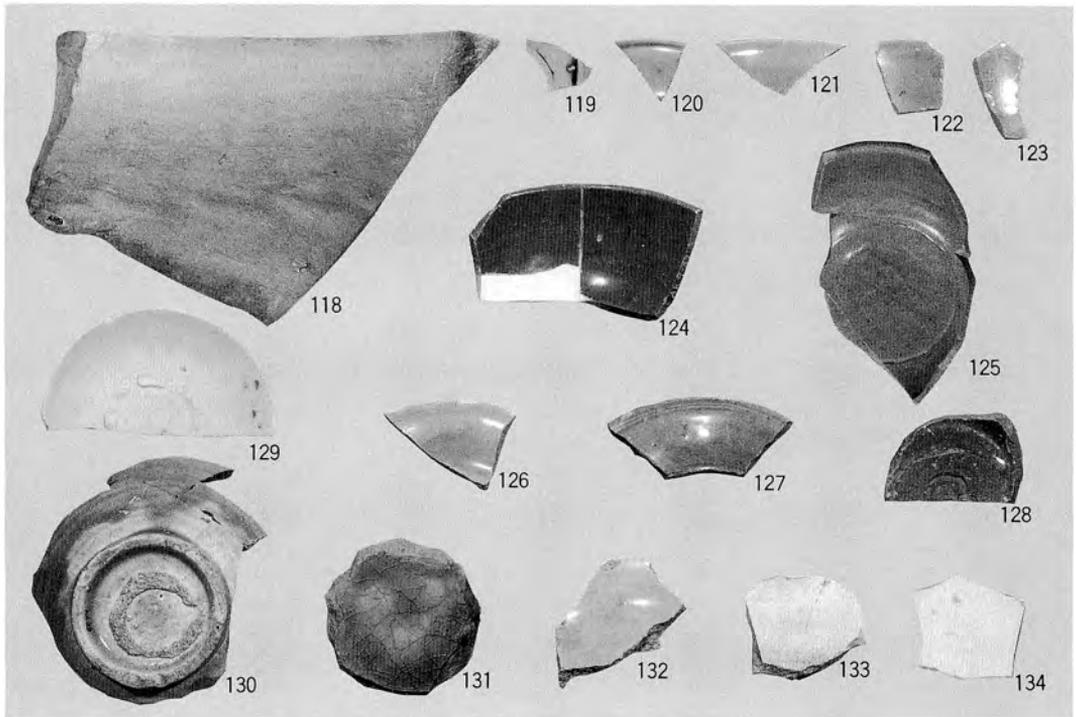
越前烧外面 (1/3)



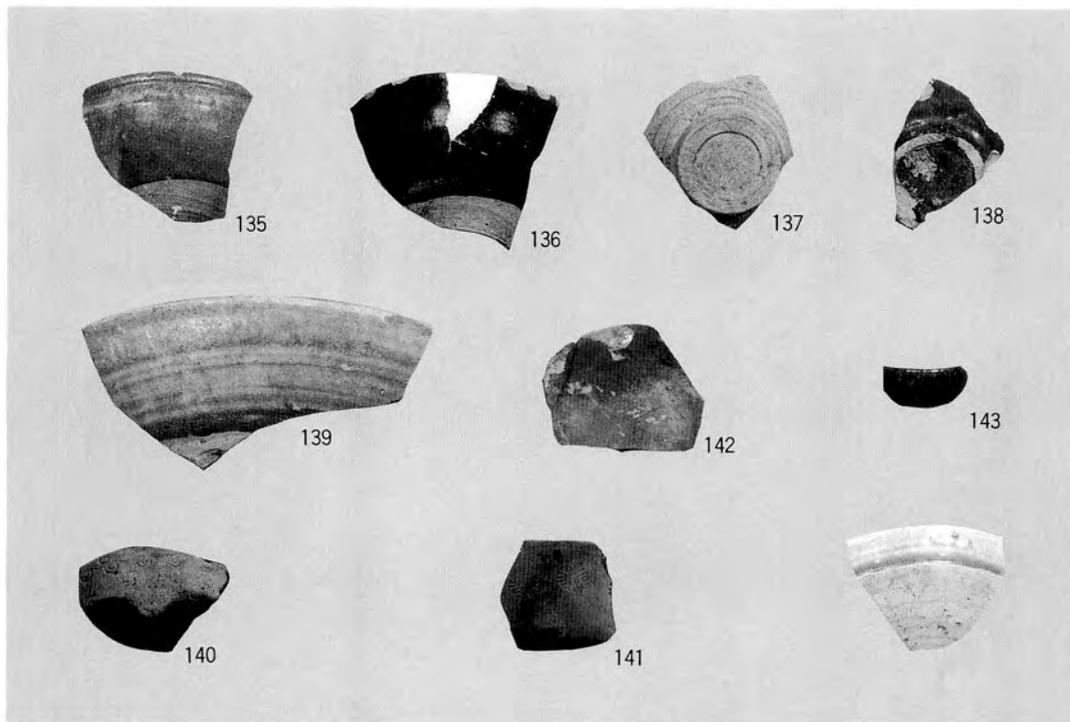
同内面 (1/3)



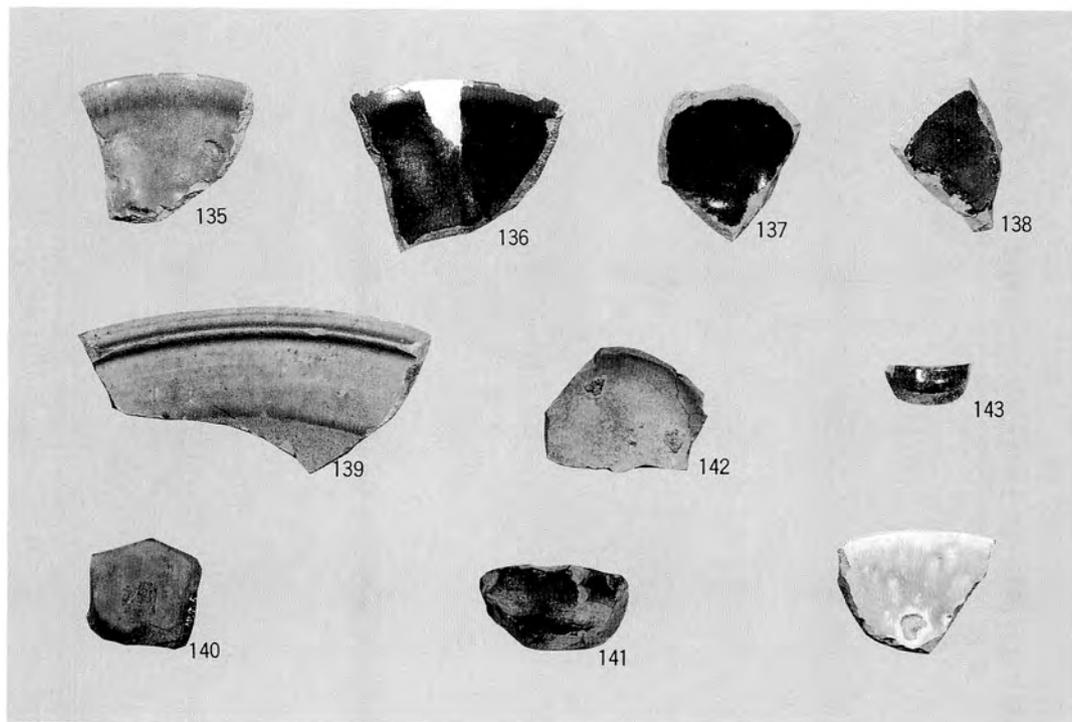
越前焼、舶載磁器、瀬戸美濃焼外面 (1/3)



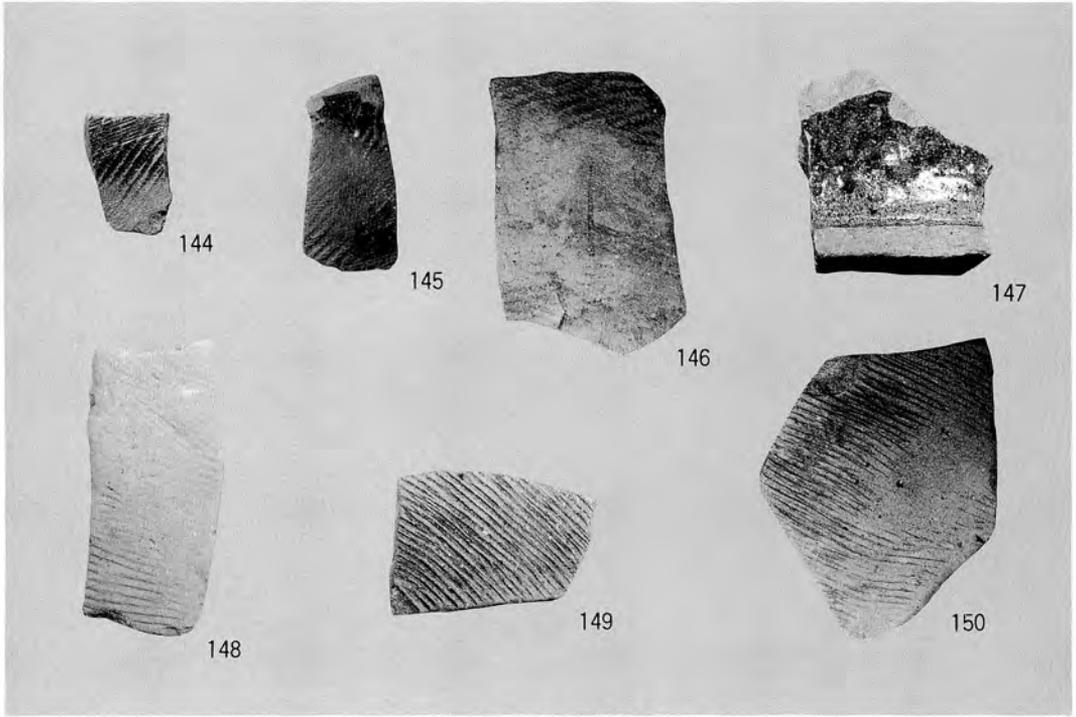
同内面 (1/3)



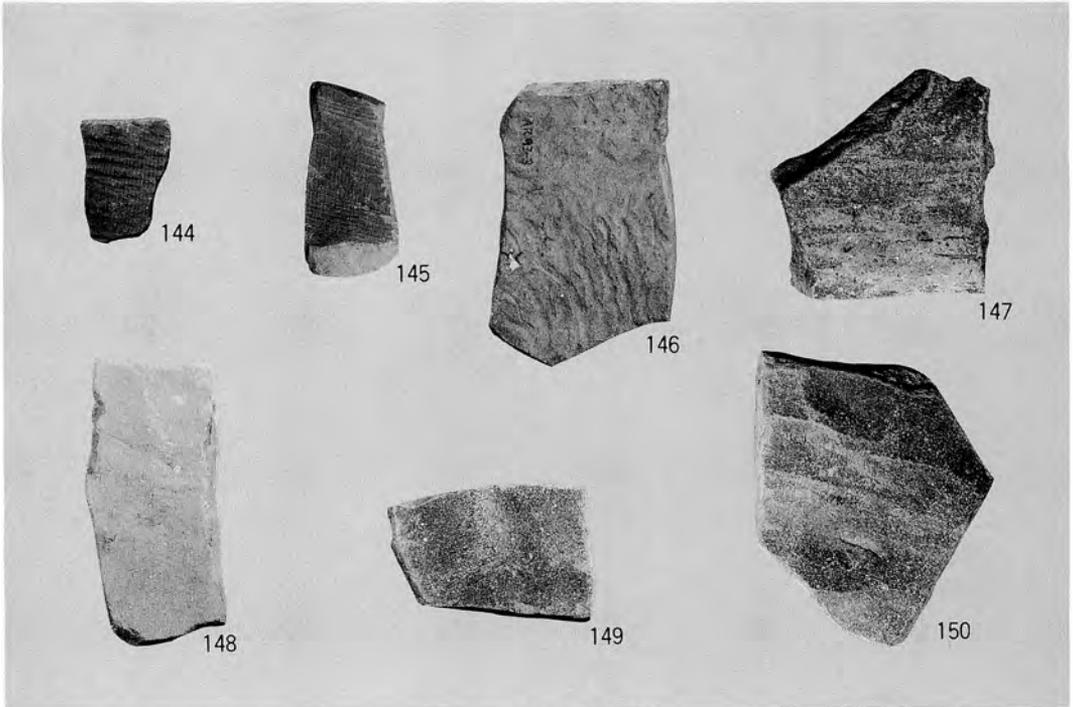
瀬戸美濃焼、瓦質土器他外面 (1/3)



同内面 (1/3)



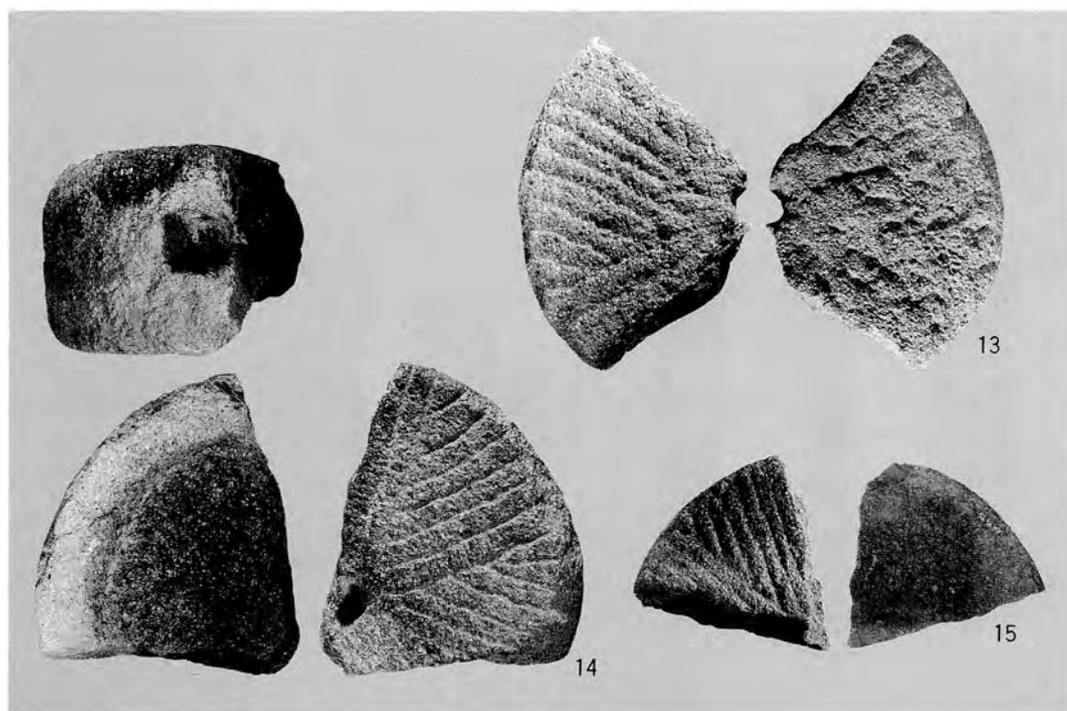
転用砥石 外面 (1/3)



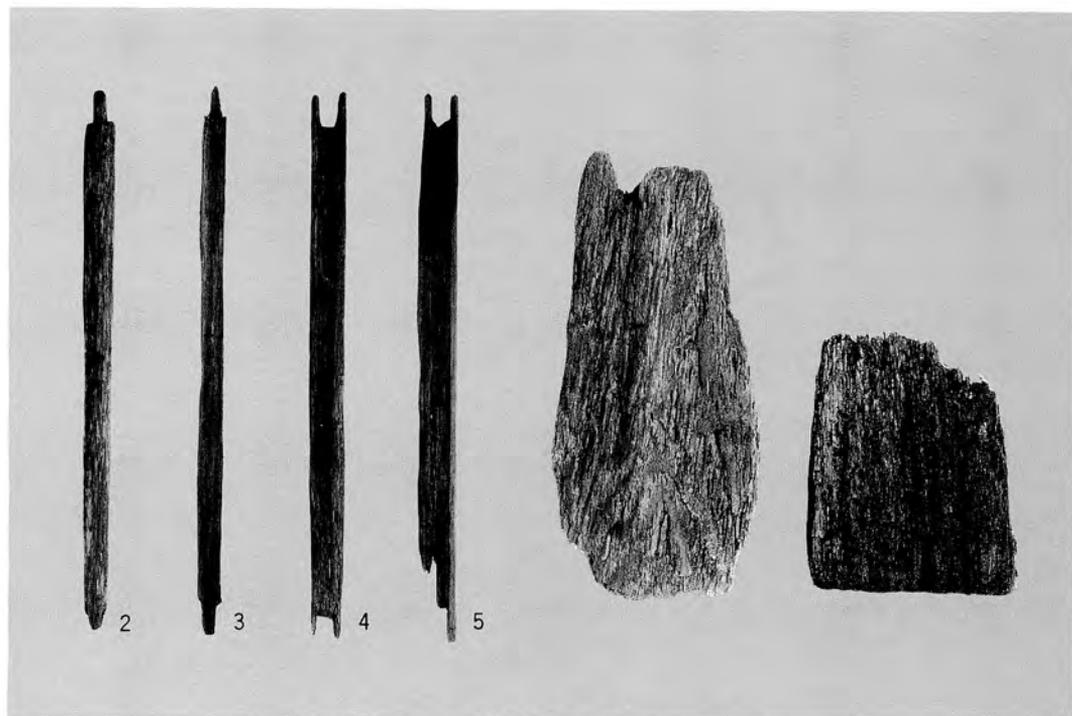
転用砥石 内面 (1/3)



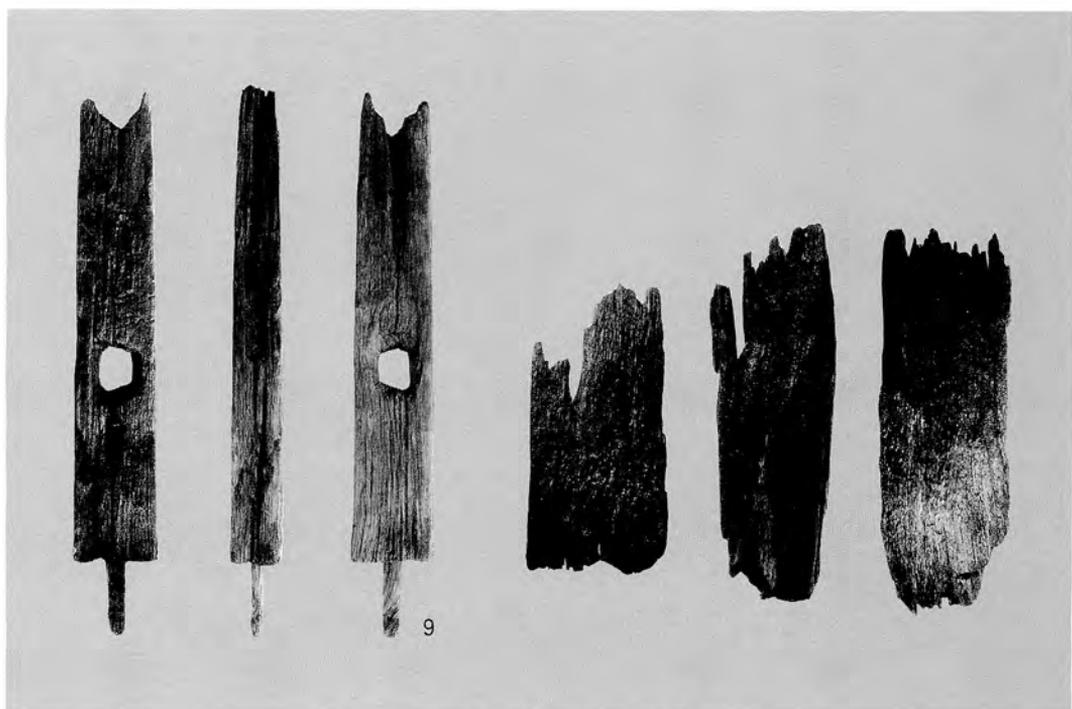
砥石 (1/3)



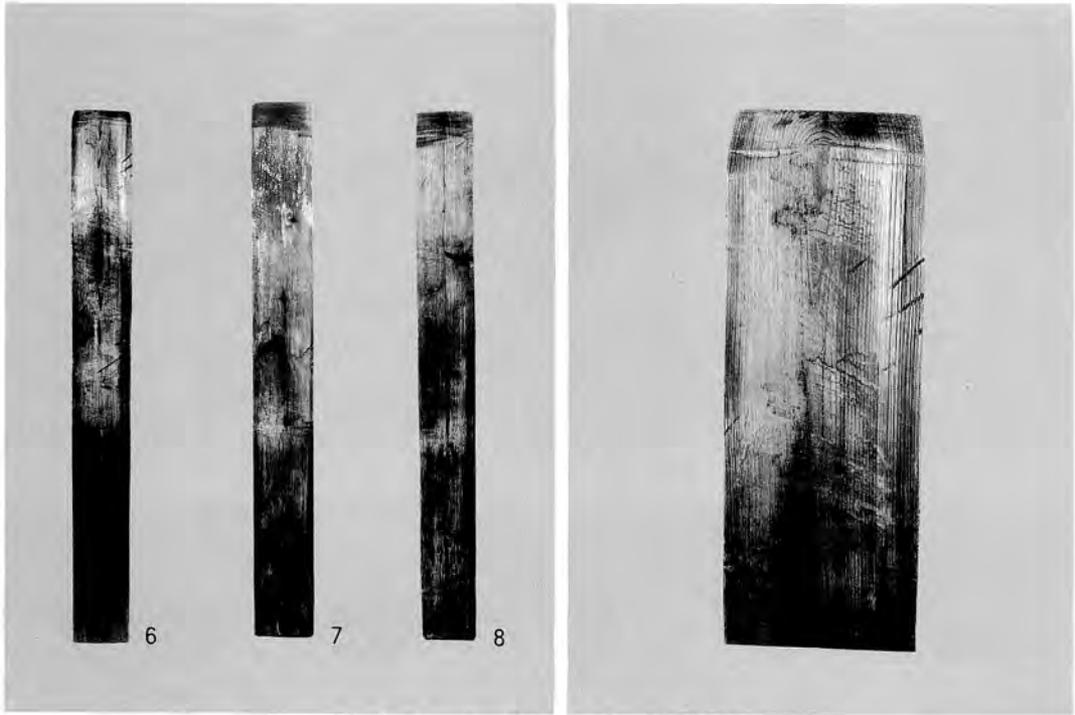
石臼



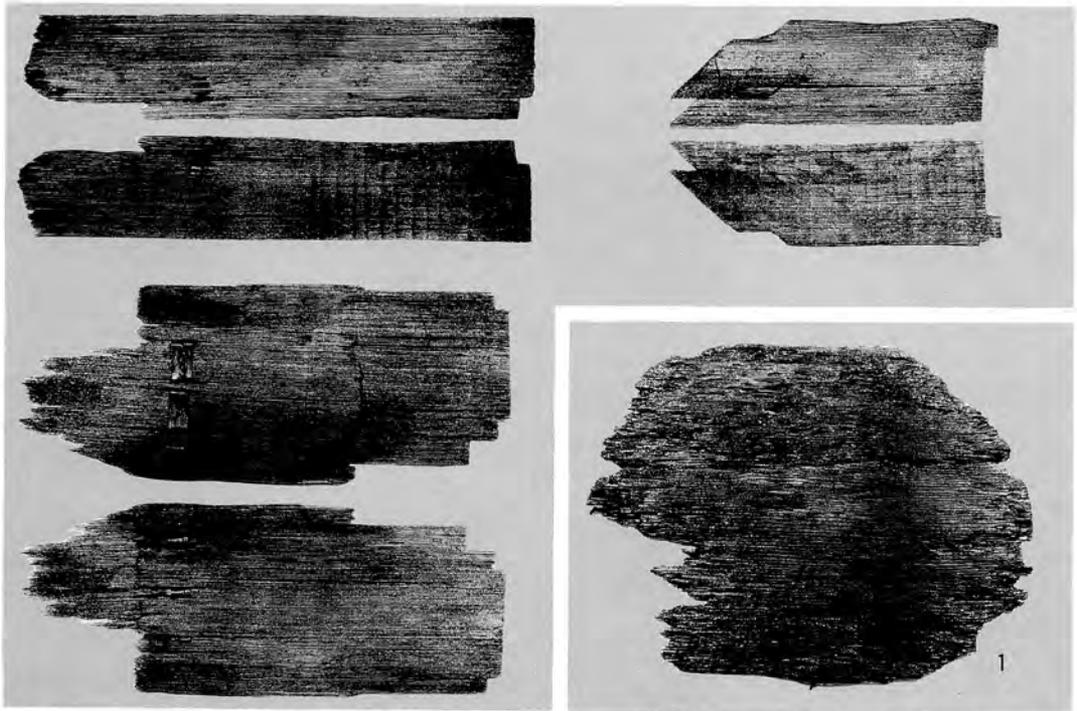
木製品 (2~5 SE47横棧、右. SE47縦板)



木製品 (9 SE83隅柱、右. SE83縦板)

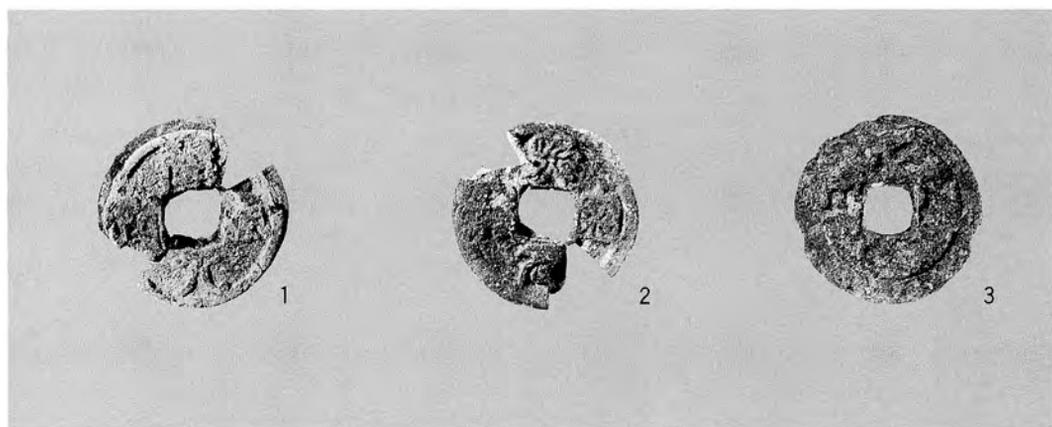


木製品（6～8、SE227、右. 部分拡大）

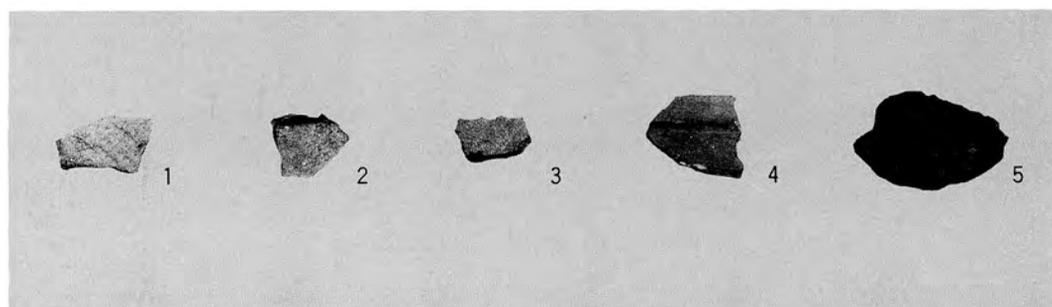


木製品（井戸水溜の曲物）

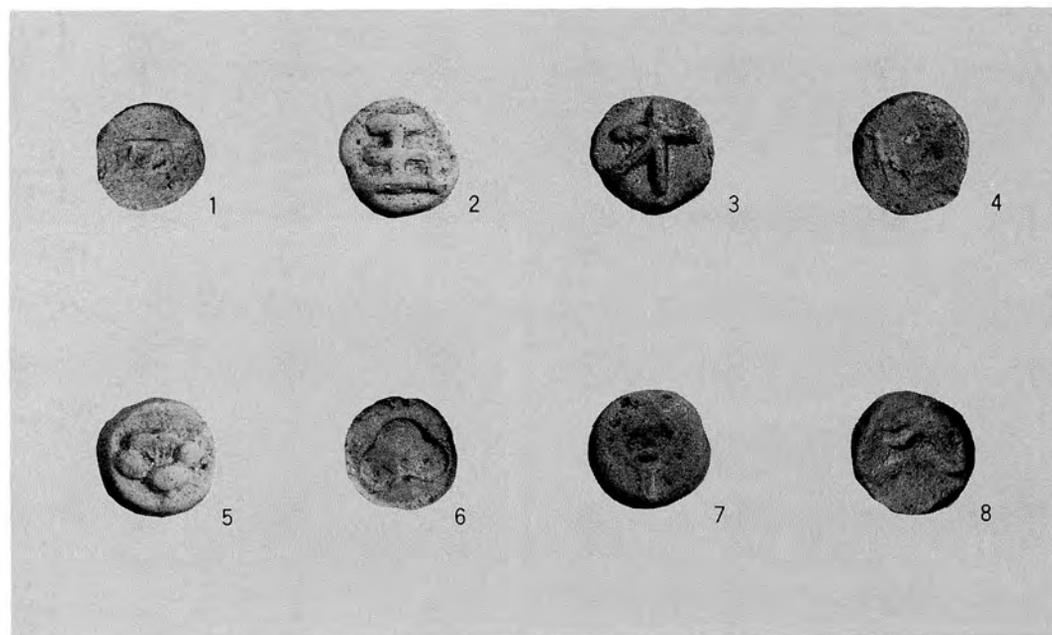
木製品（1 SE47出土曲物の底板）



錢貨 (1/1)



繩文土器 (1/3)



泥面子



亀田町文化財調査報告書 第3集

荒木前遺跡

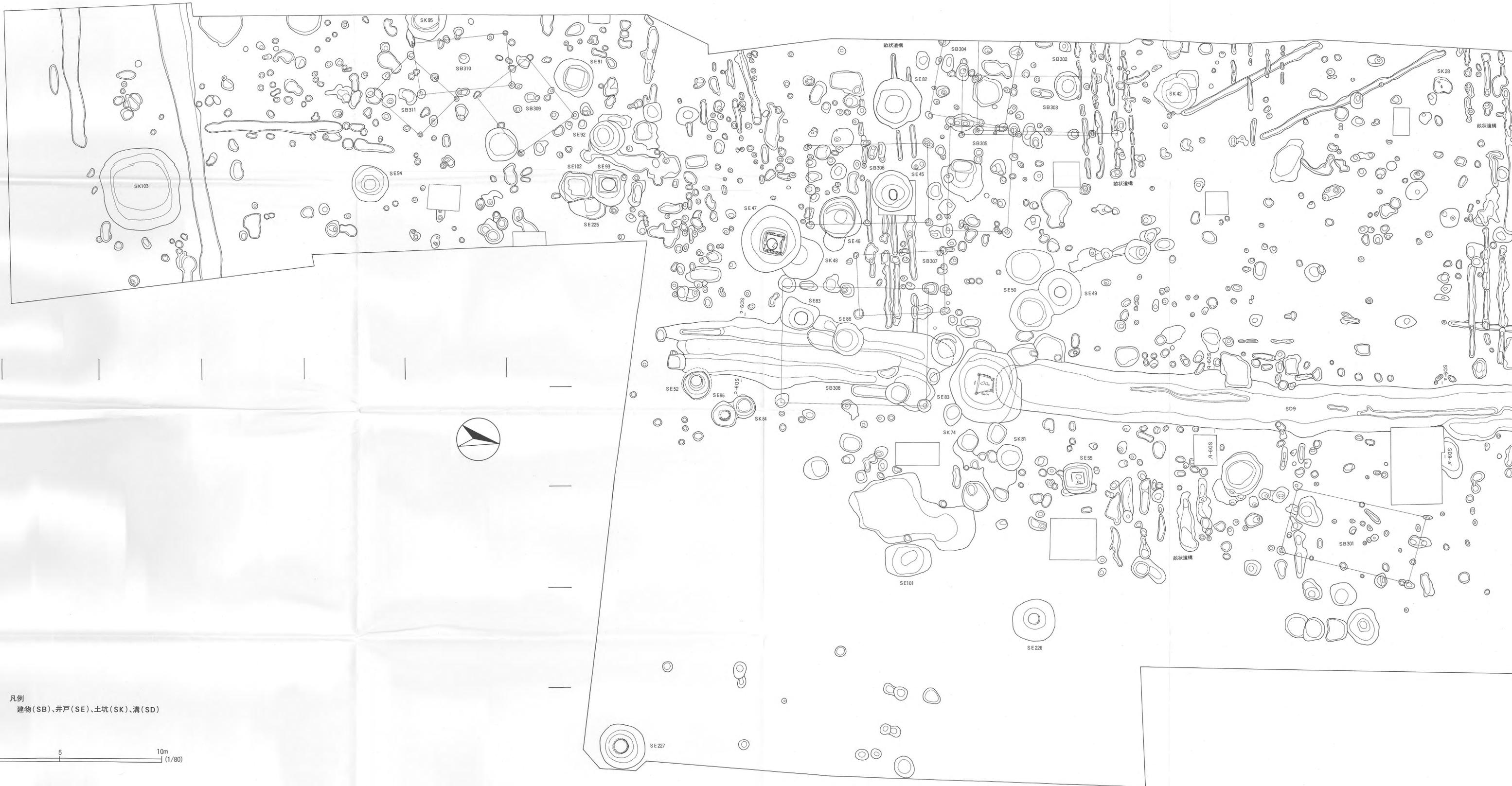
新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書

1991年3月30日発行

編集・執筆 渡辺ますみ

発行 亀田町教育委員会
新潟県中蒲原郡亀田町泉町3丁目4番5号
電話 (025)381-2111番

印刷 株式会社第一印刷所
新潟県新潟市和合町2丁目4番18号
電話 (025)285-7161番



凡例
 建物(SB)、井戸(SE)、土坑(SK)、溝(SD)

0 5 10m (1/80)

付図 亀田町荒木前遺跡 遺構全体図